

本学卒業生に対する大学教育の成果に関する調査研究
－卒業生に対するアンケート調査結果－

報 告 書

平成20年1月

北 海 道 大 学

高等教育機能開発総合センター

キャリアセンター

目次

はじめに	1
I. 調査の概要	1
1. 調査目的	1
2. 実施時期	1
3. 対象学部・研究科	1
4. 調査対象者	1
5. 調査手法	1
6. 調査項目	1
7. 実施主体	2
8. 調査票回収状況	2
II. 集計結果	3
1. 回答者の属性	3
1.1 学部・研究科	3
1.2 世代	3
1.3 学部・研究科ごとの世代	3
1.4 性別	4
1.5 高校卒業時及び現在の居住地	4
1.6 経歴	5
2. 学部生活・大学院生活及び現在の仕事との関連	7
2.1 北海道大学に進学した理由(学部のみ)	7
2.2 学部を選択した理由(学部のみ)	9
2.3 学部教育及び大学院教育における勉強の熱心度	11
2.4 勉強以外で積極的に取り組んだもの	15
2.5 学部時代及び大学院時代にもっと熱心に取り組んでおけばよかった授業	19
2.6 学部及び大学院で学んだことが現在の仕事に役立っているか	22
2.7 学部・大学院で得たもの	27
2.8 学部及び大学院卒業後の進路	30
2.9 学部及び大学院での専門分野と現在の仕事との関連性	32
3. 就職活動や最初の仕事, 現在の仕事について	37
3.1 就職に当たって重視したこと	37
3.2 転職・離職の有無, 勤続年数別離職率	38
3.3 転職・離職の理由	39
3.4 現在の就業状況	40
3.5 現在の仕事の業種	40
3.6 年収	43
3.7 仕事, 生活の満足度	46
4. 仕事をする上での能力について	50
4.1 現在の仕事上, 重要な能力	50
4.2 現在, 仕事をする上で不足している能力	53

4.3 北海道大学においてもっと育成すべき能力	55
4.4 4.1～4.3の3つの能力の比較	59
5. 現在及び今後の北海道大学との関わりについて	60
5.1 現在の北大との関わり	60
5.2 さらに勉強したいか	61
5.3 さらに勉強したい分野	62
5.4 学びたい方法	63

資料

自由回答

大学時代に受けた教育や北海道大学についての意見・感想について	65
1. 文学部・文学研究科	65
2. 経済学部・経済学研究科	68
3. 農学部・農学研究科	69
4. 工学部・工学研究科	76
アンケート調査票	93
アンケート依頼	101

はじめに

本報告書は、平成 18 年度に実施した北海道大学の卒業生に対する「本学卒業生に対する大学教育の成果に関する調査研究」のアンケート調査結果をまとめたものである。

本集計結果では、原則として設問ごとの単純集計結果と、必要に応じて、学部・研究科別または世代別のクロス集計結果を中心にとりまとめた。これらに加え、特徴的な傾向がみられるものについては、設問ごとのクロス集計をおこなった。なお、資料編として、自由回答、調査票、依頼文書などを掲載した。

I. 調査の概要

1. 調査目的

本学の卒業生に対してアンケート調査を実施し、卒業後の状況や職業生活に及ぼす大学教育の効果などを明らかにすることを目的に実施した。

2. 実施時期

平成 18 年 12 月末調査票送付

平成 19 年 1 月末調査票回収締切

3. 対象学部・研究科

文学部・文学研究科

経済学部・経済学研究科

農学部・農学研究科

工学部・工学研究科

4. 調査対象者

1986 年度、1996 年度、2001 年度の学部卒業生及び大学院修士課程修了者（卒業（修了）後、5 年、10 年、20 年目の卒業生）

5. 調査手法

各学部・研究科の同窓会の協力を得て、同同窓会の卒業生名簿をもとに、上記調査対象者に直接調査票を郵送した。

回答は返信用封筒により郵送によりキャリアセンターにて回収を行った。

6. 調査項目

- ・学生時代の勉強や生活（勉強の熱心度、勉強以外の取組み）
- ・卒業後の状況（就職活動、職業経歴など）
- ・現在の活動、仕事（現職、雇用形態など）
- ・大学教育と仕事の関係（専攻分野と仕事の関係など）
- ・大学教育に対する要望 など

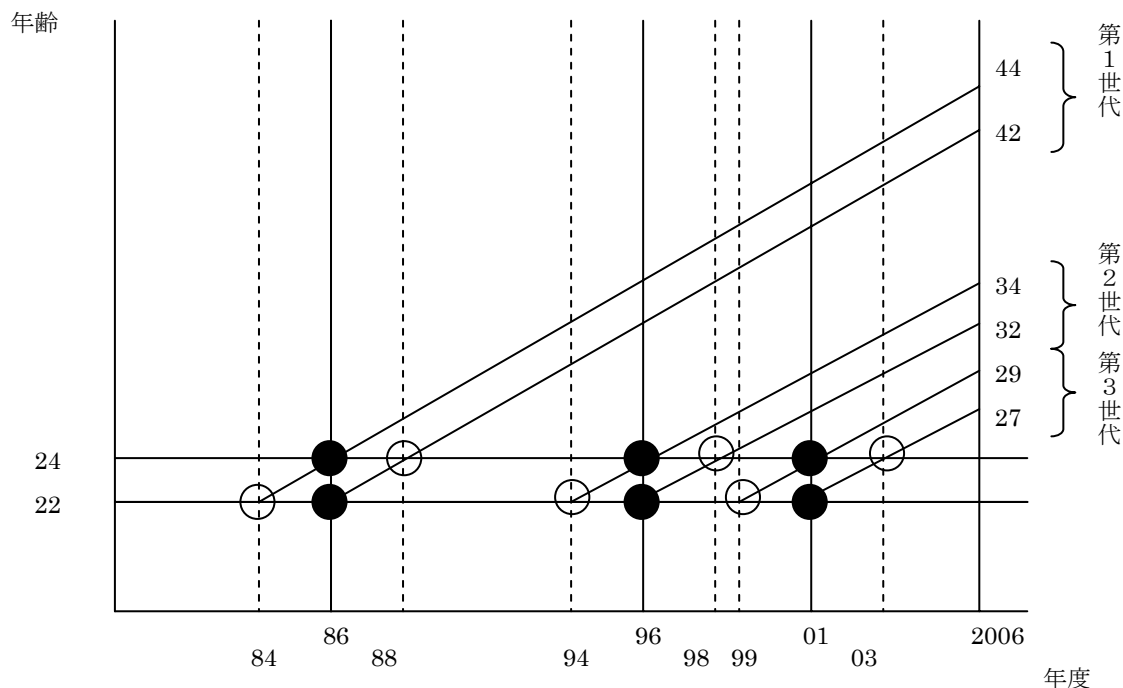
7. 実施主体

高等教育機能開発総合センター，キャリアセンター

8. 調査票回収状況

配布数 2,232，有効回収数 640（回収率 28.7%）

	郵送数	有効回収数	有効回答率
文学部・研究科	349	72	20.6
経済学部・研究科	143	33	23.1
農学部・研究科	336	116	34.5
工学部・研究科	1,404	418	29.8
不 明		1	
合 計	2,232	640	28.7



本アンケート調査の対象者は1986，1996，2001年度の学部卒業者及び大学院修士課程修了者（上記図の●）であるが，アンケート調査票では学部，大学院修士課程での経験の両方を調査していることから，北海道大学の学部，大学院修士課程を卒業（修了）している場合は，その事項（上記図の○）も調査していることとなる。

卒業年度の回答をもとに，それぞれ第1世代，第2世代，第3世代に分類し，以降のクロス集計を行った。

※上記図は22歳で学部を卒業，24歳で修士課程を修了するという年齢モデルをもとに作成しているが，実際は，浪人，留年，社会人入学等もあり，このモデルに相当しない場合もある。

Ⅱ．集計結果

1．回答者の属性

1.1 学部・研究科

図表1-1 学部・研究科別回答数

	回答数	パーセント
文学部・文学研究科	72	11.3
経済学部・経済学研究科	33	5.2
農学部・農学研究科	116	18.1
工学部・工学研究科	418	65.3
不 明	1	.2
合 計	640	100.0

1.2 世代

図表1-2 世代別回答数

	回答数	パーセント
第1世代	232	36.3
第2世代	192	30.0
第3世代	210	32.8
不 明	6	.9
合 計	640	100.0

1.3 学部・研究科ごとの世代

図表1-3 学部・研究科，世代別回答数

		学部・研究科				合計
		文	経済	農	工	
第1世代	回答数	19	11	46	156	232
	%	3.0	1.7	7.3	24.6	36.6
第2世代	回答数	20	10	41	121	192
	%	3.2	1.6	6.5	19.1	30.3
第3世代	回答数	31	12	28	139	210
	%	4.9	1.9	4.4	21.9	33.1
合計	回答数	70	33	115	416	634
	%	11.0	5.2	18.1	65.6	100.0

1.4 性別（問2）

回答の約8割が男性である。文学部・文学研究科では男女の比率がほぼ同じであるのに対し、工学部・工学研究科では男性の割合は約9割となっている（図表1-4）。

図表1-4 男女別、学部・研究科別回答数

		学部・研究科				合計
		文	経済	農	工	
男	回答数	38	23	78	381	520
	%	5.9	3.6	12.2	59.6	81.4
女	回答数	34	10	38	37	119
	%	5.3	1.6	5.9	5.8	18.6
合計	回答数	72	33	116	418	639
	%	11.3	5.2	18.2	65.4	100.0

1.5 高校卒業時及び現在の居住地（問3）

約半数が高校卒業時の住所¹は北海道内であるが、現在は3割弱である。また、北海道内出身者であっても、現在はその半数以上は道外に居住している（図表1-5）。

学部・研究科別にみると、農学部・農学研究科で北海道内出身者が約4分の1と最も少なくなっている。工学部・工学研究科や経済学部・経済学研究科では、北海道内出身者でも現在は北海道外に居住している者が多くなっている。しかし、農学部・農学研究科では、北海道外出身者であっても現在は北海道内に居住している者の割合が他の学部・研究科に比べ多くなっている（図表1-6）

世代別にみると、世代が若くなるほど北海道内出身者が少なくなっている（図表1-7）。

図表1-5 高校卒業時及び現在の住所の関係別回答数

			現在の住所		合計
			北海道外	北海道内	
高校卒業時 時の住所	北海道外	回答数	278	46	324
		%	43.5	7.2	50.7
	北海道内	回答数	185	130	315
		%	29.0	20.3	49.3
合計		回答数	463	176	639
		%	72.5	27.5	100.0

¹ 高校卒業時の住所（都道府県）が北海道の者を「北海道内出身者」、北海道以外の都府県の者を「北海道外出身者」とする。以下、同様

図表1-6 高校卒業時及び現在の住所の関係別回答数（学部・研究科別）

			現在の住所（道内・道外）		合計
			北海道外	北海道内	
高校卒業時の住所	文	北海道外	30.6%	11.1%	41.7%
		北海道内	13.9%	44.4%	58.3%
		合計	44.4%	55.6%	100.0%
	経済	北海道外	27.3%	0.0%	27.3%
		北海道内	30.3%	42.4%	72.7%
		合計	57.6%	42.4%	100.0%
	農	北海道外	53.9%	20.9%	74.8%
		北海道内	13.0%	12.2%	25.2%
		合計	67.0%	33.0%	100.0%
	工	北海道外	44.0%	3.3%	47.4%
		北海道内	35.9%	16.7%	52.6%
		合計	79.9%	20.1%	100.0%

図表1-7 高校卒業時及び現在の住所の関係別回答数（世代別）

			現在の住所		合計
			北海道外	北海道内	
高校卒業時の住所	第1世代	北海道外	33.6%	4.3%	37.9%
		北海道内	40.9%	21.1%	62.1%
		合計	74.6%	25.4%	100.0%
	第2世代	北海道外	44.5%	10.5%	55.0%
		北海道内	24.6%	20.4%	45.0%
		合計	69.1%	30.9%	100.0%
	第3世代	北海道外	53.3%	7.6%	61.0%
		北海道内	20.5%	18.6%	39.0%
		合計	73.8%	26.2%	100.0%

1.6 経歴（問4）

問4において、卒業生の経歴を4つの選択肢から回答してもらった。「2. 北海道大学の学部を卒業し、北海道大学の大学院修士課程を修了した」が約6割、「1. 北海道大学の学部を卒業し、大学院修士課程には進学・修了していない」が約3割となっている。学部・研究科別にみると、工学部・工学研究科では、「2. 北海道大学の学部を卒業し、北海道大学の大学院修士課程を修了した」が約4分の3を占めており、大学院修士課程への進学割合が最も高くなっているが、経済学部・経済学研究科では、「1. 北海道大学の学

部を卒業し、大学院修士課程には進学・修了していない」が8割強を占めており、学部・研究科により大きく異なっている（図表1-8）²。

図表1-8 高校卒業時及び現在の住所の関係別回答数（世代別）

		学部・研究科				合計
		文	経済	農	工	
1. 北海道大学の学部を卒業し、大学院修士課程には進学・修了していない	回答 %	46 63.9	28 84.8	47 40.5	89 21.3	210 32.9
2. 北海道大学の学部を卒業し、北海道大学の大学院修士課程を修了した	回答 %	15 20.8	4 12.1	62 53.4	317 75.8	398 62.3
3. 北海道大学の学部を卒業し、北海道大学以外の大学院修士課程を修了した	回答 %	5 6.9	1 3.0	3 2.6	1 0.2	10 1.6
4. 北海道大学以外の学部を卒業し、その後北海道大学の大学院修士課程を修了した	回答 %	6 8.3	0 0.0	4 3.4	11 2.6	21 3.3
合計	回答 %	72 100.0	33 100.0	116 100.0	418 100.0	639 100.0

² なお、本設問に対する回答をもとに、次のとおり、各設問に対する回答をお願いした。学部生活に関する設問（問5～16）については、上記の「1. 北海道大学の学部を卒業し、大学院修士課程には進学・修了していない」「2. 北海道大学の学部を卒業し、北海道大学の大学院修士課程を修了した」及び「3. 北海道大学の学部を卒業し、北海道大学以外の大学院修士課程を修了した」と回答した618人に回答を依頼した。大学院生活に関する質問（問17～25）については、「2. 北海道大学の学部を卒業し、北海道大学の大学院修士課程を修了した」及び「4. 北海道大学以外の学部を卒業し、その後北海道大学の大学院修士課程を修了した」と回答した419人に回答を依頼した。また、就職活動や仕事、現在の心境に関する質問（問26～40）については、すべての者に回答を依頼した。

2. 学部生活・大学院生活及び現在の仕事との関連

2.1 北海道大学に進学した理由（学部のみ）（問8）

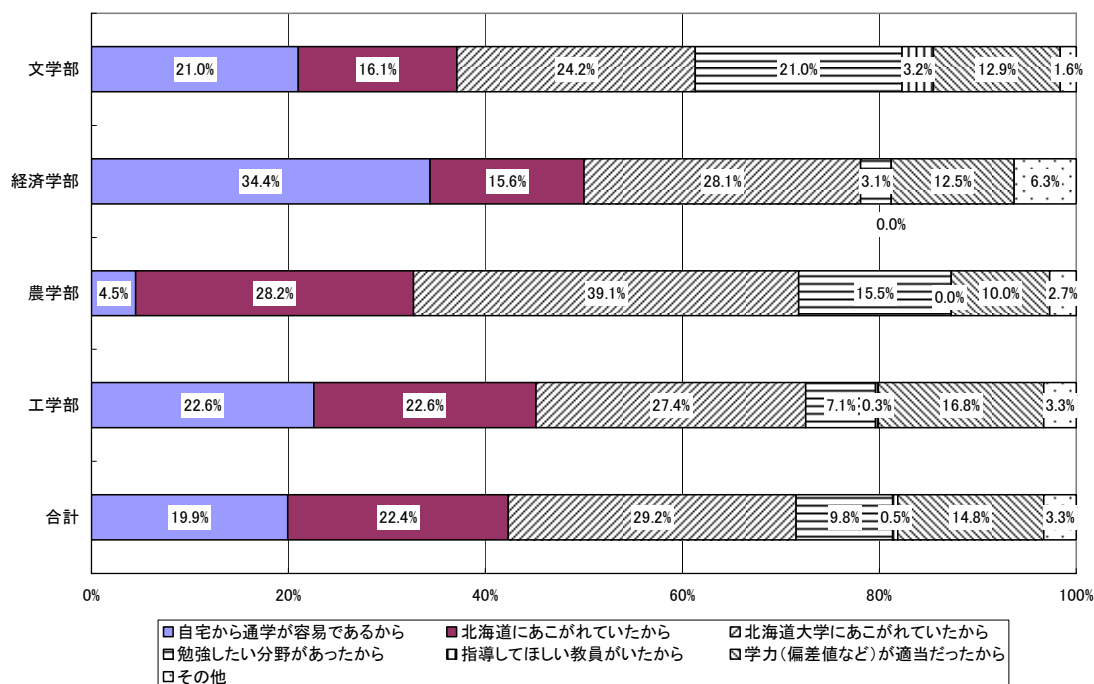
学部から北海道大学に入学した回答者に対して、北海道大学に入学した最も大きな理由を聞くと、「北海道大学にあこがれていたから」（29.2%）、「北海道にあこがれていたから」（22.4%）をあわせると約半数となっている。

学部別にみると、農学部でこの傾向が他学部 비해顕著である（図表 2-1）。

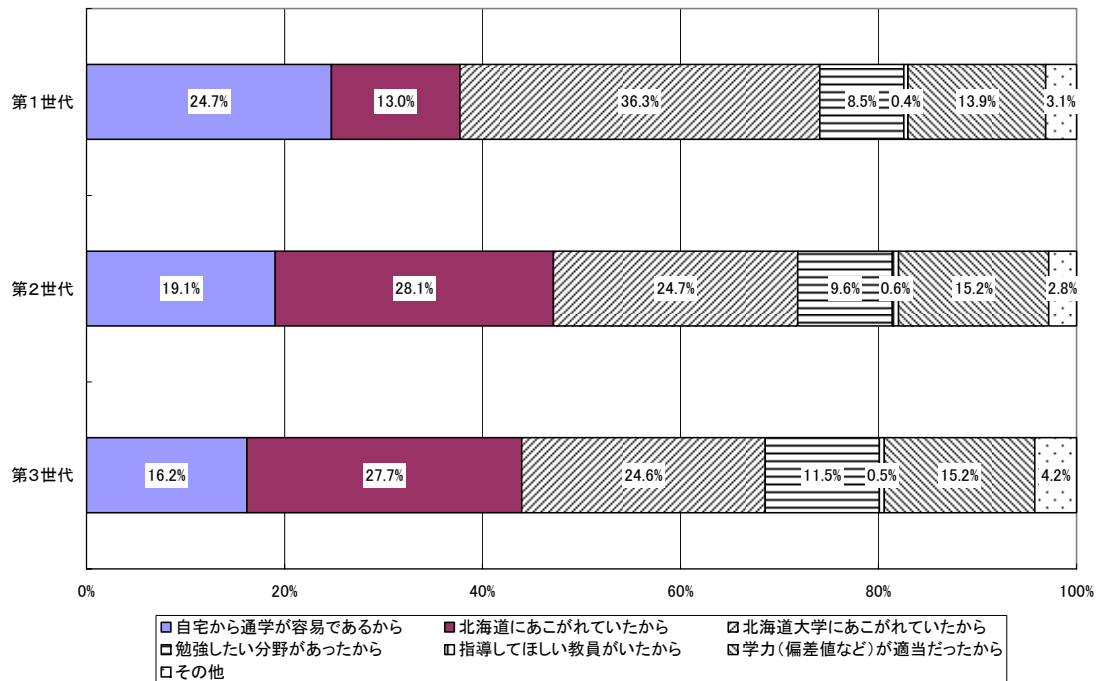
また、世代別にみると、第1世代は「北海道大学にあこがれていたから」がやや多いが、第2世代及び第3世代は「北海道にあこがれていたから」がやや多くなっている（図表 2-2）。

さらに、北海道内出身者と北海道外出身者にわけると、北海道内出身者は「自宅から通学が容易であるから」が最も多く、約4割を占めているが、北海道外出身者は「北海道にあこがれていたから」が最も多く、4割強となっている。ただし、この2つの選択肢以外には大きな差はみられない（図表 2-3）。

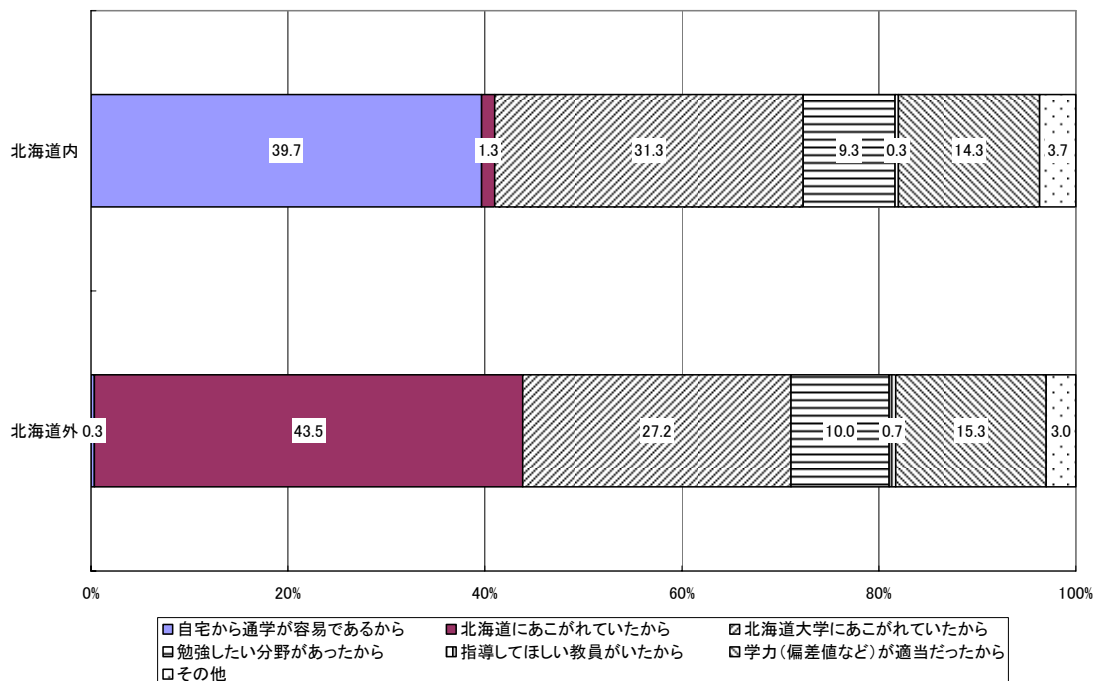
図表2-1 北海道大学に入学した理由（学部別）



図表2-2 北海道大学に入学した理由（世代別）



図表2-3 北海道大学に入学した理由（出身地別）



2.2 学部を選択した理由（学部のみ）（問9）

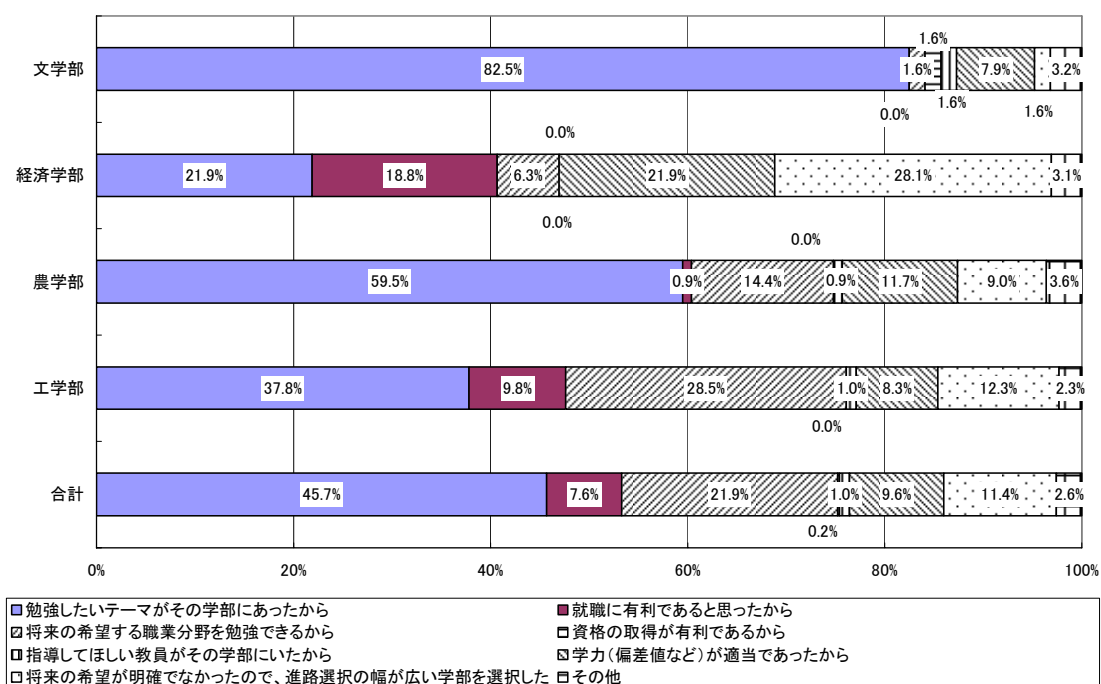
学部から北海道大学に入学した回答者に対して、その学部を選択した最も大きな理由を聞くと、「勉強したいテーマがその学部であったから」（45.7%）が約半数と最も多くなっている（図表2-4）。

学部別にみると、経済学部では「将来の希望が明確でなかったため、進路選択の幅が広い学部を選択した」「学力（偏差値など）が適当であったから」が他の学部に比べ多くなっているのに対し、文学部や農学部では「勉強したいテーマがその学部であったから」が、工学部では「将来の希望する職業分野が勉強できるから」が他の学部に比べ多くなっており、調査対象の4つの学部の回答が大きく異なっている。

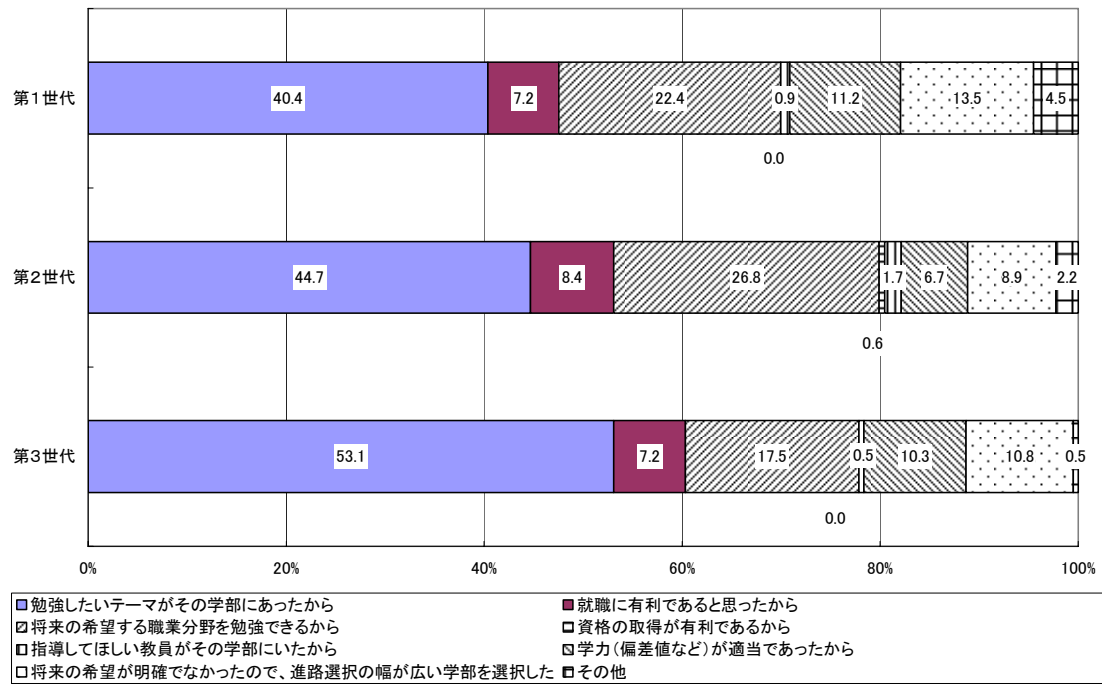
また、世代別にみると、若い世代ほど「勉強したいテーマがその学部であったから」が増加している。反面、「将来の希望する職業分野が勉強できるから」が少なくなっているのが特徴である。つまり、将来の職業ではなく、大学での勉強のテーマで学部を選択する傾向がやや強くなっているといえる（図表2-5）。

さらに、出身地別にみると、北海道外出身者の方が「勉強したいテーマがその学部であったから」が北海道内出身者に比べ多くなっている（図表2-6）。

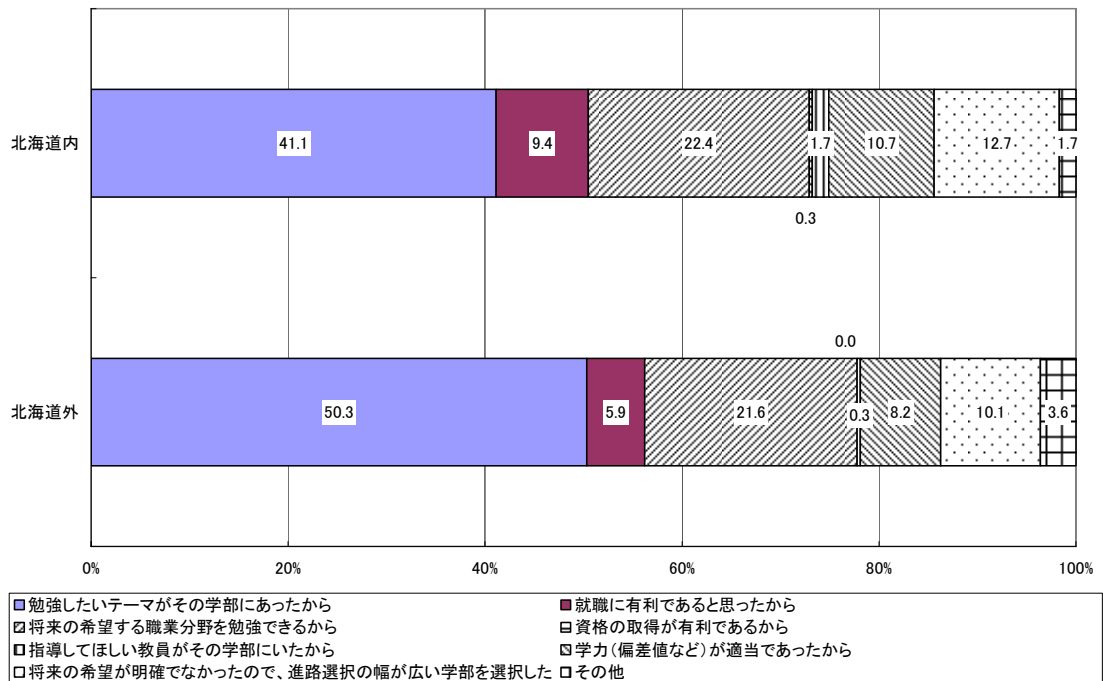
図表2-4 学部を選択した理由（学部別）



図表2-5 学部を選択した理由（世代別）



図表2-6 学部を選択した理由（出身地別）



2.3 学部教育及び大学院教育における勉強の熱心度（問6及び問18）

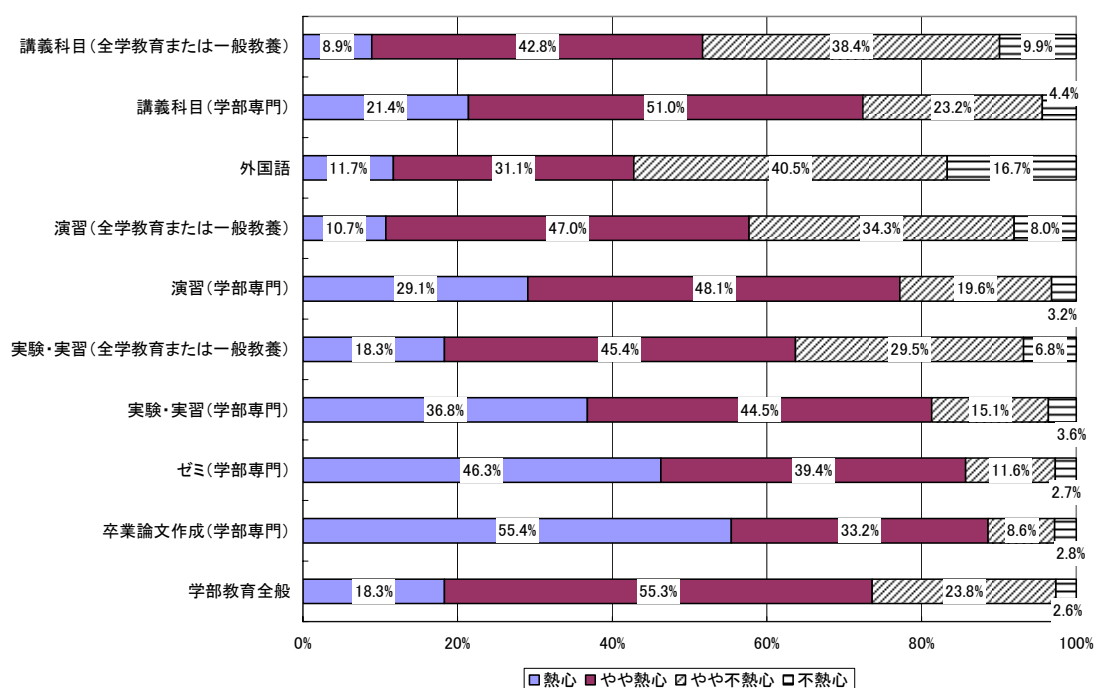
(1) 学部教育について（問6）

学部教育（全学教育または一般教養，学部専門教育）の熱心度について，科目（9種類）ごと及び学部教育全般について，4段階で評価をしてもらった。

まず，学部教育全般では，「やや熱心」（55.3%）が5割強となっており，「熱心」（18.3%）とあわせると，全体の約4分の3となっている。科目別にみると，外国語，講義科目（全学教育または一般教養）がやや熱心度が低くなっているのに対し，卒業論文作成（学部専門）は高くなっている（図表2-7）。

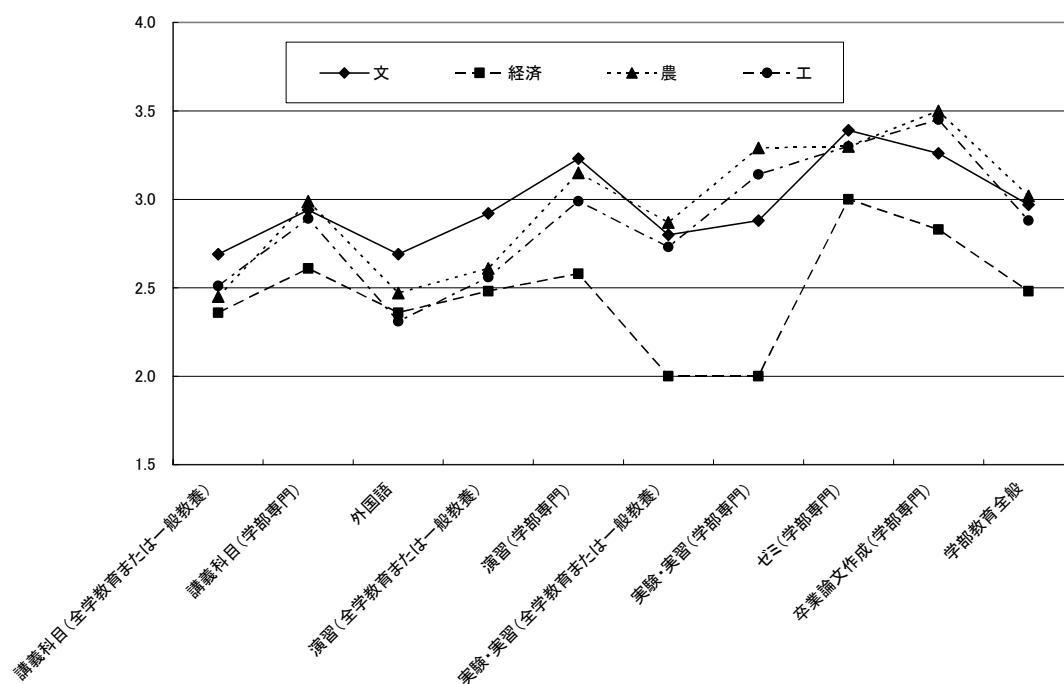
これを，学部別に平均値³でみると，経済学部ではやや低くなっている（図表2-8）。また，世代別にみると，大きな差はみられないが，外国語については第3世代でやや高くなっている（図表2-9）。これは，近年の国際化の進展や外国語の重要性の意識の高まり，外国語教育の充実とも関連があると思われる。

図表2-7 学部における科目別の勉強の熱心度

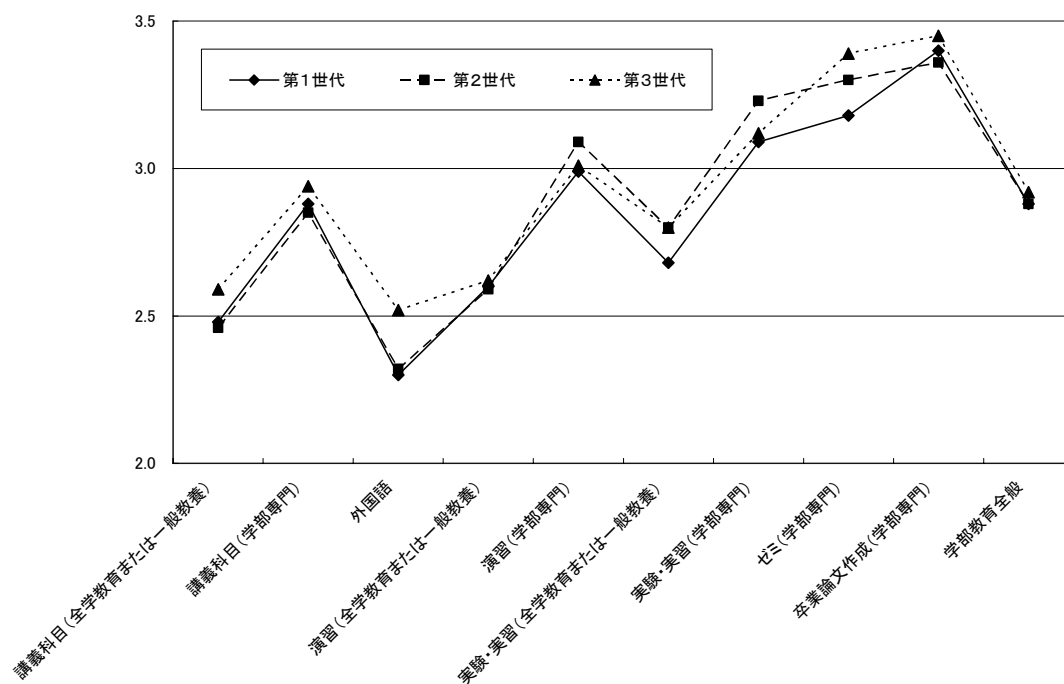


³平均値は，（熱心）＝4，（やや熱心）＝3，（やや不熱心）＝2，（不熱心）＝1として算出

図表 2-8 学部における科目別の勉強の熱心度（学部別平均値）

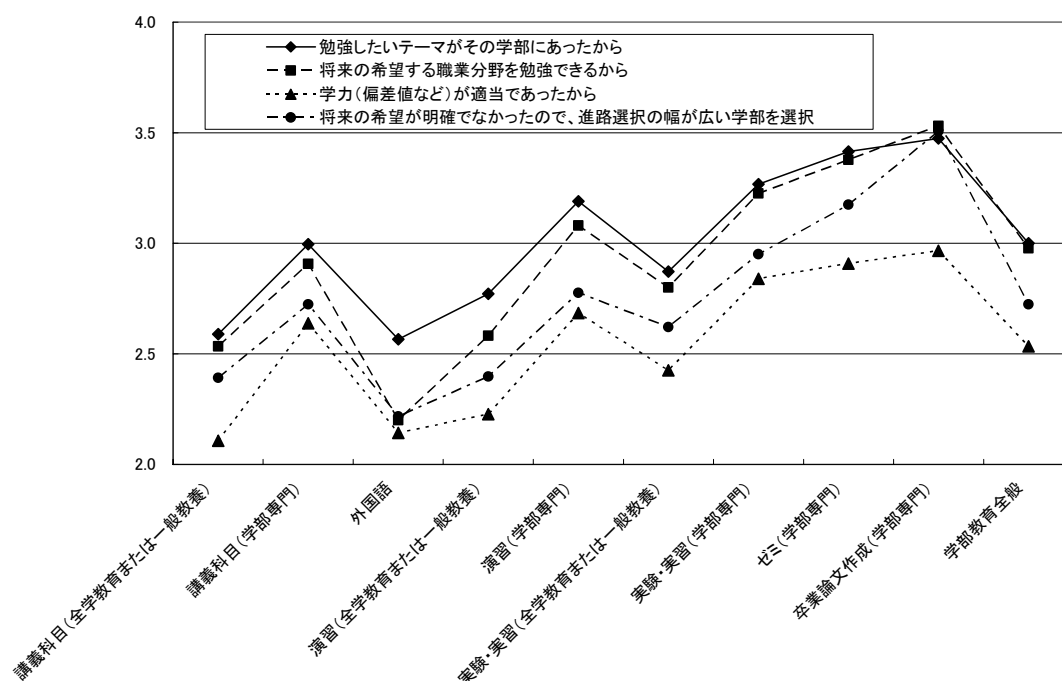


図表 2-9 学部における科目別の勉強の熱心度（世代別平均値）



学部教育の熱心度を、2.2 でみた学部を選んだ理由別にみると、「学力（偏差値など）が適当であったから」「将来の希望が明確でなかったので、進路選択の幅が広い学部を選択した」などどちらかといえば明確な理由がなく学部を選択した学生はやや熱心度が低くなっている（図表 2-10）。

図表 2-10 学部入学理由別勉強の熱心度（平均値）



(注) 学部の入学理由の選択肢は8つあるが、そのうち、回答数が多かった上記4つのみ記載している。

(2) 大学院修士課程の教育について（問 18）

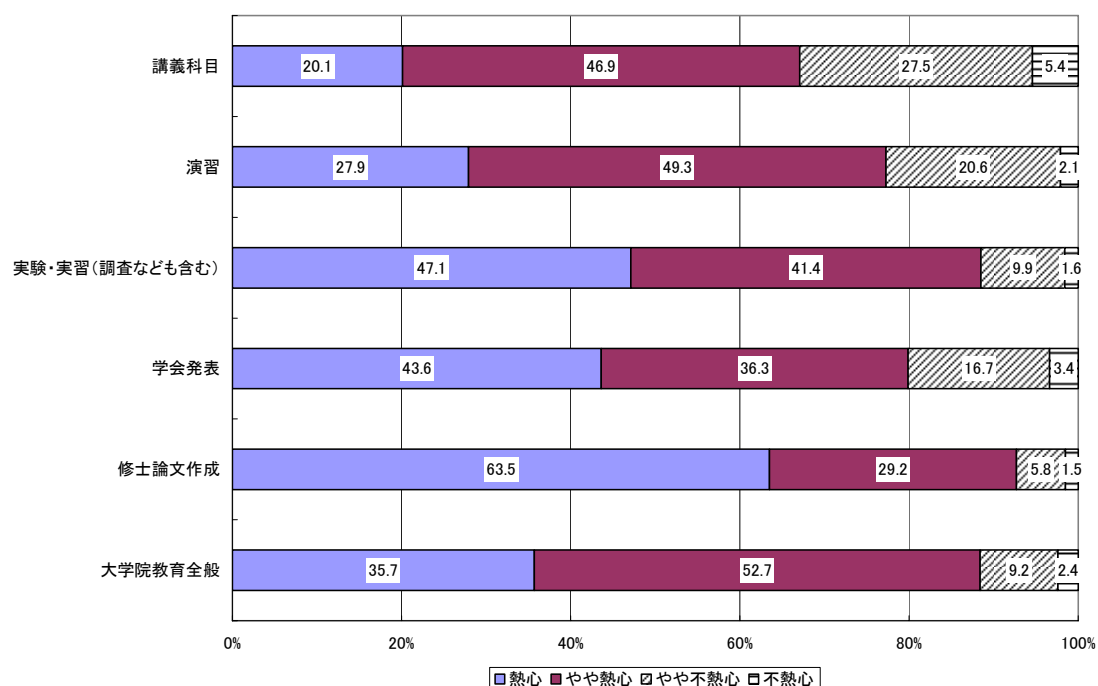
大学院修士課程の教育の熱心度について、科目（5種類）ごと及び大学院教育全般について、4段階で評価をしてもらった。

大学院教育全般では、「やや熱心」（52.7%）が5割強となっており、「熱心」（35.7%）とあわせると、9割強となっている。学部と比べると、大学院の方が熱心に勉強をしているといえる。科目別にみると、講義科目においてやや熱心度が低くなっている（図表 2-11）。

研究科別⁴にみると、農学研究科の方が講義科目を除き、熱心度はやや高くなっている。また世代別にみると、大きな差はみられないが、若い世代ほど学会発表の熱心度が高くなっている（図表 2-12）。

⁴ 文学研究科、経済学研究科は回答数が少ないため、大学院研究科別の集計、分析については、農学研究科及び工学研究科のみを対象とする。以下、同様

図表 2-11 大学院における科目別の勉強の熱心度



図表 2-12 大学院における科目別の勉強の熱心度（研究科別，世代別平均値）

		講義科目	演習	実験・実習 (調査なども含む)	学会発表	修士論文作成	大学院教育全般
研究科	農学研究科	2.62	3.24	3.59	3.28	3.64	3.31
	工学研究科	2.83	2.96	3.29	3.17	3.51	3.18
世代	第1世代	2.73	2.99	3.30	3.09	3.55	3.18
	第2世代	2.85	3.05	3.34	3.18	3.50	3.22
	第3世代	2.85	3.02	3.38	3.32	3.57	3.23
合 計		2.82	3.03	3.34	3.20	3.55	3.22

(3) 学部教育と大学院教育の熱心度の関係について

学部教育に比べ、大学院の方が、熱心度は高くなっているが、学部、大学院とも回答があった 393 人について、学部教育と大学院教育の熱心度の関連をみた。これによると、学部教育における熱心度が高い学生ほど、大学院にもおいても熱心度が高いという関連がみられた。ただし、学部時代に「やや不熱心」であった者も、そのうち、約7割が大学院では「熱心」「やや熱心」となっており、大学院で熱心に勉強していることがわかる（図表 2-13）。

図表 2-13 学部と大学院の熱心度の関係（クロス集計）

			大学院教育全般				
			不熱心	やや不熱心	やや熱心	熱心	合計
学部 教育 全般	不熱心	回答数	1	1	3	1	6
		%	16.7	16.7	50.0	16.7	100.0
	やや不熱心	回答数	5	24	47	18	94
		%	5.3	25.5	50.0	19.1	100.0
	やや熱心	回答数	2	10	135	69	216
		%	0.9	4.6	62.5	31.9	100.0
	熱心	回答数	0	2	26	49	77
		%	0.0	2.6	33.8	63.6	100.0
	合計	回答数	8	37	211	137	393
		%	2.0	9.4	53.7	34.9	100.0

2.4 勉強以外で積極的に取り組んだもの（問 7 及び問 19）（複数回答）

(1) 学部時代（問 7）

勉強以外で学生時代に積極的に取り組んだと思うものを複数回答してもらった。これによると、「部活動、サークル活動」（60.9%）、「アルバイト」（44.1%）は4～6割程度が積極的に取り組んだと回答しているが、その他の項目はいずれも1割未満である。

これを学部別にみると、農学部で「部活動、サークル活動」と回答した学生が7割を超えており、他学部に比べ多くなっているのに対し、「アルバイト」が少なくなっている。一方、「特になし」と回答した者が文学部で約2割となっており、他学部に比べ多くなっている（図表 2-14）。

また、世代別にみると、世代間では大きな差はないが、第2世代及び第3世代では「アルバイト」、「海外旅行」がやや多くなっている（図表 2-15）。

図表 2-14 学部時代に勉強以外で積極的に取り組んだもの（学部別）

（複数回答，％）

	文学部	経済学部	農学部	工学部	合計
部活動、サークル活動	43.9	63.6	72.3	60.1	60.9
アルバイト	48.5	51.5	33.9	45.5	44.1
ボランティア	6.1	0.0	1.8	3.0	2.9
インターンシップ	0.0	0.0	0.9	0.5	0.5
留学	1.5	3.0	0.9	0.2	0.6
海外旅行	10.6	0.0	8.0	5.2	6.1
北海道大学以外での勉強	7.6	12.1	2.7	2.2	3.4
その他	9.1	9.1	13.4	4.7	6.9
特になし	18.2	9.1	4.5	14.4	12.6

図表 2-15 学部時代に勉強以外で積極的に取り組んだもの（世代別）

（複数回答，％）

	第 1 世代	第 2 世代	第 3 世代
部活動、サークル活動	57.3	63.0	62.1
アルバイト	36.1	48.9	49.0
ボランティア	3.5	1.1	4.0
インターンシップ	0.4	0.5	0.5
留学	0.0	1.6	0.5
海外旅行	1.8	7.6	9.6
北海道大学以外での勉強	2.2	5.4	2.0
その他	6.6	8.7	6.1
特になし	18.9	6.5	11.6

(2)大学院時代（問 19）

学部時代と同様の設問で大学院時代についての結果をみると、「部活動，サークル活動」（31.3%）、「アルバイト」（35.7%）は3～4割程度が積極的に取り組んだと回答しているが，その他の項目はいずれも1割未満である。この傾向は学部時代とほぼ同様であるが，「部活動，サークル活動」は学部よりも少なくなっており，また，「特になし」は学部よりも多くなっている。これは，部活動，サークル活動は学部で終了し，大学院では勉強中心の生活を送っていたと考えられる（図表 2-16）。

研究科別にみると，学部同様，農学研究科で「アルバイト」が少なくなっているが，その他の項目では研究科による大きな違いはみられない。また，世代別にみると，第1世代で他の世代に比べ，「部活動，サークル活動」「アルバイト」が少なくなっており，「特になし」が多くなっているのが特徴的である（図表 2-17）。

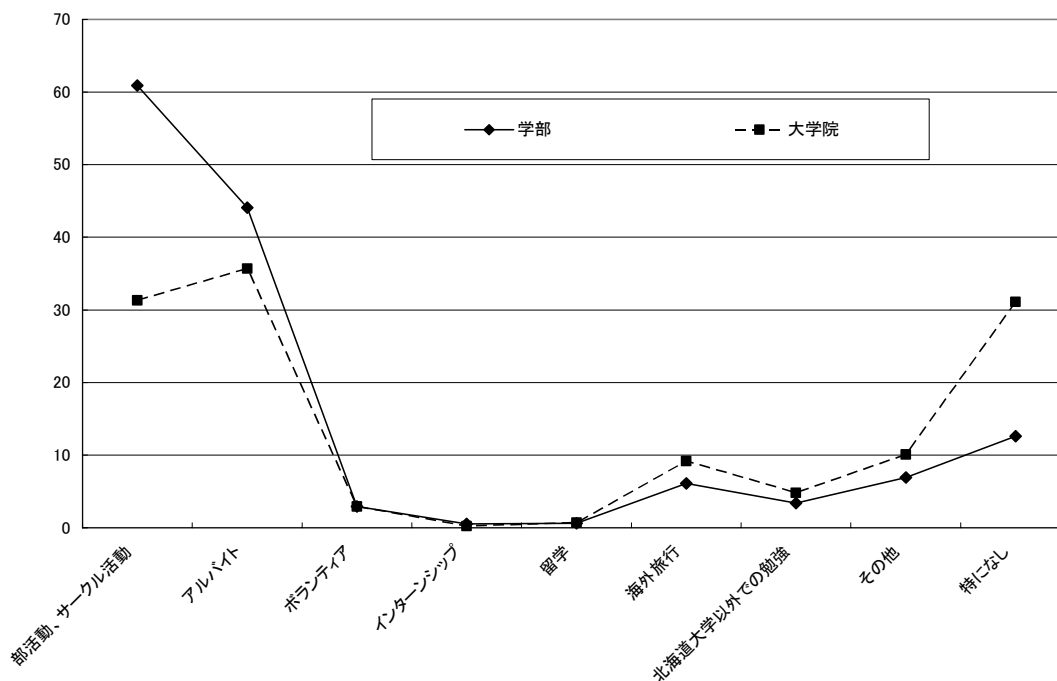
(3)出身地との関係

勉強以外で学生時代に積極的に取り組んだものと出身地との関係について，積極的に取り組んだという回答が多かった「部活動，サークル活動」「アルバイト」及び「特になし」についてみることにする。

これによると，学部では，北海道外出身の方が「部活，サークル活動」に積極的に取り組んでいる割合が高くなっている。一方，「アルバイト」については，北海道内出身の方が高くなっている。また，「特になし」と回答した学生は北海道内出身の方が高くなっている。

また，大学院でも，学部の同様の傾向はみられるが，学部のような出身地による有意な差はアルバイト以外ではみられなかった（図表 2-18）。

図表 2-16 勉強以外で積極的に取組んだもの（学部と大学院の比較）



図表 2-17 大学院時代に勉強以外で積極的に取り組んだもの（研究科別，世代別）

（複数回答，%）

	合計	研究科		世代		
		農学研究科	工学研究科	第 1 世代	第 2 世代	第 3 世代
部活動，サークル活動	31.3	32.8	33.4	26.6	30.4	36.6
アルバイト	35.7	19.7	39.0	32.0	38.5	36.6
ボランティア	2.9	4.9	2.5	4.7	1.5	2.8
インターンシップ	0.2	0.0	0.3	0.0	0.0	0.7
留学	0.7	0.0	0.6	0.0	0.7	0.7
海外旅行	9.2	13.1	8.4	3.9	13.3	10.3
北海道大学以外での勉強	4.8	8.2	3.1	3.1	4.4	4.8
その他	10.1	13.1	9.0	7.8	10.4	11.7
特になし	31.1	31.1	30.3	38.3	29.6	26.9

図表 2-18 部活動・サークル活動，アルバイト等に積極的に取組んだ人の割合（出身地別）

	学 部			大学院	
	北海道内	北海道外		北海道内	北海道外
部活動，サークル活動	49.3%	72.1%	***	27.3%	35.2%
アルバイト	50.0%	38.5%	**	41.4%	30.6%
特になし	19.3%	6.1%	***	33.8%	28.2%

（注）*** : $p < 0.001$, ** : $p < 0.01$, * : $p < 0.05$ 。以下，同様

(4)勉強の熱心度との関係

勉強以外で学生時代に積極的に取り組んだものと勉強の熱心度の関係をみる。つまり、勉強以外のことに積極的に取り組むことによって、勉強への影響があったかどうかという視点である。以下では、積極的に取り組んだという回答が多かった「部活動、サークル活動」と「アルバイト」について、これらの活動に積極的に取り組んだと回答した学生とそうでない学生の勉強の熱心度の平均値に差があるかどうかをみた。

学部では、部活動、サークル活動に積極的に取り組んだ学生は全学教育や講義科目を中心にやや熱心度が低くなっているが、学部専門の演習、ゼミ、卒業論文作成においては有意な差はみられなかった。アルバイトに積極的に取り組んだ学生は学部教育全般でやや熱心度が低くなっているが、有意な差ではない（図表 2-19）。つまり、部活動、サークル活動を積極的に取り組むことにより全学教育や講義科目においてやや勉強の熱心度が低くなる傾向がみられるものの全体的には勉強の熱心度には影響を与えていない。アルバイトについてもほとんどの項目で影響はみられなかった。

大学院では、部活動、サークル活動に積極的に取り組んだ学生の方がやや熱心度が高くなっているが、有意な差ではない。アルバイトでは、積極的に取り組んだ学生の方が勉強の熱心度がやや低くなっている（図表 2-20）。

図表 2-19 部活動・サークル活動、アルバイトに積極的に取り組んだ人とそうでない人の勉強の熱心度の比較（平均値）（学部）

	部活動，サークル活動			アルバイト	
	はい	いいえ		はい	いいえ
講義科目（全学教育または一般教養）	2.41	2.66 ***		2.45	2.56
講義科目（学部専門）	2.81	3.02 **		2.82	2.96 *
外国語	2.30	2.50 **		2.41	2.35
演習（全学教育または一般教養）	2.53	2.71 **		2.54	2.65
演習（学部専門）	2.98	3.11		2.99	3.06
実験・実習（全学教育または一般教養）	2.69	2.85 *		2.74	2.76
実験・実習（学部専門）	3.09	3.23		3.14	3.15
ゼミ（学部専門）	3.27	3.33		3.30	3.29
卒業論文作成（学部専門）	3.41	3.42		3.39	3.43
学部教育全般	2.84	2.98 *		2.83	2.94

（注）はい：積極的に取り組んだと回答した者，いいえ：積極的に取り組んだと回答しなかった者。図表 2-20，2-38 も同じ

図表 2-20 部活動・サークル活動、アルバイトに積極的に取り組んだ人とそうでない人の勉強の熱心度の比較（平均値）（大学院）

	部活動，サークル活動		アルバイト	
	はい	いいえ	はい	いいえ
講義科目	2.87	2.80	2.76	2.85
演習	3.09	3.00	2.97	3.06
実験・実習（調査なども含む）	3.41	3.31	3.25	3.39
学会発表	3.22	3.19	3.19	3.20
修士論文作成	3.59	3.53	3.50	3.58
大学院教育全般	3.26	3.20	3.10	3.28 *

2.5 学部時代及び大学院時代にもっと熱心に取り組んでおけばよかった授業（問 16 及び問 24）

(1)学部時代（問 16）

学部時代にもっと熱心に取り組んでおけばよかったと思う授業を、勉強の熱心度（2.3）でみた9科目の中から上位3つを順位をつけて回答を得た。

これによると、外国語が最も多く、約4割の回答者が第1位にあげている。次いで、「講義科目（学部専門）」「講義科目（全学教育または一般教養）」となっている（図表 2-21）。

学部別にみると⁵、すべての学部で「外国語」が最も高くなっている。「講義科目（学部専門）」では、工学部、経済学部で高くなっているが、農学部では「講義科目（全学教育または一般教養）」の方が高くなっている（図表 2-22）。

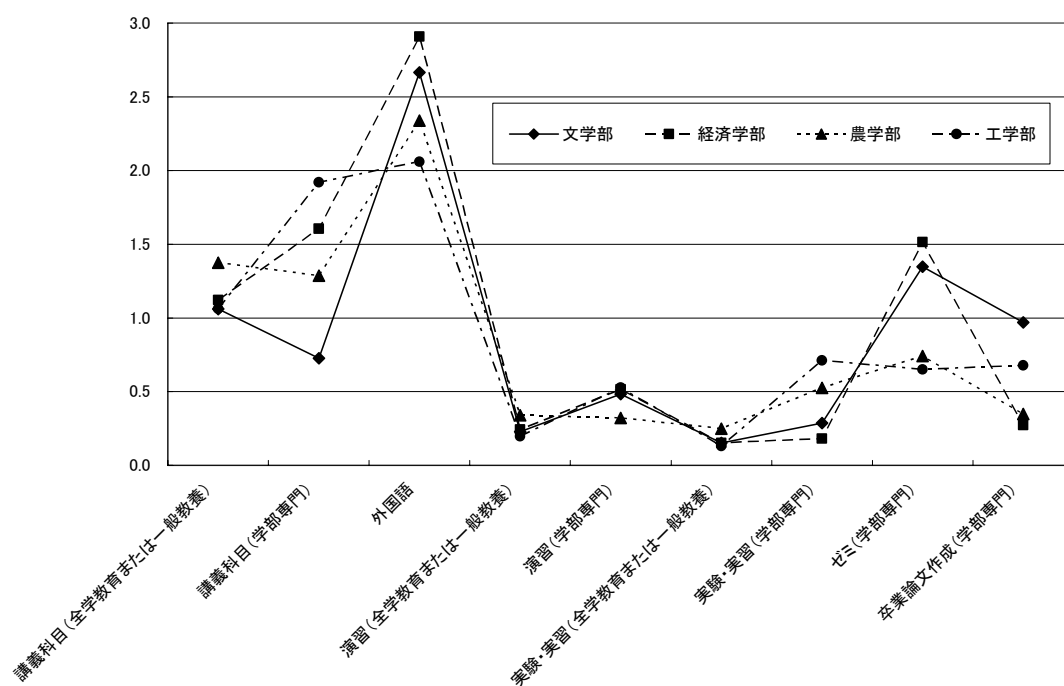
世代別では、ほとんど差はみられない（図表 2-23）。

図表 2-21 学部時代にもっと熱心に取り組んでおけばよかった授業

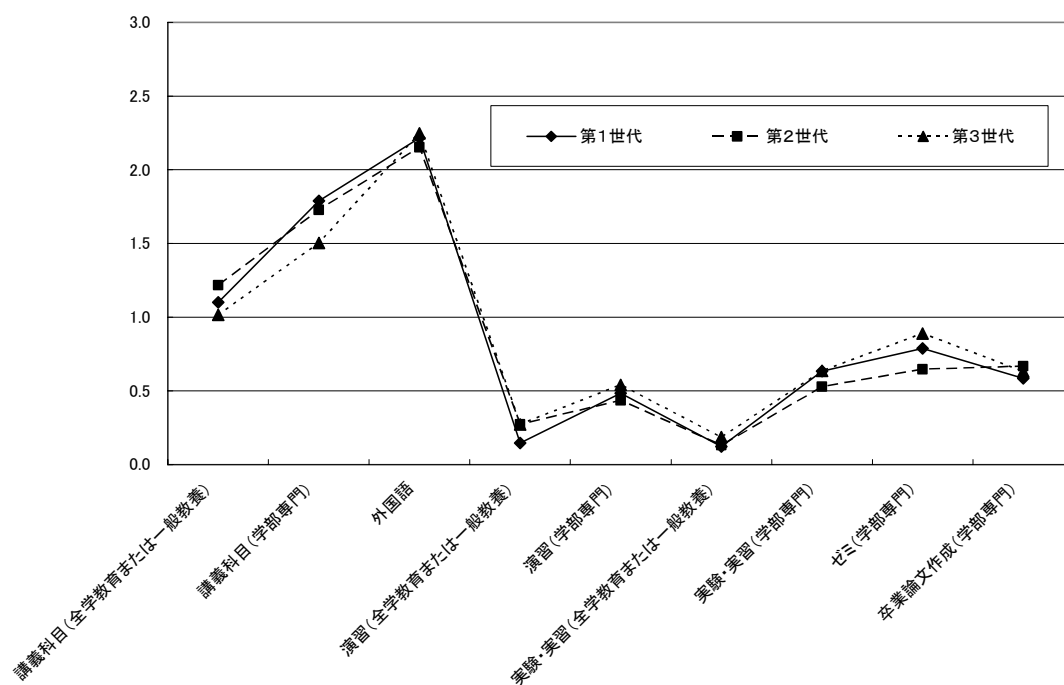
	第1位	第2位	第3位	得点
講義科目（全学教育または一般教養）	84	67	70	1.22
講義科目（学部専門）	130	107	61	1.82
外国語	206	85	87	2.42
演習（全学教育または一般教養）	5	26	37	0.25
演習（学部専門）	19	54	45	0.53
実験・実習（全学教育または一般教養）	5	15	26	0.17
実験・実習（学部専門）	29	53	68	0.66
ゼミ（学部専門）	40	78	51	0.86
卒業論文作成（学部専門）	39	45	56	0.68
その他	9	3	1	0.10

⁵ 得点は、（第1位）＝5点、（第2位）＝3点、（第3位）＝1点として計算し、回答者数で除している。つまり、全ての回答者がある項目を第1位にあげた場合はその項目の得点は5.00となる。

図表 2-22 学部時代にもっと熱心に取り組んでおけばよかった授業（学部別）



図表 2-23 学部時代にもっと熱心に取り組んでおけばよかった授業（世代別）



(2)大学院時代（問 25）

大学院修士課程においてもっと熱心に取り組んでおけばよかったと思う授業を、勉強の熱心度（2.3）でみた5科目の中から上位2つを順位をつけて回答を得た。

これによると、「講義科目」が最も高く、次いで、「実験・実習（調査なども含む）」「学会発表」となっている。

研究科別にみると、農学研究科では、「実験・実習（調査なども含む）」や「学会発表」などが高くなっているのに対し、工学研究科では「講義科目」が高くなるなど研究科によってかなり異なっている。

世代別にみると、世代が若くなるのにつれて「講義科目」や「学会発表」が高くなっている（図表 2-24）。

図表 2-24 大学院時代にもっと熱心に取り組んでおけばよかった授業

	全体			研究科		世代		
	第1位	第2位	得点	農学研究科	工学研究科	第1世代	第2世代	第3世代
講義科目	125	48	1.15	0.84	1.20	1.09	1.14	1.20
演習	31	76	0.46	0.43	0.44	0.52	0.44	0.42
実験・実習（調査なども含む）	75	66	0.79	1.06	0.76	0.81	0.76	0.78
学会発表	71	76	0.78	1.06	0.76	0.72	0.81	0.84
修士論文作成	57	61	0.63	0.31	0.65	0.58	0.70	0.57

得点は、（第1位）＝3点、（第2位）＝1点として計算し、回答者数（369）で除している。つまり、全ての回答者がある項目を第1位にあげた場合はその項目の得点は3.00となる。

(3)勉強の熱心度との関連

2.3 でみた勉強の熱心度（4段階評価）ともっと熱心に取り組めばよかった科目（順位に応じて得点化）との関係をみるため、両者の相関係数をみることにする。

学部時代では、講義科目において負の相関がみられる。つまり、あまり熱心に講義科目を受講しなかった者ほど講義科目を熱心に取り組んでおけばよかったと回答しており、卒業後に講義科目の重要性をはじめて認識している卒業生も多くいるといえる。ただし、その他の科目については明確な関係はみられなかった。もっと熱心に取り組めばよかった科目として最も回答が多かった外国語についても勉強の熱心度との関係はみられず、熱心に取り組んだ者もそうでない者ももっと熱心に取り組んでおけばよかったと回答しているといえる（図表 2-25）。

大学院においても、修士論文において負の相関がみられた。つまり、あまり熱心に修士論文作成に取り組まなかった者ほど修士論文作成を熱心に取り組んでおけばよかったと回答している。ただし、その他の科目については明確な関係はみられなかった（図表 2-26）。

図表 2-25 勉強の熱心度とともっと熱心に取り組めばよかった授業の相関関係（学部）

	相関係数
講義科目（全学教育または一般教養）	-0.091 *
講義科目（学部専門）	-0.147 ***
外国語	0.039
演習（全学教育または一般教養）	-0.076
演習（学部専門）	-0.058
実験・実習（全学教育または一般教養）	0.086
実験・実習（学部専門）	-0.044
ゼミ（学部専門）	-0.018
卒業論文作成（学部専門）	-0.067

図表 2-26 勉強の熱心度とともっと熱心に取り組めばよかった授業の相関関係（大学院）

	相関係数
講義科目	-0.048
演習	-0.007
実験・実習（調査なども含む）	-0.078
学会発表	-0.046
修士論文作成	-0.134 **

2.6 学部及び大学院で学んだことが現在の仕事に役立っているか（問 15 及び問 24）

(1) 学部時代（問 15）

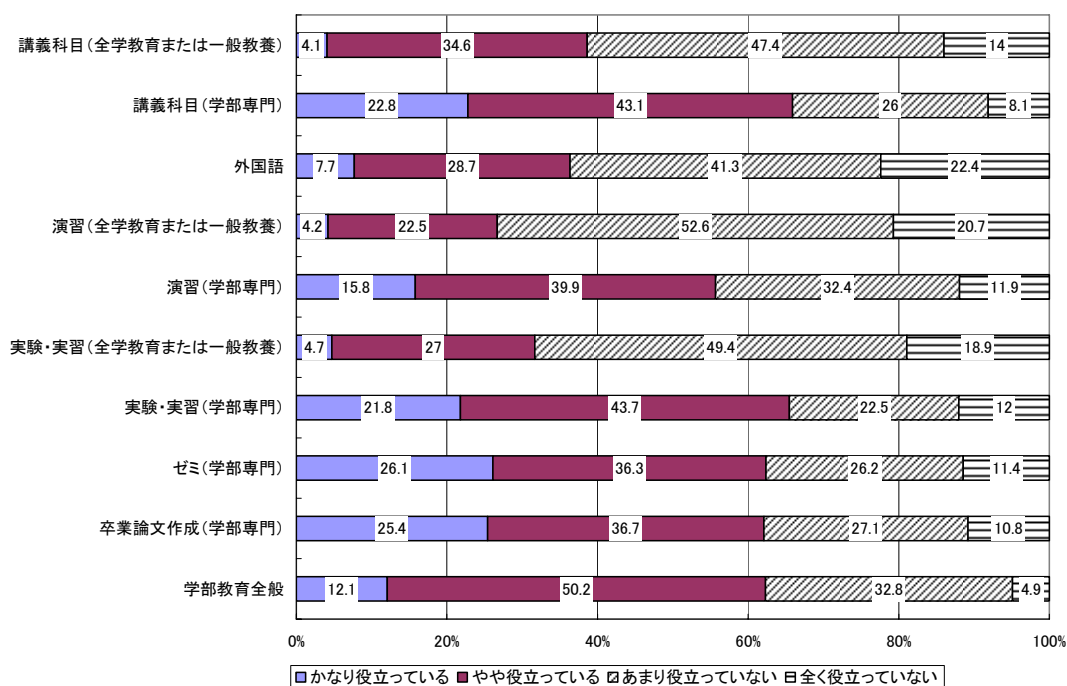
現在、仕事に就いていると回答した卒業生に対し、学部教育（全学教育または一般教養，学部専門教育）の科目（9 種類）ごと及び学部教育全般について、現在の仕事に役立っているかどうかを 4 段階で評価をしてもらった。

学部教育全般では、「やや役立っている」（50.2%）が約 5 割となっており、「かなり役立っている」（12.1%）とあわせると、3 分の 2 となっている。科目別にみると、教養関係の科目がやや低くなっている（図表 2-27）。

学部別にみると、文学部、経済学部でやや低くなっており、学部で大きく異なっている。科目別にみると、教養関係の科目は学部の相違はあまりなく、おおむね低くなっているが、学部専門科目では、文学部、経済学部が低く、農学部、工学部で高くなっている（図表 2-28）。

世代別にみると、世代が若くなるにつれて低くなっている（図表 2-29）。こうした傾向はゼミ、卒業論文作成以外の科目で共通してみられる。これは、若い世代の教育内容が現在の仕事に合わなくなっているのか、それとも、まだ、職場の中で大学教育で得た知識を活かされていないのか、あるいは役立っていると認識していないのか、さらなる検討が必要である。

図表 2-27 学部で学んだことが現在の仕事に役立っているか



図表 2-28 学部で学んだことが現在の仕事に役立っているか（学部別平均値）

	文	経済	農	工	計
講義科目（全学教育または一般教養）	2.33	2.13	2.28	2.29	2.29
講義科目（学部専門）	2.28	2.42	2.89	2.88	2.81
外国語	2.37	1.88	2.30	2.20	2.22
演習（全学教育または一般教養）	2.20	2.19	2.14	2.07	2.10
演習（学部専門）	2.27	2.42	2.71	2.61	2.60
実験・実習（全学教育または一般教養）	2.15	2.09	2.19	2.17	2.18
実験・実習（学部専門）	2.28	2.22	2.93	2.75	2.75
ゼミ（学部専門）	2.33	2.48	2.91	2.82	2.77
卒業論文作成（学部専門）	2.26	2.13	2.99	2.81	2.77
学部教育全般	2.31	2.36	2.84	2.73	2.70

平均値は、（かなり役立っている）＝4，（やや役立っている）＝3，（あまり役立っていない）＝2，（全く役立っていない）＝1として算出

図表 2-29 学部で学んだことが現在の仕事に役立っているか（世代別平均値）

	第1世代	第2世代	第3世代
講義科目（全学教育または一般教養）	2.41	2.25	2.20
講義科目（学部専門）	2.92	2.87	2.63
外国語	2.26	2.21	2.16
演習（全学教育または一般教養）	2.19	2.11	2.01
演習（学部専門）	2.64	2.73	2.42
実験・実習（全学教育または一般教養）	2.26	2.12	2.13
実験・実習（学部専門）	2.81	2.77	2.66
ゼミ（学部専門）	2.78	2.77	2.75
卒業論文作成（学部専門）	2.79	2.77	2.71
学部教育全般	2.77	2.74	2.58

(2)大学院時代（問24）

(1)の学部時代同様に、現在、仕事に就いていると回答した者に対し、大学院教育の科目（5種類）ごと及び大学院教育全般について、現在の仕事に役立っているかどうかを4段階で評価をしてもらった。

これによると、「やや役立っている」（47.2%）が5割弱となっており、「かなり役立っている」（27.7%）とあわせると、4分の3となっている。これを学部時代と比べるとその割合は高くなっている。科目別では、修士論文作成や学会発表が高くなっている。また、すべての科目で「かなり役立っている」と「やや役立っている」をあわせれば過半数となっている（図表2-30）。

研究科別にみると、農学研究科の方が高くなっているが、科目による違いも大きく、例えば、講義科目では、工学研究科の方が高くなっているのに対し、実験・実習（調査なども含む）、学会発表、修士論文作成などでは農学研究科の方が高くなっている。

世代別にみると、第1世代と第2世代では大きな差はないが、これらの世代と第3世代と比較すると、すべての科目で第3世代の方が低くなっている（図表2-31）。この点については(1)と同様さらなる検討が必要であろう。

(3)勉強の熱心度との関係

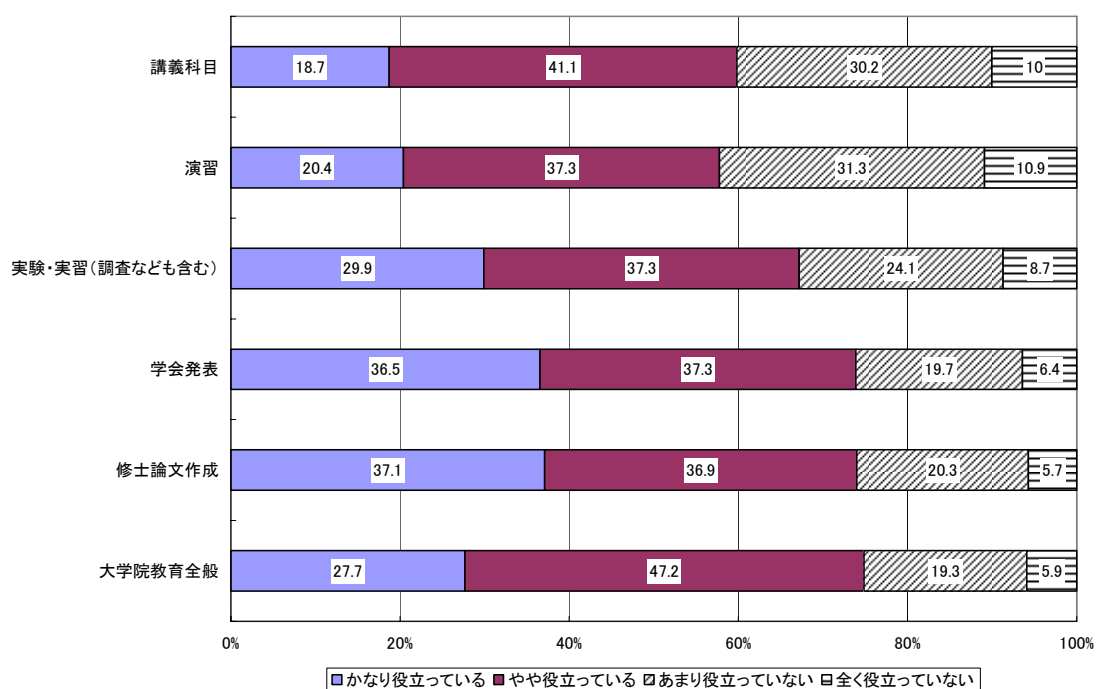
(1)及び(2)でみたように各科目が現在の仕事に役立っているかどうかは、学部時代または大学院時代に勉強を熱心に行っていたかとの関係があるかどうかをみてみる。具体的には、各科目同士で勉強の熱心度（4段階評価の平均値）と現在の仕事に役立っているか（4段階評価の平均値）の相関係数を算出した。

これによると、学部、大学院ともすべての科目において正の相関がみられた。これは役立ち度が低かった学部の教養関係の科目や大学院の講義科目についても同様である。つまり、熱心に取り組んだ者ほど、仕事をする上でその科目が役立ったと回答している（図表

2-32)。

さらに、学部・研究科別にみると、役立ち度が低かった文学部，経済学部においても正の相関がみられた。また，世代別にみると，役立ち度が低かった第3世代も学部では相関がみられなかったが，大学院では正の相関がみられた（図表 2-33）。

図表 2-30 大学院で学んだことが現在の仕事に役立っているか



図表 2-31 大学院で学んだことが現在の仕事に役立っているか（研究科，世代別平均値）

	計	研究科		世代		
		農学研究科	工学研究科	第1世代	第2世代	第3世代
講義科目	2.69	2.50	2.71	2.74	2.74	2.58
演習	2.67	2.77	2.66	2.79	2.71	2.53
実験・実習（調査なども含む）	2.88	3.21	2.81	2.94	2.93	2.79
学会発表	3.04	3.11	3.00	3.09	3.12	2.91
修士論文作成	3.05	3.12	3.02	3.09	3.15	2.93
大学院教育全般	2.97	3.09	2.93	3.06	3.02	2.81

平均値は，（かなり役立っている）＝4，（やや役立っている）＝3，（あまり役立っていない）＝2，（全く役立っていない）＝1として算出

図表 2-32 勉強の熱心度と現在の仕事に役立ったかの相関関係（学部，大学院）

学 部	講義科目（全学教育または一般教養）	0.332 ***
	講義科目（学部専門）	0.219 ***
	外国語	0.345 ***
	演習（全学教育または一般教養）	0.349 ***
	演習（学部専門）	0.271 ***
	実験・実習（全学教育または一般教養）	0.268 ***
	実験・実習（学部専門）	0.260 ***
	ゼミ（学部専門）	0.334 ***
	卒業論文作成（学部専門）	0.336 ***
	学部教育全般	0.288 ***
大 学 院	講義科目	0.371 ***
	演習	0.433 ***
	実験・実習（調査なども含む）	0.417 ***
	学会発表	0.509 ***
	修士論文作成	0.401 ***
	大学院教育全般	0.367 ***

（注）数値は勉強の熱心度（４段階評価の数値）と現在の仕事に役立っているか（４段階評価の数値）の各科目相互の２変数間の相関係数

図表 2-33 勉強の熱心度と現在の仕事に役立ったかの相関関係（学部別，世代別）

合 計		学 部	大学院
		0.288 ***	0.367 ***
学 部 ・ 研 究 科	文	0.270 *	
	経	0.412 *	
	農	0.176	0.329 *
	工	0.229 ***	0.351 ***
世 代	第 1 世代	0.413 ***	0.373 ***
	第 2 世代	0.331 ***	0.525 ***
	第 3 世代	0.110	0.209 *

（注）数値は学部教育全般（学部の場合），大学院教育全般（大学院の場合）について，勉強の熱心度（４段階評価の数値）の現在の仕事に役立っているか（４段階評価の数値）の２変数間の相関係数

2.7 学部・大学院で得たもの（問 11 及び問 20）（複数回答）

(1) 学部・大学院別

学部及び大学院で得たものをその他を含め 8 つの選択肢からの複数回答を得た。

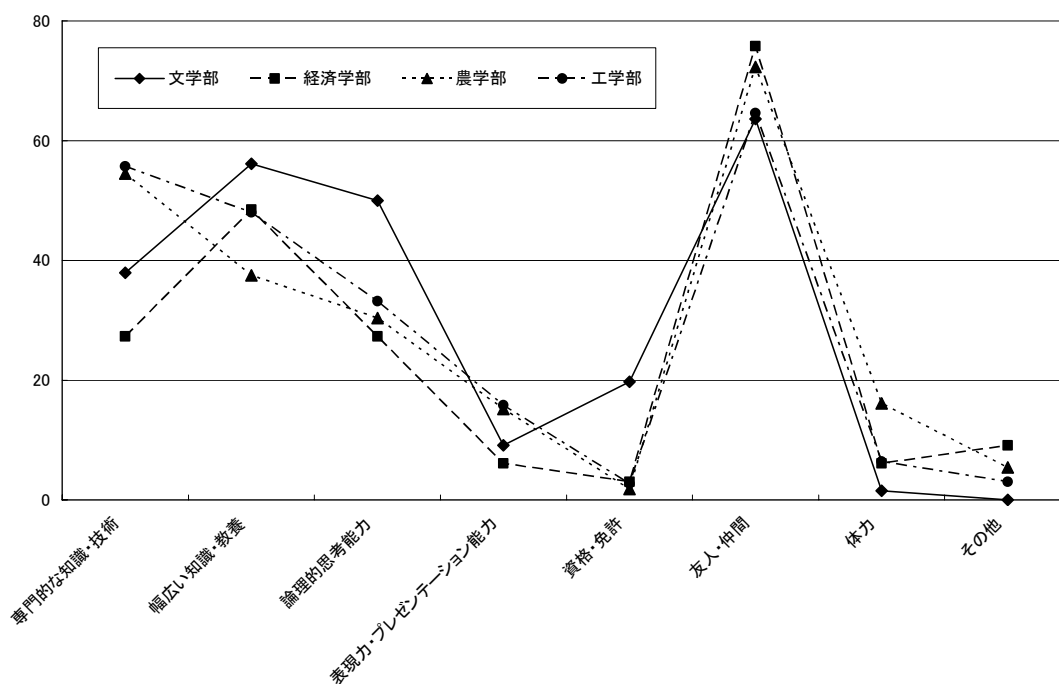
学部で得たものをみると、「友人・仲間」（66.6%）、「専門的な知識・技術」（52.3%），「幅広い知識・教養」（46.8%），「論理的思考能力」（34.1%）が高くなっているが，その他の項目の回答は少ない。

学部別にみると，農学部，工学部では「専門的な知識・技術」がより高くなっているのに対し，文学部，経済学部では「幅広い知識・教養」がより高くなっている（図表 2-34）。

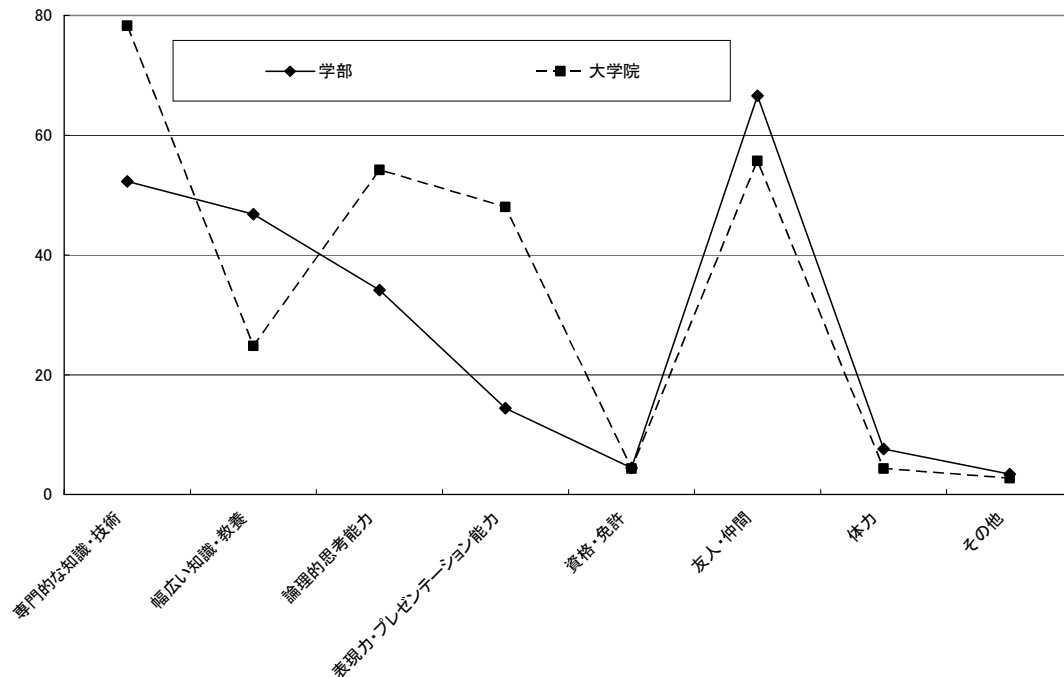
大学院で得たものをみると「専門的な知識・技術」（78.3%）「友人・仲間」（55.7%），「論理的思考能力」（54.2%），「表現力・プレゼンテーション能力」（48.0%）などが高くなっている。

学部と大学院を比較すると，特に，大学院では「表現力・プレゼンテーション能力」「専門的な知識・技術」「論理的思考能力」が高くなっている。逆に学部では「幅広い知識・教養」が高くなっている。つまり，大学院教育において，「表現力・プレゼンテーション能力」「論理的思考能力」などが大幅に向上したと認識していることがわかる（図表 2-35）。

図表 2-34 学部で得たもの（学部別）



図表 2-35 学部及び大学院で得たもの



(2) 勉強の熱心度との関係

(1)でみた大学で得た能力等とはどのような科目から得たものであるのかを推測するために、各科目の勉強の熱心度と大学で得た能力等の関係をみることにする。具体的には、(1)で回答が多かった「専門的な知識・技術」「幅広い知識・教養」「論理的思考能力」「表現力・プレゼンテーション能力」の4つについて、これらを得たと回答した者とそうでない者とで各科目の勉強の熱心度（平均値）に差があるかどうかをみた。

学部でみると、「専門的な知識・技術」「幅広い知識・教養」は得たという回答した者の方が多くの科目で有意に熱心であるという結果となった。「論理的思考能力」では得たという回答した者の方が演習、実験・実習、ゼミ、卒業論文作成などに熱心である。「表現力・プレゼンテーション能力」では得たという回答した者の方が実験・実習、ゼミ、卒業論文作成などに熱心である（図表 2-36）。

次に大学院でみると、「専門的な知識・技術」「論理的思考能力」は得たという回答した者の方が全ての科目で有意に熱心であるという結果となった。「表現力・プレゼンテーション能力」では得たという回答した者の方が実験・実習、学会発表、修士論文作成などに熱心である。なお、「幅広い知識・教養」については、熱心度に差はみられなかった（図表 2-37）。

図表 2-36 学部で得たものの有無による勉強の熱心度（平均値）の差

	専門的な知識・技術		幅広い知識・教養	
	はい	いいえ	はい	いいえ
講義科目（全学教育または一般教養）	2.59	2.42 **	2.67	2.36 ***
講義科目（学部専門）	3.10	2.67 ***	3.02	2.79 ***
外国語	2.44	2.31	2.47	2.30 *
演習（全学教育または一般教養）	2.70	2.50 **	2.75	2.47 ***
演習（学部専門）	3.22	2.81 ***	3.14	2.93 ***
実験・実習（全学教育または一般教養）	2.90	2.59 ***	2.86	2.66 **
実験・実習（学部専門）	3.34	2.91 ***	3.22	3.08 *
ゼミ（学部専門）	3.48	3.09 ***	3.37	3.23 *
卒業論文作成（学部専門）	3.58	3.23 ***	3.47	3.36
学部教育全般	3.11	2.66 ***	3.00	2.80 ***

	論理的思考能力		表現力・プレゼンテーション能力	
	はい	いいえ	はい	いいえ
講義科目（全学教育または一般教養）	2.57	2.48	2.47	2.51
講義科目（学部専門）	3.00	2.84 *	2.93	2.89
外国語	2.42	2.36	2.51	2.36
演習（全学教育または一般教養）	2.72	2.54 **	2.61	2.60
演習（学部専門）	3.21	2.94 ***	3.15	3.01
実験・実習（全学教育または一般教養）	2.88	2.69 *	2.91	2.72 *
実験・実習（学部専門）	3.27	3.08 **	3.35	3.11 **
ゼミ（学部専門）	3.54	3.17 ***	3.66	3.23 ***
卒業論文作成（学部専門）	3.53	3.35 **	3.73	3.36 ***
学部教育全般	3.03	2.82 ***	3.02	2.87 *

（注）はい：学部で得たと回答した者，いいえ：学部で得たと回答しなかった者。

（3）勉強以外で積極的に取り組んだこととの関係

大学で得た能力等は勉強以外の活動によっても得ているのではないかということを推測するために、勉強以外で積極的に取り組んだものと大学で得た能力等の関係をみることにする。具体的には、積極的に取り組んだものとして回答が多かった「部活動・サークル活動」「アルバイト」「特になし」の3つについて、これらに取り組んだ者とそうでない者とで大学で得た能力等の回答（得たか得なかったか）に差があるかどうかをみた。

「友人・仲間」については、「部活動・サークル活動」「アルバイト」を積極的に取り組んだの方が有意に高い回答割合となっており、逆に積極的に取り組んだものが「特になし」と回答した者は有意に低い回答割合となっている。また、「表現力・プレゼンテーション能力」については、回答割合そのものは高くはないが、「アルバイト」を積極的に取り組んだの方が回答割合は高くなっている（図表 2-38）。

図表 2-37 大学院で得たものの有無による勉強の熱心度の差

	専門的な知識・技術			幅広い知識・教養	
	はい	いいえ		はい	いいえ
講義科目	2.90	2.53 ***		2.89	2.80
演習	3.14	2.66 ***		3.04	3.03
実験・実習（調査なども含む）	3.44	2.99 ***		3.31	3.35
学会発表	3.25	3.04 *		3.26	3.18
修士論文作成	3.62	3.29 ***		3.51	3.56
大学院教育全般	3.31	2.90 ***		3.30	3.19

	論理的思考能力		表現力・プレゼンテーション能力		
	はい	いいえ	はい	いいえ	
講義科目	2.91	2.71 **	2.88	2.76	
演習	3.20	2.83 ***	3.11	2.96	
実験・実習（調査なども含む）	3.49	3.17 ***	3.41	3.27 *	
学会発表	3.34	3.03 ***	3.43	2.97 ***	
修士論文作成	3.69	3.38 ***	3.66	3.45 **	
大学院教育全般	3.40	3.00 ***	3.32	3.12 **	

（注）はい：大学院で得たと回答した者，いいえ：大学院で得たと回答しなかった者。

図表 2-38 勉強以外で積極的に取り組んだものと学部で得たものの関係

	部活動，サークル活動		アルバイト			特になし	
	はい	いいえ	はい	いいえ		はい	いいえ
専門的な知識・技術	53.3%	50.8%	50.2%	54.0%		59.0%	51.4%
幅広い知識・教養	46.2%	47.9%	48.0%	46.0%		44.9%	47.1%
論理的思考能力	31.8%	37.6%	35.5%	32.9%		34.6%	34.0%
表現力・プレゼンテーション能力	14.3%	14.5%	18.7%	11.0% **		12.8%	14.6%
友人・仲間	72.4%	57.4% ***	75.8%	59.2% ***		35.9%	71.0% ***

2.8 学部及び大学院卒業後の進路（問 12 及び問 21）

学部卒業後の進路をみると，約 3 割が就職し，約 6 割が北海道大学の大学院に進学している。

これを学部別にみると，経済学部では 8 割以上が就職しているのに対し，農学部，工学部では 2～3 割程度であり，多くが大学院に進学している（図表 2-39）。

世代別にみると，第 1 世代では，約 4 割が就職していたが，第 2 世代及び第 3 世代では 2 割強とその割合は小さくなり，大学院への進学が多くなっている（図表 2-40）。

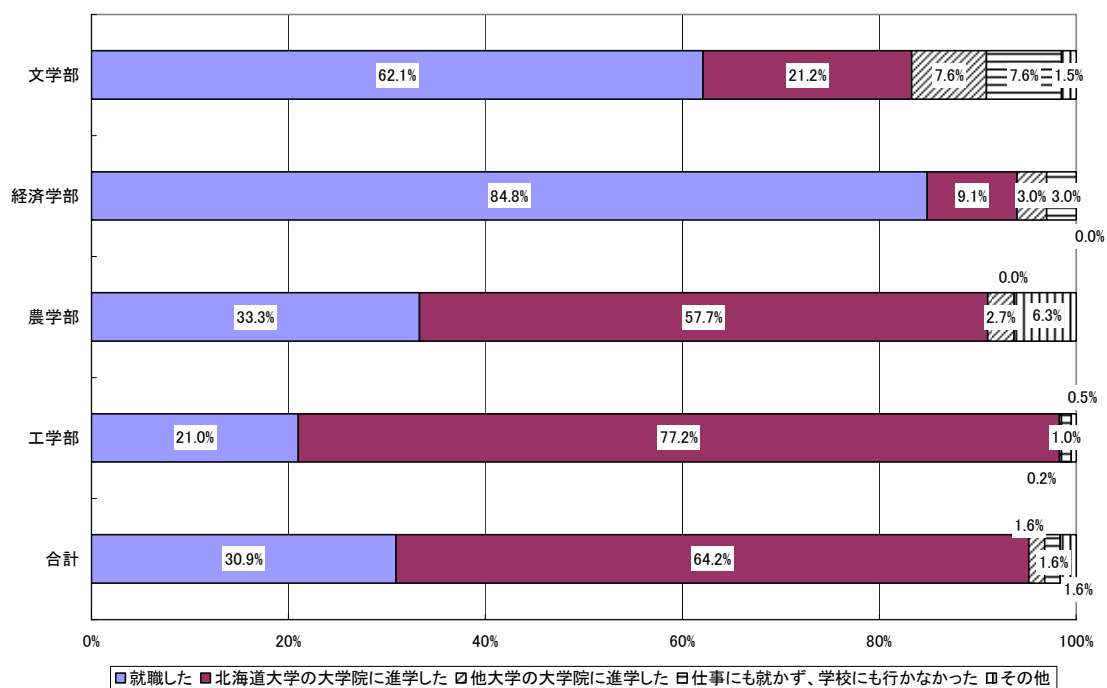
大学院修士課程修了後の進路をみると，約 8 割が就職し，約 15% が北海道大学の博士後期課程に進学している。

これを研究科別にみると，工学研究科では約 9 割が就職しているのに対し，農学研究科ではその割合は 7 割程度であり，約 3 割が北海道大学の博士後期課程に進学している（図

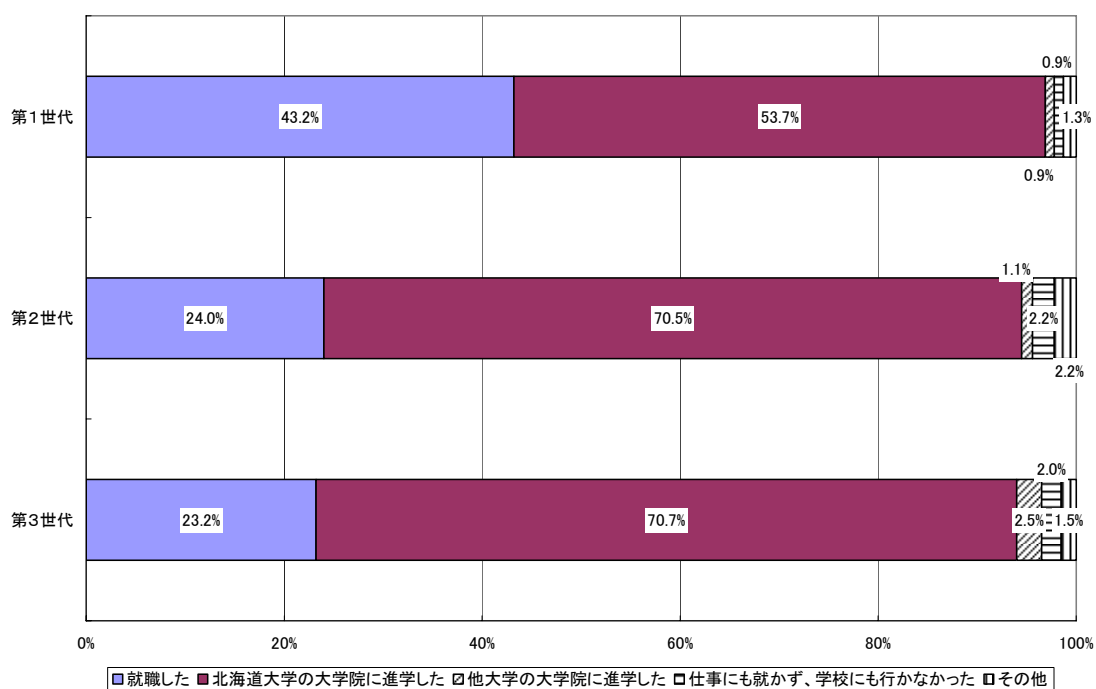
表2-41)。

また、世代別にみると、世代が若くなるほど、博士後期課程に進学する者の割合が低くなっているのが特徴的である（図表2-42）。

図表 2-39 学部卒業後の進路（学部別）



図表 2-40 学部卒業後の進路（世代別）



図表 2-41 大学院修了後の進路（研究科別）

	農学研究科		工学研究科		合計	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
就職した	42	68.9	286	88.5	337	81.2
自分で事業（自営）を始めた	1	1.6	0	0.0	1	.2
北海道大学の大学院（博士後期課程など）に進学した	18	29.5	28	8.7	61	14.7
他大学の大学院（博士後期課程など）に進学した	0	0.0	1	0.3	4	1.0
仕事にも就かず，学校にも行かなかった	0	0.0	2	0.6	3	.7
在学中の仕事を修了後も続けた	0	0.0	1	0.3	3	.7
その他	0	0.0	5	1.5	6	1.4
合計	61	100.0	323	100.0	415	100.0

図表 2-42 大学院修了後の進路（世代別）

	第 1 世代		第 2 世代		第 3 世代	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%
就職した	103	80.5	107	79.3	125	86.2
自分で事業（自営）を始めた	0	0.0	1	0.7	0	0.0
北海道大学の大学院（博士後期課程など）に進学した	24	18.8	19	14.1	14	9.7
他大学の大学院（博士後期課程など）に進学した	0	0.0	4	3.0	0	0.0
仕事にも就かず，学校にも行かなかった	0	0.0	0	0.0	3	2.1
在学中の仕事を修了後も続けた	0	0.0	2	1.5	1	0.7
その他	1	0.8	2	1.5	2	1.4
合 計	128	100.0	135	100.0	145	100.0

2.9 学部及び大学院での専門分野と現在の仕事との関連性（問 14 及び問 23）

学部時代及び大学院修士課程時代で学んだ専門分野と現在の仕事との関連性を 4 段階⁶で評価してもらった。

(1) 学部時代（問 14）

「大いに関連がある」（40.0%）「やや関連がある」（28.6%）がそれぞれ約 4 割，3 割となっており，学部の専門分野と関連ある仕事に就いているといえるが，学部による相違も大きく，農学部，工学部では「大いに関連がある」が最も多いのに対し，文学部では逆に「全く関連がない」が最も多くなっている（図表 2-43）。

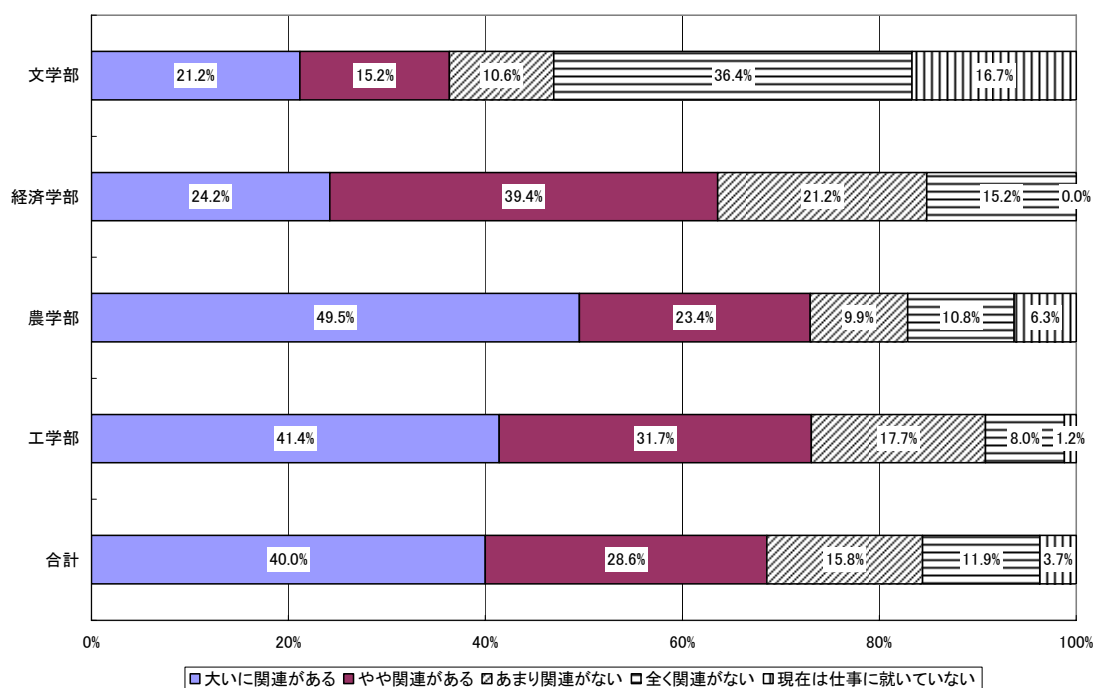
ただし，2.8 でみたように農学部，工学部の卒業生の多くは大学院に進学しており，大学院でより高度な専門知識を得ることにより専門分野と関連がある仕事に就いていると

⁶選択肢はさらに「現在は仕事についていない」の 5 つである。

いう可能性もある。そこで、この2つの学部について、学部卒業後すぐに就職した者と北海道大学の大学院に進学した者とを比較すると、工学部では学部卒も大学院卒もほとんど差はみられないが、農学部では学部卒業後すぐに就職した者の方が仕事との関連性はやや弱くなっている、ただし、それでも文学部及び経済学部の学部卒業生に比べると、関連性は強いといえる。つまり、農学部、工学部の関連性の強さは、大学院への進学によるものだけではなく、専門分野の性格、就職先、職場での仕事内容の違いによるものであると考えられる（図表 2-44）。

次に世代別にみると、第1世代及び第2世代に比べて第3世代ではその関連性が弱くなっている（図表 2-45）。これも学部別と同様に、学部卒業後すぐに就職した者と北海道大学の大学院に進学した者とを比較すると、各世代とも北海道大学の大学院に進学した者の方が関連性は強いが、第3世代では、学部卒業後すぐに就職した者も北海道大学の大学院に進学した者もその関連性は弱くなっている（図表 2-46）。

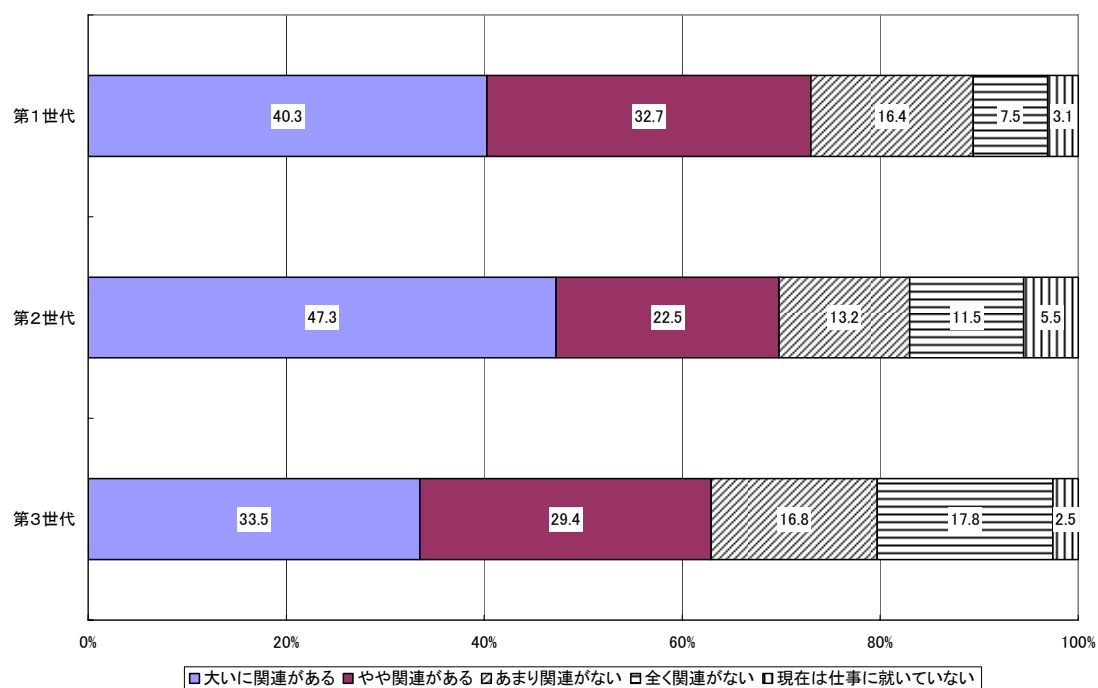
図表 2-43 学部での専門分野と現在の仕事との関連性（学部別）



図表 2-44 学部での専門分野と現在の仕事との関連性（学部別，就職した者と進学した者の比較）

			大いに関連がある	やや関連がある	あまり関連がない	全く関連がない	現在は仕事に就いていない	合計
就職した	文学部	回答数	7	4	5	20	5	41
		%	17.1	9.8	12.2	48.8	12.2	100.0
	経済学部	回答数	4	13	7	4	0	28
		%	14.3	46.4	25.0	14.3	0.0	100.0
	農学部	回答数	15	9	3	6	4	37
		%	40.5	24.3	8.1	16.2	10.8	100.0
	工学部	回答数	35	28	10	7	4	84
		%	41.7	33.3	11.9	8.3	4.8	100.0
北海道大学の大学院に進学した	文学部	回答数	4	4	0	2	4	14
		%	28.6	28.6	0.0	14.3	28.6	100.0
	経済学部	回答数	3	0	0	0	0	3
		%	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0
	農学部	回答数	34	16	6	6	2	64
		%	53.1	25.0	9.4	9.4	3.1	100.0
	工学部	回答数	130	98	59	22	1	310
		%	41.9	31.6	19.0	7.1	0.3	100.0

図表 2-45 学部での専門分野と現在の仕事との関連性（世代別）



図表 2-46 学部での専門分野と現在の仕事との関連性（世代別，就職した者と進学した者の比較）

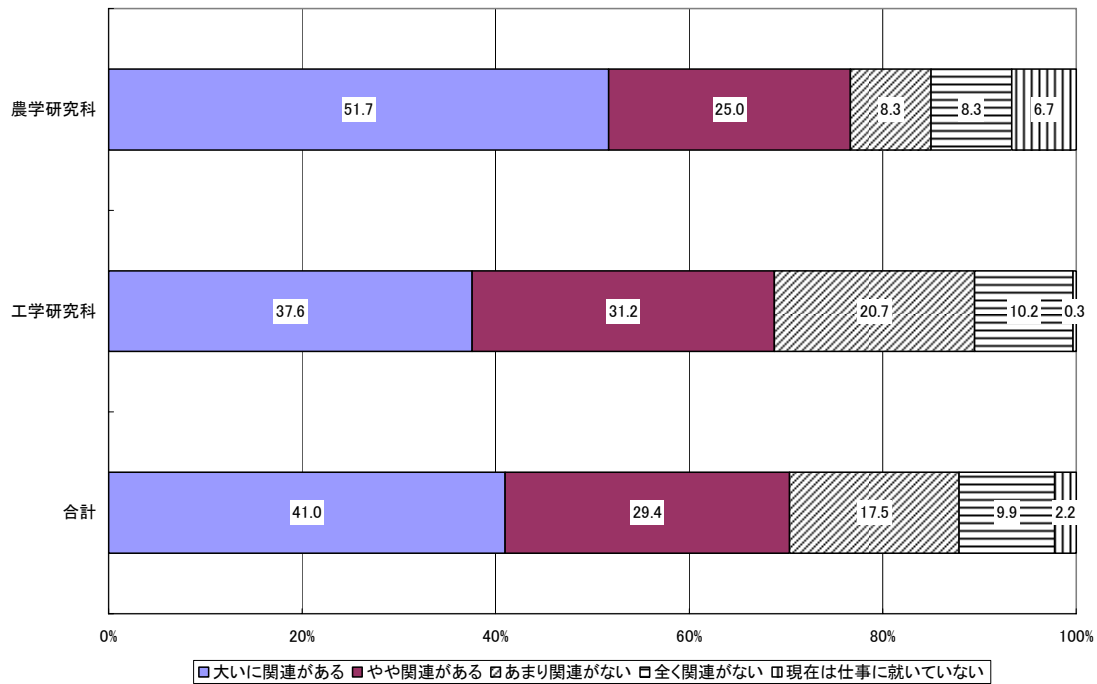
			大いに関連がある	やや関連がある	あまり関連がない	全く関連がない	現在は仕事に就いていない	合計
就職した	第1世代	回答数	33	32	15	11	6	97
		%	34.0	33.0	15.5	11.3	6.2	100.0
	第2世代	回答数	19	7	2	11	5	44
		%	43.2	15.9	4.5	25.0	11.4	100.0
	第3世代	回答数	8	15	7	15	1	46
		%	17.4	32.6	15.2	32.6	2.2	100.0
北海道大学の大学院に進学した	第1世代	回答数	55	42	20	4	1	122
		%	45.1	34.4	16.4	3.3	0.8	100.0
	第2世代	回答数	64	33	20	8	3	128
		%	50.0	25.8	15.6	6.3	2.3	100.0
	第3世代	回答数	53	40	25	18	3	139
		%	38.1	28.8	18.0	12.9	2.2	100.0

(2) 大学院時代（問 23）

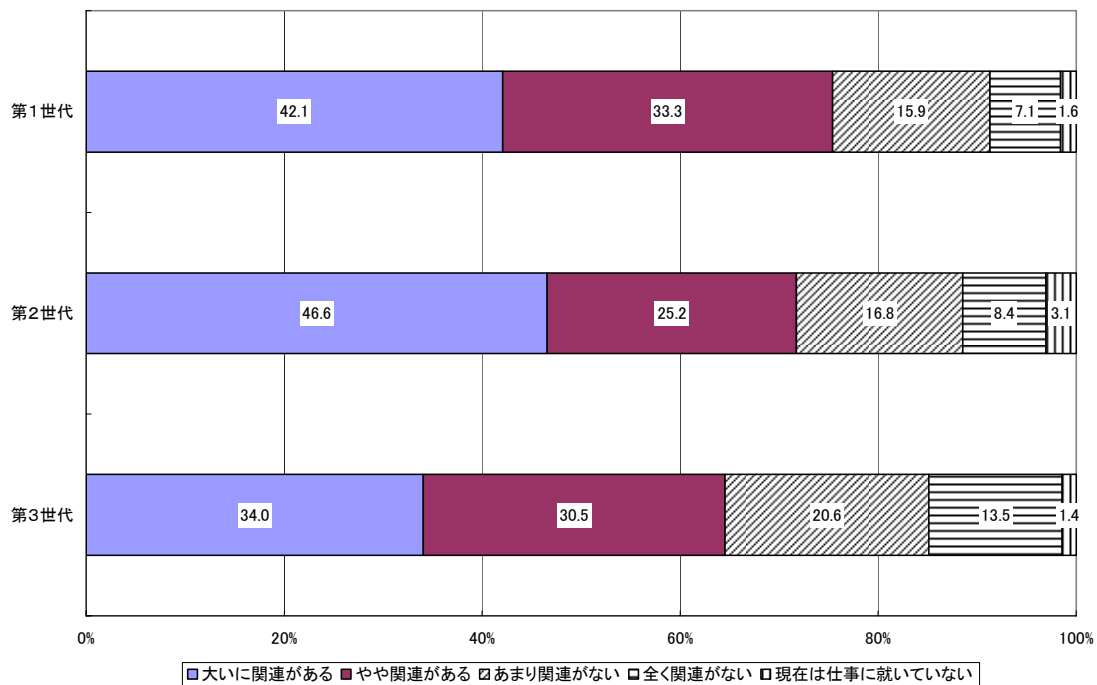
大学院修了後では、「大いに関連がある」（41.0%）、「やや関連がある」（29.4%）がそれぞれ約4割，3割となっており，大学院の専門分野と関連ある仕事に就いているといえる。

研究科別にみると，農学研究科の方が関連性は強くなっている（図表 2-47）。また，世代別にみると，第3世代では，第1世代及び第2世代に比べ関連性がやや弱くなっている（図表 2-48）。

図表 2-47 大学院での専門分野と現在の仕事との関連性（研究科別）



図表 2-48 大学院での専門分野と現在の仕事との関連性（世代別）



3. 就職活動や最初の仕事，現在の仕事について

3.1 就職に当たって重視したこと（問 26）

就職先を決定するに当たって最も重視したことを 11 の選択肢の中から 1 つだけ回答をしてもらった。

これによると、「業種」が最も多く，次いで「大学での専門分野との関連」が多くなっている。

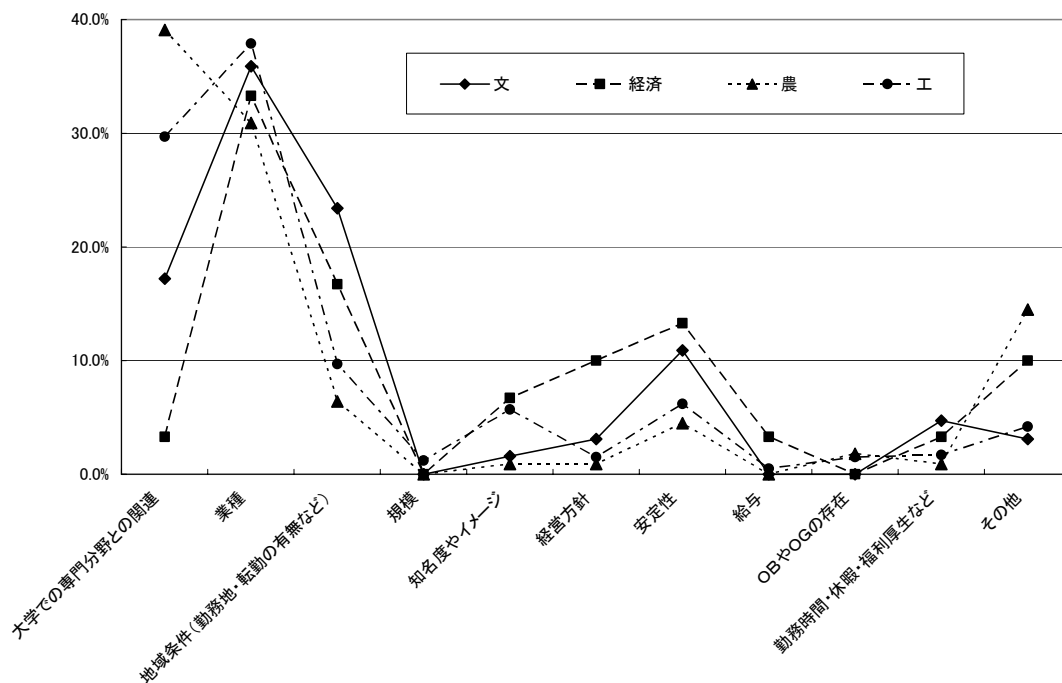
学部・研究科別にみると，文学部・文学研究科，経済学部・経済学研究科で「大学での専門分野との関連」が少なく，逆に「地域条件（勤務地・転勤の有無など）」「安定性」がやや多くなっている（図表 3-1）。

世代別にみると，世代が若くなるにつれて，「大学での専門分野との関連」が少なくなっているのが特徴的である（図表 3-2）。

また，学部卒と大学院卒にわけてみると，大学院卒は「大学での専門分野との関連」が多くなっているのに対し，学部卒は「地域条件（勤務地・転勤の有無など）」が大学院卒に比べ多くなっている。

さらに，出身地別にみると，道内出身者の方が「地域条件（勤務地・転勤の有無など）」がやや多くなっているものも，出身地による大きな違いはみられなかった（図表 3-3）。

図表 3-1 就職に当たって重視したこと（学部・研究科別）



図表 3-2 就職に当たって重視したこと（世代別）

	第 1 世代	第 2 世代	第 3 世代
大学での専門分野との関連	34.7	26.3	23.6
業種	31.1	42.5	37.2
地域条件（勤務地・転勤の有無など）	10.4	6.7	15.6
規模	0.0	1.1	1.5
知名度やイメージ	5.9	3.9	3.5
経営方針	2.7	1.1	2.0
安定性	8.1	6.1	6.0
給与	0.0	1.1	0.5
OBやOGの存在	1.8	0.6	1.5
勤務時間・休暇・福利厚生など	2.3	0.0	3.5
その他	3.2	10.6	5.0

図表 3-3 就職に当たって重視したこと（学部・大学院卒別及び出身地別）

	学部卒か大学院卒か		出身地	
	学部卒	大学院卒	北海道内	北海道外
大学での専門分野との関連	17.5	34.2	28.3	29.5
業種	35.6	36.4	32.7	39.3
地域条件（勤務地・転勤の有無など）	17.0	8.0	13.3	8.5
規模	0.5	1.0	1.0	0.7
知名度やイメージ	4.6	4.4	4.3	4.6
経営方針	4.1	1.0	1.0	3.0
安定性	9.3	5.6	9.3	4.3
給与	0.5	0.5	0.7	0.3
OBやOGの存在	2.6	0.7	1.3	1.3
勤務時間・休暇・福利厚生など	2.6	1.7	2.3	1.6
その他	5.7	6.6	5.7	6.9
合 計	100.0	100.0	100.0	100.0

3.2 転職・離職の有無、勤続年数別離職率（問 27 及び問 29）

現在の仕事が初職と同じかどうかについてみると、約 4 分の 1 が初職と異なる。つまり、転職の経験があると回答している。

学部・研究科別にみると、工学部・工学研究科でその割合が低く、文学部・文学研究科でやや高くなっている。

世代別にみると、世代が若いほど卒業後の年数は短く、転職した者の割合が高くなると考えられるが、第 2 世代で最もその割合が高くなっている。

さらに、就職の際に重視したこととの関連をみるために、回答ごとに転職経験者の割合をみた。これによると、大学での専門分野との関連を重視した者では他に比べ転職経験の

割合が高くなっている（図表 3-4）。

また、初職についた後の離職状況をみると、3 年間の離職率は 9.1%となっており、大卒の卒業後 3 年以内に約 3 割が離職するという近年の全国的な状況と比較するとその割合は低くなっている。

学部・研究科別にみると、文学部・文学研究科の離職率が他の学部 비해高くなっている。

世代別にみると、第 2 世代の離職率が高くなっている（図表 3-5）。

図表 3-4 転職・離職の有無

		転職・離職あり（%）
合 計		26.3
学部・研究 科別	文	43.9
	経済	31.3
	農	30.4
	工	21.9
世代別	第 1 世代	30.5
	第 2 世代	33.7
	第 3 世代	14.9
就職の際 に重視し たこと	大学での専門分野との関連	30.2
	業種	23.4
	地域条件（勤務地・転勤の有無など）	16.9
	知名度やイメージ	18.5
	安定性	14.6

図表 3-5 初職の 3 年目までの離職率

	計	学部・研究科				世代		
		文	経済	農	工	第1世代	第2世代	第3世代
1 年目の離職率	1.6%	4.5%	0.0%	1.8%	1.2%	1.8%	1.1%	2.0%
2 年目の離職率	2.6%	7.6%	0.0%	5.5%	1.2%	1.8%	4.9%	1.5%
3 年目の離職率	4.9%	7.6%	9.4%	4.6%	4.2%	4.4%	7.7%	3.0%
3年間の離職率	9.1%	19.7%	9.4%	11.9%	6.7%	8.0%	13.7%	6.5%

3.3 転職・離職の理由（問 28）

転職・離職の経験者をしたという回答者にその最も大きな理由を聞くと、「新たなステップアップを図るため」（32.3%）が全体の約 3 分の 1 を占めており、積極的な理由による転職・理由が多くなっている（図表 3-6）。

図表 3-6 転職・離職の理由

	回答数	パーセント
新たなステップアップを図るため	52	32.3
キャリアを買われたから	5	3.1
より大学の専門性に近かったから	6	3.7
収入面での不満	5	3.1
労働時間面での不満	4	2.5
職場の人間関係	8	5.0
自分の関心に合わなかった	15	9.3
能力不足	1	.6
解雇や倒産など	3	1.9
結婚	19	11.8
出産・育児	7	4.3
その他	36	22.4
合 計	161	100.0

3.4 現在の就業状況（問 30）

ほとんどが現在就業しており，そのうちの約 9 割が「企業・団体等で正規社員・職員として働いている」。また，就業していない者はそのほとんどが「専業主婦・主夫」「学生」である（図表 3-7）。

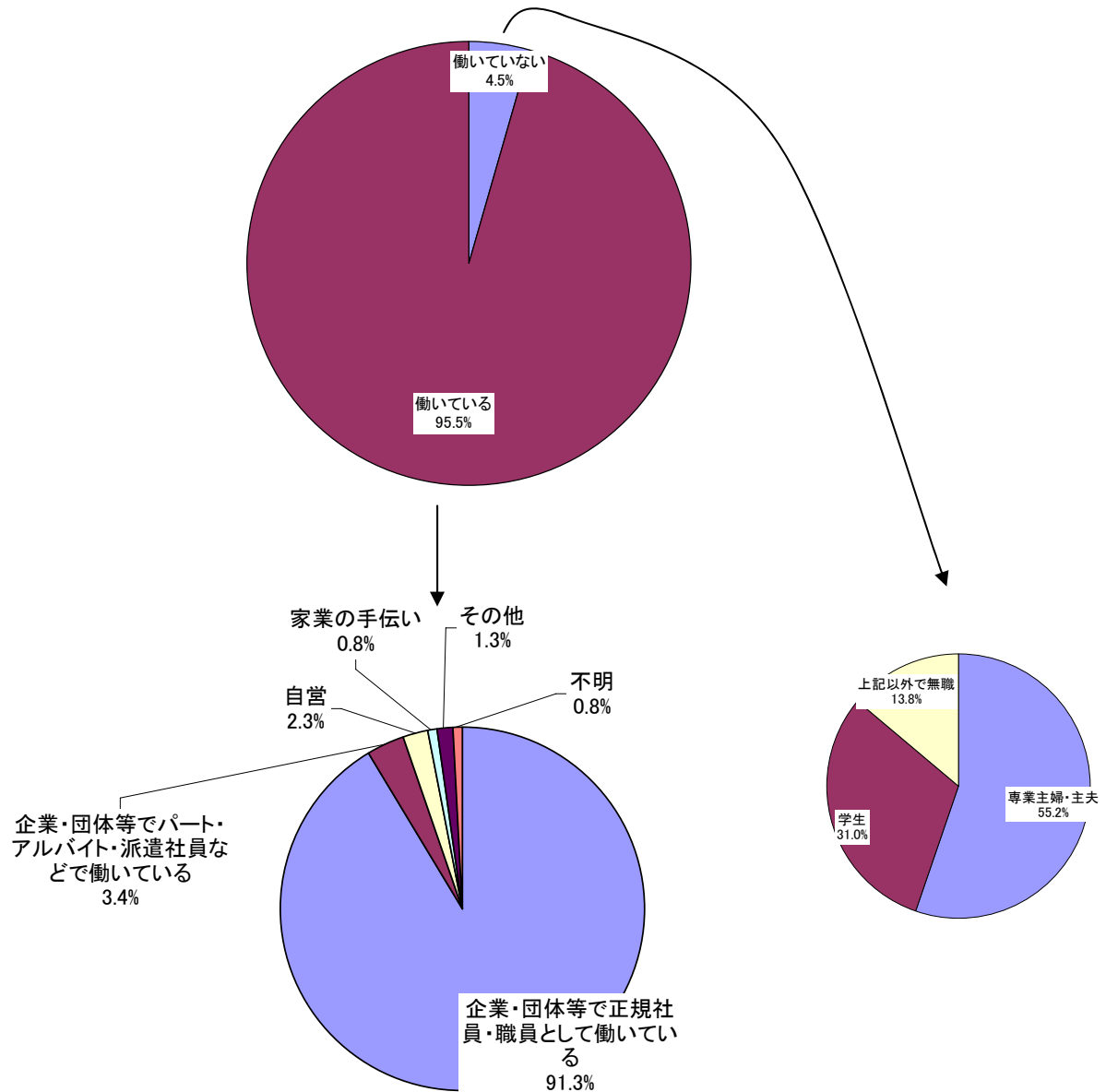
3.5 現在の仕事の業種（問 31）

現在働いている企業・団体の業種を産業大分類別にみると，「製造業」が約 3 割，「公務」が約 2 割，「教育，学習支援業」が約 1 割となっている。

学部別にみると，文学部・文学研究科では「教育，学習支援業」「情報通信業」が，経済学部・経済学研究科では「金融・保険業」が，農学部・農学研究科では「公務」が，工学部・工学研究科では，「製造業」「建設業」「情報通信業」が他の学部・研究科と比較すると多くなっているという特徴がみられる（図表 3-8）。

世代別にみると，第 3 世代では，「公務」や「教育，学習支援業」が他の世代に比べ少なくなっている（図表 3-9）。

図表 3-7 現在の就業状況



図表 3-8 現在の仕事の業種（学部・研究科別）（％）

	全体		学部・研究科別			
	回答数	％	文	経済	農	工
農林水産業	9	1.5	0.0	3.1	6.6	0.2
鉱業	5	0.8	0.0	0.0	0.0	1.2
建設業	60	9.9	1.7	0.0	2.8	13.6
製造業	186	30.5	3.3	18.8	24.5	37.0
電気・ガス・熱供給・水道業	24	3.9	0.0	6.3	0.9	5.1
情報通信業	54	8.9	11.7	3.1	3.8	10.2
運輸業	16	2.6	3.3	3.1	0.0	3.2
卸売・小売業	7	1.1	3.3	9.4	0.0	0.5
金融・保険業	10	1.6	5.0	12.5	0.9	0.5
不動産業	1	0.2	0.0	3.1	0.0	0.0
飲食店、宿泊業	1	0.2	0.0	0.0	0.9	0.0
医療、福祉	9	1.5	11.7	0.0	0.0	0.5
教育、学習支援業	61	10.0	31.7	9.4	13.2	6.1
複合サービス事業	4	0.7	1.7	6.3	0.9	0.0
サービス業（他に分類されないもの）	49	8.0	8.3	15.6	16.0	5.4
公務（他に分類されないもの）	113	18.6	18.3	9.4	29.2	16.5
合計	609	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

図表 3-9 現在の仕事の業種（世代別）（％）

	第1世代	第2世代	第3世代
農林水産業	1.3	1.1	2.0
鉱業	0.4	0.6	1.5
建設業	8.4	15.1	7.0
製造業	32.4	27.4	31.8
電気・ガス・熱供給・水道業	3.6	2.8	5.5
情報通信業	10.2	6.1	9.0
運輸業	0.4	5.0	3.0
卸売・小売業	1.3	0.6	1.5
金融・保険業	2.2	0.6	2.0
不動産業	0.4	0.0	0.0
飲食店、宿泊業	0.0	0.0	0.5
医療、福祉	0.9	0.6	2.5
教育、学習支援業	12.0	11.7	6.0
複合サービス事業	0.4	1.1	0.5
サービス業（他に分類されないもの）	4.4	10.6	10.0
公務（他に分類されないもの）	21.3	16.8	17.4
合 計	100.0	100.0	100.0

3.6 年収（問 32）

現在の年収（税込）についてみると、「400～600 万円」（34.0%）が 3 割強を占め最も多く、次いで、「600～800 万円」（23.5%）が 2 割強となっている（図表 3-10）。

世代別にみると、第 1 世代では、「1,000 万円以上」が 3 分の 1 を占め最も多い年収区分となっている（図表 3-11）。

これを 3.4 でみた就業形態について「企業・団体等で正規社員・職員として働いている」と回答した者だけについてみると、第 1 世代では、約 3 分の 2 が 800 万円以上であり、第 2 世代でも約半数が 600 万円以上となっている。第 3 世代では、「400～600 万円」が最も多くなっている（図表 3-12, 3-13）。

学部卒，大学院卒に分けてみると，すべての世代で大学院卒の方が収入が高くなっている（図表 3-14）。

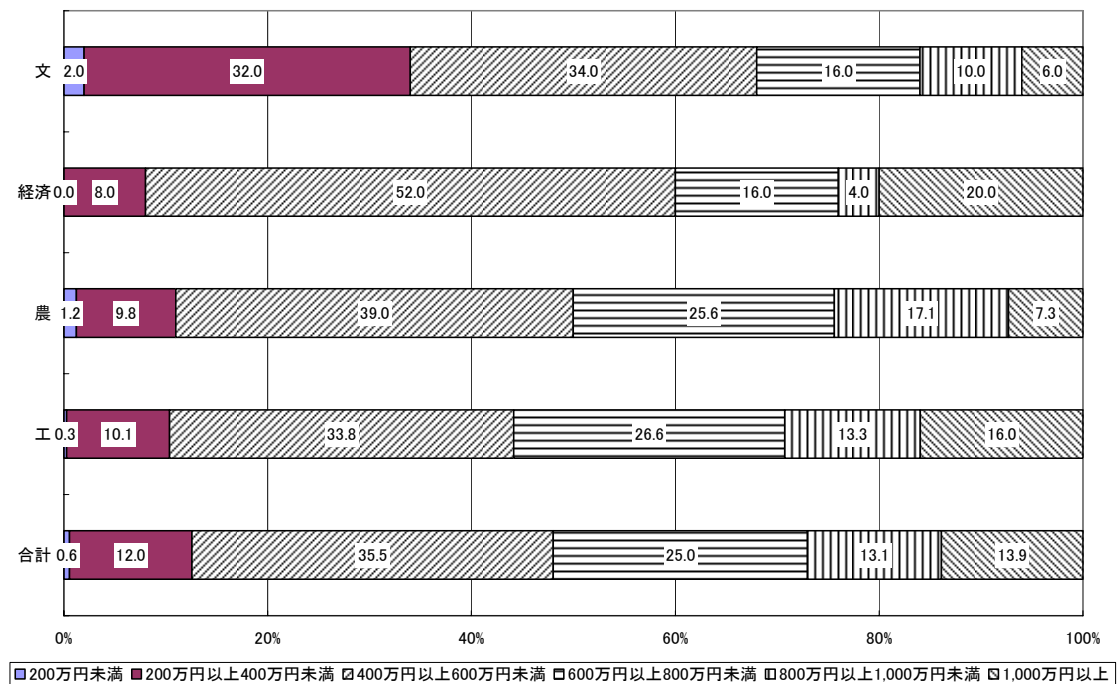
図表 3-10 現在の年収（研究科別）

		学部・研究科				合計
		文	経済	農	工	
200万円未満	度数	5	2	7	6	20
	%	8.5	6.7	7.0	1.5	3.4
200万円以上400万円未満	度数	18	3	14	43	78
	%	30.5	10.0	14.0	10.9	13.4
400万円以上600万円未満	度数	18	14	35	131	198
	%	30.5	46.7	35.0	33.2	34.0
600万円以上800万円未満	度数	8	5	22	102	137
	%	13.6	16.7	22.0	25.9	23.5
800万円以上1,000万円未満	度数	5	1	14	50	70
	%	8.5	3.3	14.0	12.7	12.0
1,000万円以上	度数	5	5	8	62	80
	%	8.5	16.7	8.0	15.7	13.7
合計	度数	59	30	100	394	583
	%	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

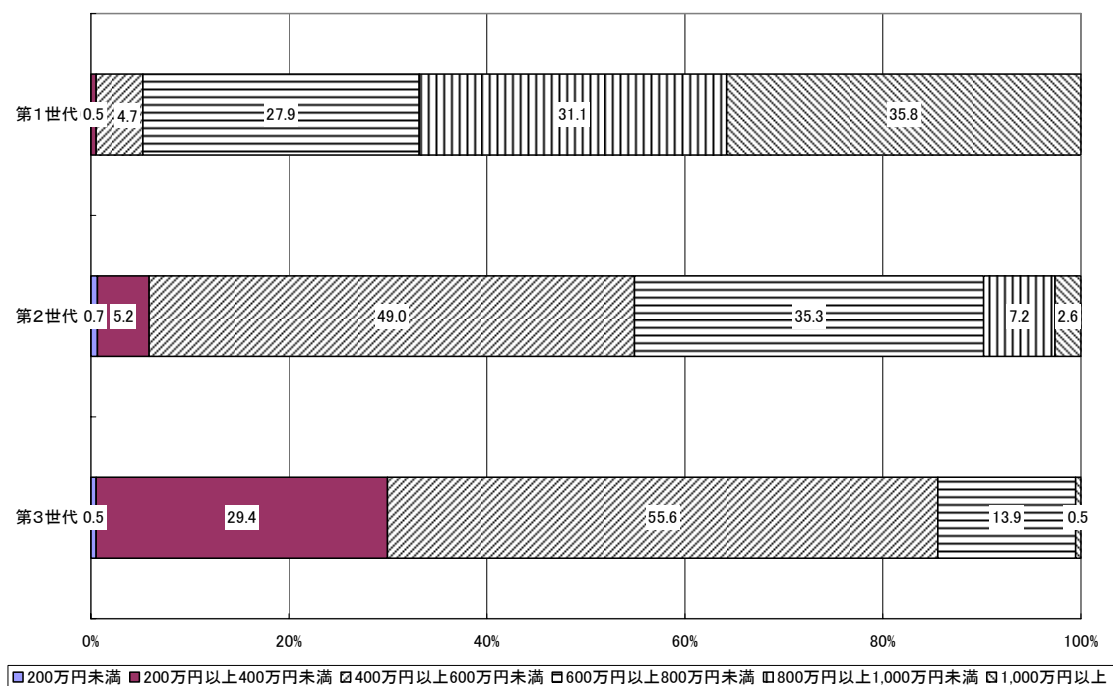
図表 3-11 現在の年収（世代別）

		世代		
		第 1 世代	第 2 世代	第 3 世代
200万円未満	度数	7	8	4
	%	3.3	4.7	2.0
200万円以上400万円未満	度数	4	12	61
	%	1.9	7.0	30.7
400万円以上600万円未満	度数	10	80	107
	%	4.8	46.8	53.8
600万円以上800万円未満	度数	56	55	26
	%	26.8	32.2	13.1
800万円以上1,000万円未満	度数	59	11	0
	%	28.20	6.4	0.0
1,000万円以上	度数	73	5	1
	%	34.9	2.9	0.5
合計	度数	209	171	199
	%	100.0	100.0	100.0

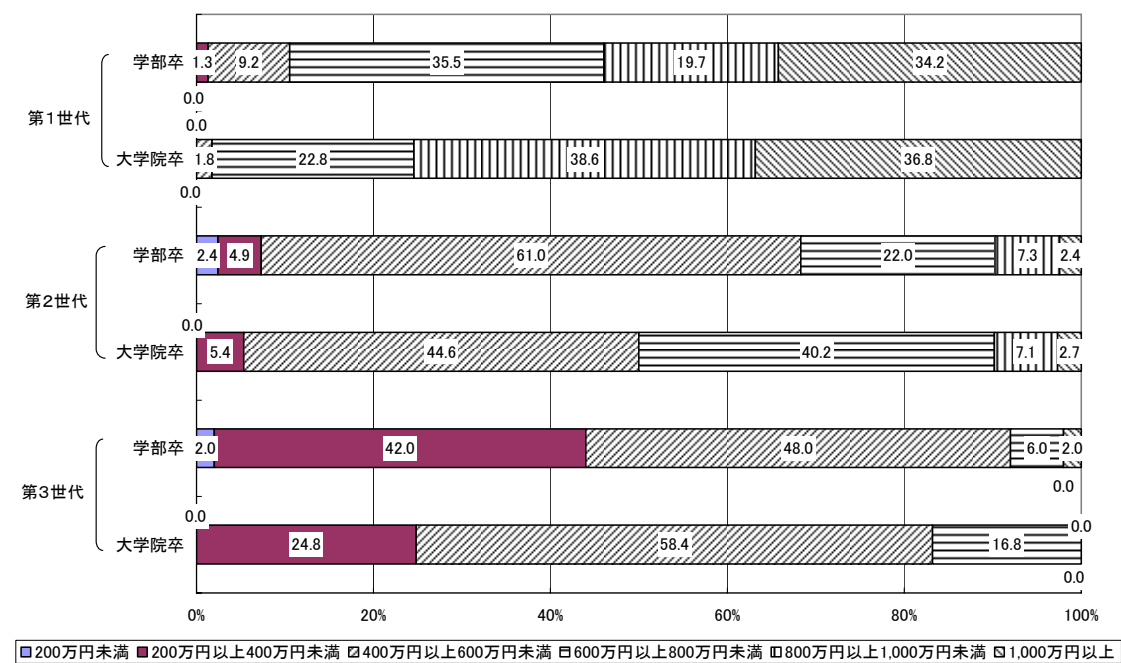
図表 3-12 現在の年収（正規社員・職員のみ）（研究科別）



図表 3-13 現在の年収（正規社員・職員のみ）（世代科別）



図表 3-14 現在の年収（世代別・学部大学院卒）



3.7 仕事、生活の満足度（問 34）

(1) 全体

現在の仕事及び生活（仕事を除く）の満足度をそれぞれ4段階で回答してもらった。

仕事の満足度では、「どちらかといえば満足している」（58.6%）が6割強、「非常に満足している」（22.9%）が2割強を占め、多くの者がおおむね現在の仕事に満足しているといえる。

学部・研究科別にみると、農学部・農学研究科で他の学部・研究科に比べるとやや高くなっているが、大きな差はみられない（図表 3-15）。

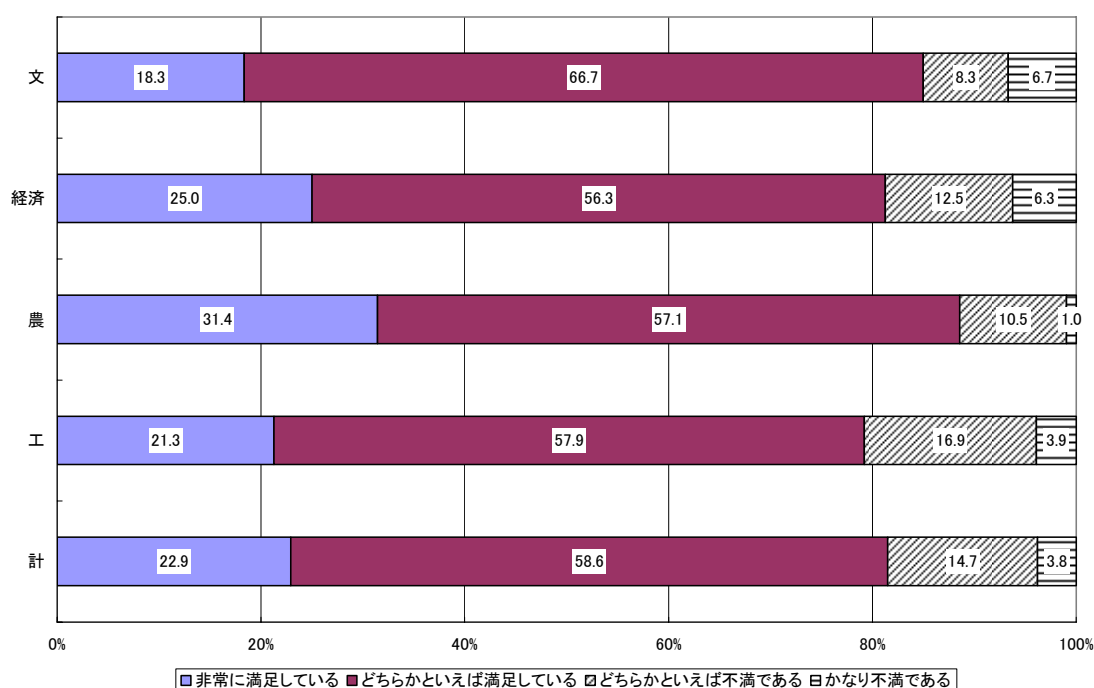
世代別にみると、第3世代で、第1世代及び第2世代に比べると低くなっている（図表 3-16）。

生活の満足度では、「どちらかといえば満足している」（54.6%）が5割強、「非常に満足している」（31.3%）が3割強を占め、多くの者が生活に満足しているといえる。

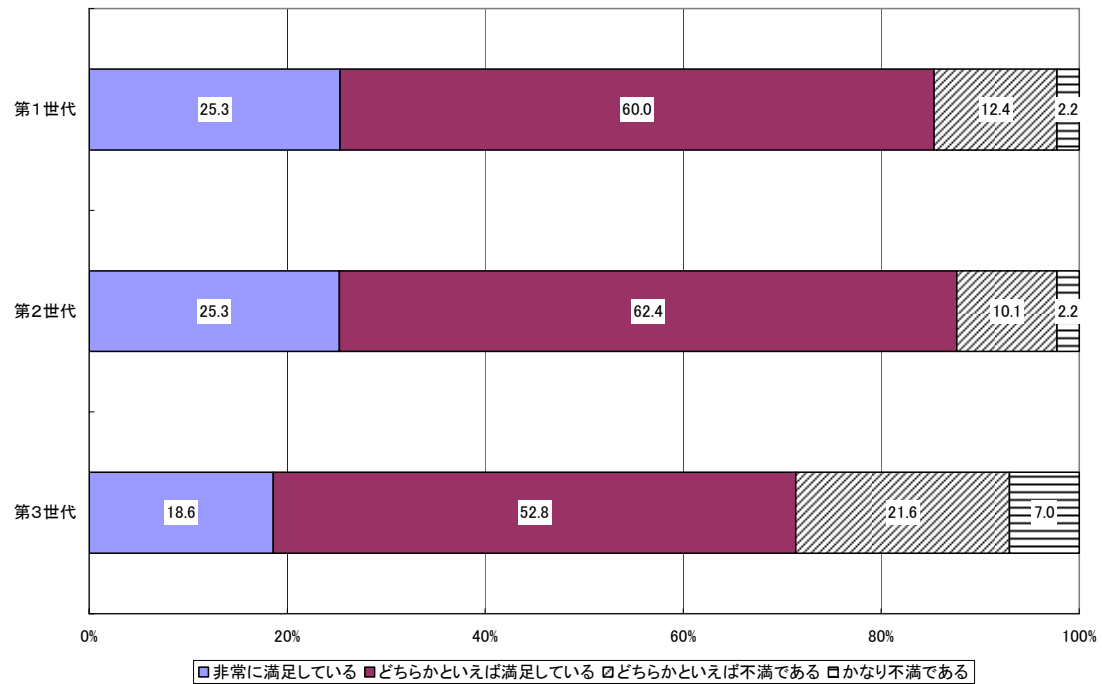
学部・研究科別にみても、大きな差はみられない（図表 3-17）。

世代別にみると、仕事の満足度と同様、第3世代で、第1世代及び第2世代に比べると低くなっている（図表 3-18）。

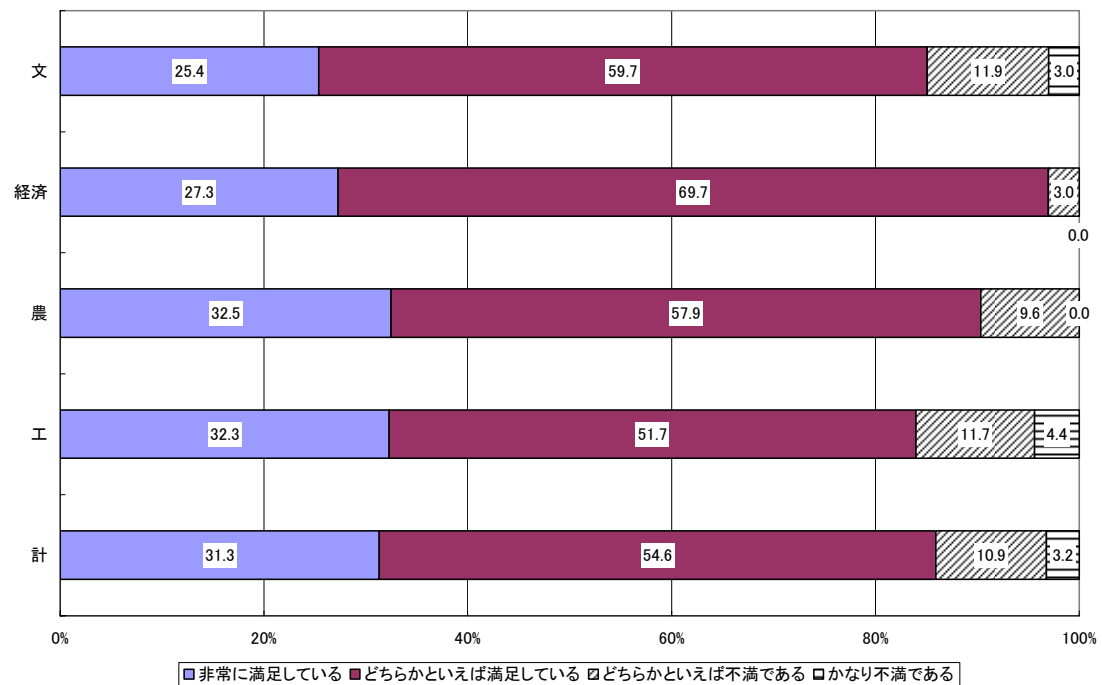
図表 3-15 仕事の満足度（学部・研究科別）



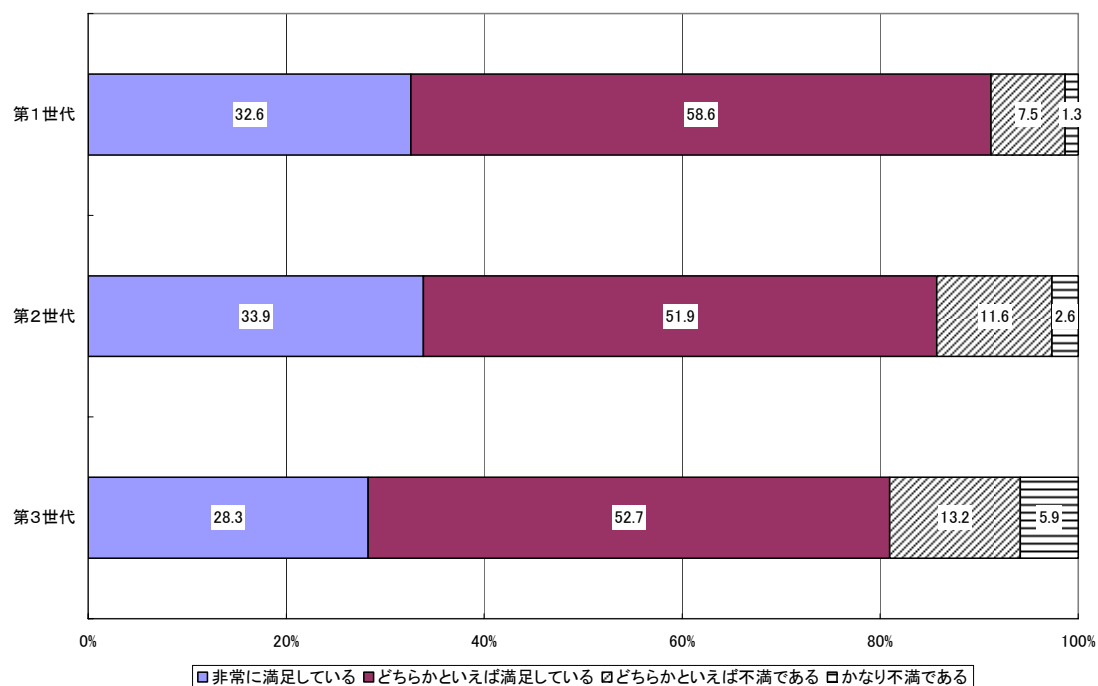
図表 3-16 仕事の満足度（世代別）



図表 3-17 生活の満足度（学部・研究科別）



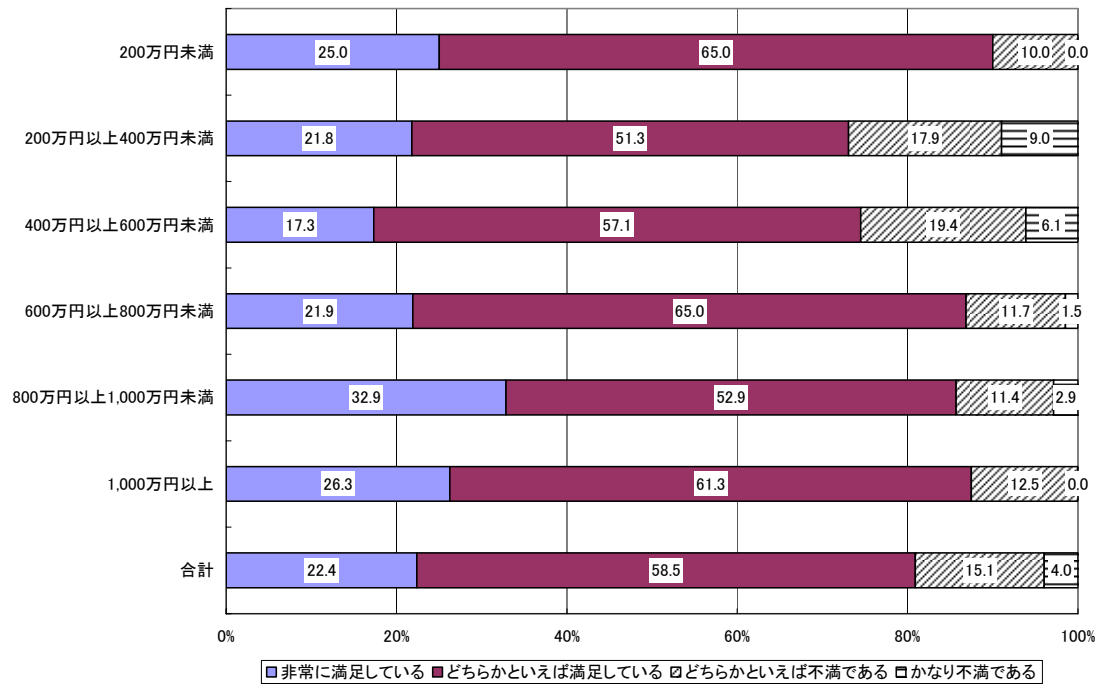
図表 3-18 生活の満足度（世代別）



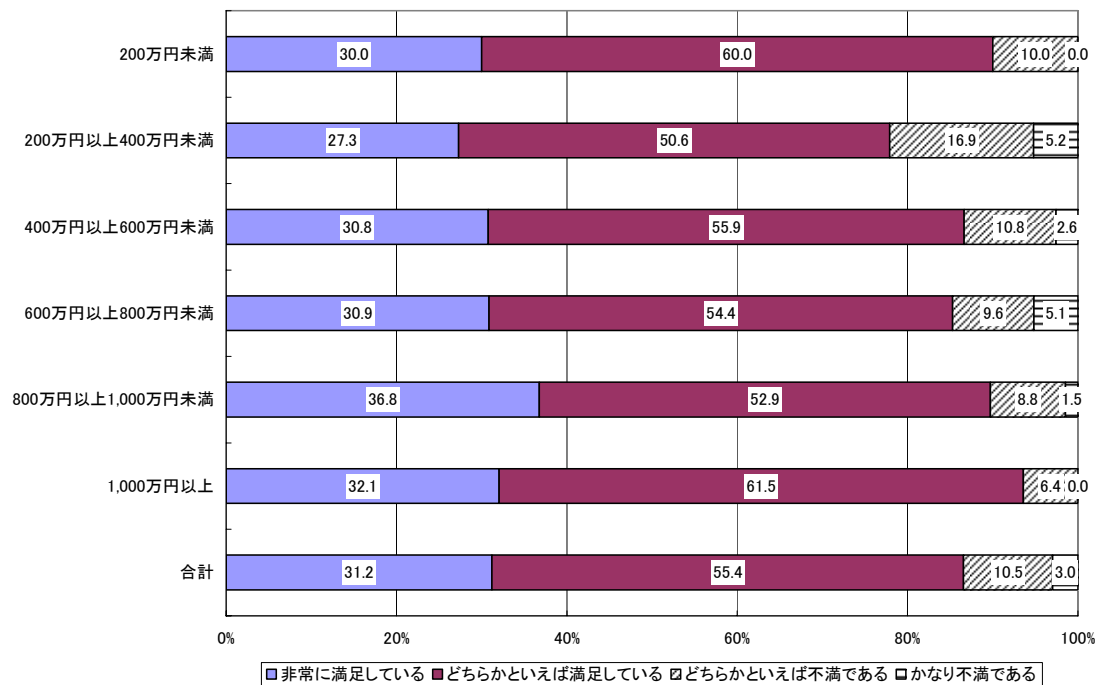
(2) 所得との関係

3.6 でみた所得と仕事の満足度、生活の満足度と関係があるかをみる。「非常に満足している」と「どちらかといえば満足している」をあわせた割合でみると、仕事の満足度との関係では、200 万円未満を除き、所得が高い方がやや満足度が高くなっている。ただし、600 万円以上ではあまり差はみられない(図表 3-19)。また、生活の満足度との関係では、200 万円未満を除き、所得が高い方がやや満足度が高くなっている(図表 3-20)。

図表 3-19 所得と仕事の満足度の関係



図表 3-20 所得と生活の満足度の関係



4. 仕事をする上での能力について（問 35）

(A) 現在の仕事上、重要な能力、(B) 現在仕事をする上で不足していると思う能力、(C) 北海道大学においてもっと育成すべきであると思う能力という 3 つの能力についてそれぞれ、21 の選択肢から上位 3 つまで順位をつけて回答してもらった。

4.1 現在の仕事上、重要な能力（問 35（A））

「分析的に考察する力」が最も多く、約 3 分の 1 の回答者が第 3 位までにあげている。次いで、「新たなアイデアや解決策を見つけ出す力」「大学で学んだ学問分野や専門領域に関する知識」「交渉力」「リーダーシップ」となっている（図表 4-1）。

図表 4-1 現在の仕事上、重要な能力

	第 1 位	第 2 位	第 3 位	得点
大学で学んだ学問分野や専門領域に関する知識	73	27	17	0.74
その他の学問分野や専門領域に関する知識	35	20	22	0.41
分析的に考察する力	96	75	41	1.19
新たな知識を素早く身につける力	25	29	30	0.39
交渉力	35	41	41	0.54
プレッシャーの中で力を発揮すること	21	19	14	0.28
新たなチャンスに機敏に対応する力	13	12	9	0.18
複数の活動を調整する能力	23	43	36	0.45
時間を有効に使う力	20	35	32	0.38
他の人と効率よく仕事をする力	38	37	37	0.54
他の人の知識や能力を結集する力	14	27	33	0.29
他の人に意図を明確に伝える力	23	43	40	0.45
リーダーシップ	51	29	23	0.58
コンピュータやインターネットを活用する力	5	8	12	0.10
新たなアイデアや解決策を見つけ出す力	78	70	47	1.03
問題点を発見する力	19	39	40	0.40
自身や他の人の考えを常に問い直す姿勢	5	12	12	0.12
プレゼンテーション能力	12	19	44	0.26
記録、資料、報告書等を作成する力	23	23	55	0.38
外国語で書いたり話したりする力	10	14	30	0.19
その他	9	3	2	0.09

（注）得点は、（第 1 位）＝ 5 点、（第 2 位）＝ 3 点、（第 3 位）＝ 1 点として計算し、回答者数で除している。つまり、全ての回答者がある項目を第 1 位にあげた場合はその項目の得点は 5.00 となる。図表 4-2 ～4.9 も同様

学部・研究科別に、その特徴的なところをみると、文学部では回答が分散しているものの、「他の人に意図を明確に伝える力」が、経済学部・経済学研究科では「その他の学問分野や専門領域に関する知識」「プレッシャーの中で力を発揮すること」が、農学部・農学研究科や工学部・工学研究科では「新たなアイディアや解決策を見つけ出す力」や「リーダーシップ」などが上位にあがっているのが特徴的である（図表 4-2）。

世代別にみると、第1世代で「リーダーシップ」が、第2世代及び第3世代で「他の人と効率よく仕事をする力」が上位にあがっているのが特徴的である（図表 4-3）。

図表 4-2 現在の仕事上、重要な能力（学部・研究科別得点）

	文	経	農	工
大学で学んだ学問分野や専門領域に関する知識	0.68 ⁵	0.36	0.84 ³	0.72 ³
その他の学問分野や専門領域に関する知識	0.53	0.64 ⁴	0.31	0.39
分析的に考察する力	0.75 ³	1.21 ¹	1.30 ¹	1.20 ¹
新たな知識を素早く身につける力	0.47	0.45	0.34	0.37
交渉力	0.33	0.97 ²	0.47	0.55 ⁵
プレッシャーの中で力を発揮すること	0.25	0.64 ⁴	0.14	0.29
新たなチャンスに機敏に対応する力	0.28	0.18	0.07	0.18
複数の活動を調整する能力	0.42	0.30	0.29	0.49
時間を有効に使う力	0.29	0.15	0.37	0.40
他の人と効率よく仕事をする力	0.74 ⁴	0.58	0.53 ⁵	0.49
他の人の知識や能力を結集する力	0.13	0.30	0.33	0.30
他の人に意図を明確に伝える力	0.79 ¹	0.52	0.39	0.39
リーダーシップ	0.14	0.42	0.54 ⁴	0.66 ⁴
コンピュータやインターネットを活用する力	0.26	0.30	0.07	0.06
新たなアイディアや解決策を見つけ出す力	0.43	0.85 ³	1.16 ²	1.08 ²
問題点を発見する力	0.38	0.21	0.34	0.43
自身や他の人の考えを常に問い直す姿勢	0.24	0.21	0.11	0.09
プレゼンテーション能力	0.21	0.30	0.31	0.24
記録、資料、報告書等を作成する力	0.76 ²	0.15	0.43	0.31
外国語で書いたり話したりする力	0.21	0.12	0.32	0.16
その他	0.21	0.09	0.09	0.07

（注）の右側の数字は学部・研究科別にみた上位5項目についての順位

図表 4-3 現在の仕事上、重要な能力（世代別得点）

	第 1 世代	第 2 世代	第 3 世代
大学で学んだ学問分野や専門領域に関する知識	0.70 ⁴	0.77 ³	0.68 ⁴
その他の学問分野や専門領域に関する知識	0.40	0.42	0.38
分析的に考察する力	1.16 ¹	1.34 ¹	1.04 ¹
新たな知識を素早く身につける力	0.30	0.31	0.53
交渉力	0.58 ⁵	0.37	0.62 ⁵
プレッシャーの中で力を発揮すること	0.28	0.24	0.29
新たなチャンスに機敏に対応する力	0.22	0.22	0.06
複数の活動を調整する能力	0.48	0.55 ⁵	0.30
時間を有効に使う力	0.23	0.38	0.50
他の人と効率よく仕事をする力	0.24	0.69 ⁴	0.70 ³
他の人の知識や能力を結集する力	0.40	0.27	0.18
他の人に意図を明確に伝える力	0.33	0.42	0.58
リーダーシップ	1.01 ³	0.34	0.30
コンピュータやインターネットを活用する力	0.06	0.08	0.15
新たなアイデアや解決策を見つけ出す力	1.11 ²	1.07 ²	0.83 ²
問題点を発見する力	0.32	0.41	0.47
自身や他の人の考えを常に問い直す姿勢	0.15	0.05	0.12
プレゼンテーション能力	0.18	0.24	0.35
記録、資料、報告書等を作成する力	0.32	0.38	0.44
外国語で書いたり話したりする力	0.25	0.16	0.15
その他	0.12	0.05	0.09

（注）の右側の数字は世代別にみた上位 5 項目についての順位

4.2 現在、仕事をする上で不足している能力（問 35（B））

全体でみると、「外国語で書いたり話したりする力」が最も多く、約3分の1の回答者が第3位までにあげている。次いで、「リーダーシップ」「交渉力」「時間を有効に使う力」「新たなアイデアや解決策を見つけ出す力」「その他の学問分野や専門領域に関する知識」となっている（図表 4-4）。

学部・研究科別に、その特徴的なところをみると、文学部では「他の人に意図を明確に伝える力」が、経済学部・経済学研究科では「新たな知識を素早く身につける力」「プレッシャーの中で力を発揮すること」が、農学部・農学研究科では「その他の学問分野や専門領域に関する知識」「プレゼンテーション能力」「時間を有効に使う力」が、工学部・工学研究科では「交渉力」などが上位にあがっているのが特徴的である（図表 4-5）。

世代別にみると、第1世代で「リーダーシップ」が、第2世代で「新たなアイデアや解決策を見つけ出す力」が、第3世代で「その他の学問分野や専門領域に関する知識」「他の人に意図を明確に伝える力」が上位にあがっているのが特徴的である（図表 4-6）。

図表 4-4 現在、仕事をする上で不足している能力

	第1位	第2位	第3位	得点
大学で学んだ学問分野や専門領域に関する知識	18	14	15	0.24
その他の学問分野や専門領域に関する知識	48	24	20	0.53
分析的に考察する力	16	18	13	0.24
新たな知識を素早く身につける力	31	28	38	0.44
交渉力	50	52	40	0.72
プレッシャーの中で力を発揮すること	23	26	28	0.35
新たなチャンスに機敏に対応する力	19	20	27	0.29
複数の活動を調整する能力	22	31	10	0.34
時間を有効に使う力	45	41	46	0.63
他の人と効率よく仕事をする力	21	20	24	0.30
他の人の知識や能力を結集する力	20	20	17	0.28
他の人に意図を明確に伝える力	31	38	48	0.51
リーダーシップ	64	40	49	0.78
コンピュータやインターネットを活用する力	10	13	18	0.17
新たなアイデアや解決策を見つけ出す力	42	45	24	0.59
問題点を発見する力	13	31	13	0.27
自身や他の人の考えを常に問い直す姿勢	17	24	20	0.28
プレゼンテーション能力	30	42	46	0.52
記録、資料、報告書等を作成する力	13	21	25	0.25
外国語で書いたり話したりする力	86	57	70	1.08
その他	4	2	1	0.04

図表 4-5 現在、仕事をする上で不足している能力（学部・研究科別得点）

	文	経	農	工
大学で学んだ学問分野や専門領域に関する知識	0.11	0.21	0.12	0.28
その他の学問分野や専門領域に関する知識	0.51	0.03	0.72 ³	0.50
分析的に考察する力	0.26	0.09	0.30	0.22
新たな知識を素早く身につける力	0.18	0.76 ²	0.52	0.43
交渉力	0.54 ⁵	0.70	0.43	0.79 ³
プレッシャーの中で力を発揮すること	0.47	0.76 ²	0.38	0.28
新たなチャンスに機敏に対応する力	0.46	0.52	0.31	0.23
複数の活動を調整する能力	0.28	0.03	0.39	0.35
時間を有効に使う力	0.64 ⁴	0.55	0.85 ²	0.55 ⁵
他の人と効率よく仕事をする力	0.49	0.55	0.19	0.27
他の人の知識や能力を結集する力	0.18	0.18	0.38	0.27
他の人に意図を明確に伝える力	0.74 ²	0.64 ⁵	0.28	0.50
リーダーシップ	0.89 ¹	0.76 ²	0.53	0.80 ²
コンピュータやインターネットを活用する力	0.31	0.33	0.22	0.12
新たなアイデアや解決策を見つけ出す力	0.36	0.52	0.68 ⁴	0.59 ⁴
問題点を発見する力	0.32	0.18	0.16	0.29
自身や他の人の考えを常に問い直す姿勢	0.17	0.00	0.36	0.29
プレゼンテーション能力	0.39	0.30	0.54 ⁵	0.53
記録，資料，報告書等を作成する力	0.21	0.45	0.17	0.25
外国語で書いたり話したりする力	0.65 ³	1.09 ¹	0.91 ¹	1.15 ¹
その他	0.14	0.24	0.03	0.01

（注）の右側の数字は学部・研究科別にみた上位 5 項目についての順位

図表 4-6 現在、仕事をする上で不足している能力（世代別得点）

	第1世代	第2世代	第3世代
大学で学んだ学問分野や専門領域に関する知識	0.16	0.16	0.36
その他の学問分野や専門領域に関する知識	0.47	0.34	0.74 ²
分析的に考察する力	0.19	0.24	0.27
新たな知識を素早く身につける力	0.34	0.57 ⁵	0.41
交渉力	0.74 ³	0.64 ³	0.66 ⁵
プレッシャーの中で力を発揮すること	0.33	0.37	0.31
新たなチャンスに機敏に対応する力	0.38	0.24	0.23
複数の活動を調整する能力	0.32	0.33	0.33
時間を有効に使う力	0.61 ⁴	0.56	0.67 ⁴
他の人と効率よく仕事をする力	0.27	0.27	0.34
他の人の知識や能力を結集する力	0.38	0.30	0.15
他の人に意図を明確に伝える力	0.29	0.54	0.69 ³
リーダーシップ	0.99 ²	0.61 ⁴	0.63
コンピュータやインターネットを活用する力	0.20	0.21	0.10
新たなアイデアや解決策を見つけ出す力	0.51	0.69 ²	0.56
問題点を発見する力	0.22	0.29	0.30
自身や他の人の考えを常に問い直す姿勢	0.29	0.29	0.25
プレゼンテーション能力	0.52 ⁵	0.54	0.46
記録、資料、報告書等を作成する力	0.15	0.28	0.31
外国語で書いたり話したりする力	1.16 ¹	1.19 ¹	0.80 ¹
その他	0.06	0.02	0.05

（注）の右側の数字は世代別にみた上位5項目についての順位

4.3 北海道大学においてもっと育成すべき能力

全体でみると、「プレゼンテーション能力」「新たなアイデアや解決策を見つけ出す力」「分析的に考察する力」「外国語で書いたり話したりする力」が多く、約3分の1の回答者が第3位までにあげている。次いで、「大学で学んだ学問分野や専門領域に関する知識」「リーダーシップ」となっている（図表4-7）。

学部・研究科別に、その特徴的なところをみると、文学部・文学研究科、経済学部・経済学研究科の文系では「プレゼンテーション能力」「分析的に考察する力」が、農学部・農学研究科、工学部・工学研究科の理系では「新たなアイデアや解決策を見つけ出す力」が上位にあがっているのが特徴的である。その他、文学部・文学研究科では「大学で学んだ学問分野や専門領域に関する知識」が、経済学部・経済学研究科では「問題点を発見する力」が、農学部・農学研究科では「リーダーシップ」が、工学部・工学研究科では「大学で学んだ学問分野や専門領域に関する知識」などが上位にあがっているのが特徴的である（図表4-8）。

世代別にみると、第1世代で「新たなアイデアや解決策を見つけ出す力」「大学で学

んだ学問分野や専門領域に関する知識」「外国語で書いたり話したりする力」が、第2世代で「分析的に考察する力」が、第3世代で「プレゼンテーション能力」が上位にあがっているのが特徴的である（図表 4-9）。

図表 4-7 北海道大学においてもっと育成すべき能力

	第1位	第2位	第3位	得点
大学で学んだ学問分野や専門領域に関する知識	66	21	19	0.66
その他の学問分野や専門領域に関する知識	16	24	18	0.27
分析的に考察する力	80	52	48	0.97
新たな知識を素早く身につける力	4	11	20	0.12
交渉力	16	27	32	0.31
プレッシャーの中で力を発揮すること	10	13	14	0.17
新たなチャンスに機敏に対応する力	18	12	11	0.22
複数の活動を調整する能力	11	11	13	0.16
時間を有効に使う力	9	11	12	0.15
他の人と効率よく仕事をする力	21	26	17	0.32
他の人の知識や能力を結集する力	7	21	15	0.18
他の人に意図を明確に伝える力	28	44	53	0.52
リーダーシップ	50	29	30	0.59
コンピュータやインターネットを活用する力	3	13	10	0.10
新たなアイディアや解決策を見つけ出す力	74	72	47	1.02
問題点を発見する力	33	37	43	0.51
自身や他の人の考えを常に問い直す姿勢	20	18	21	0.28
プレゼンテーション能力	62	90	56	1.03
記録，資料，報告書等を作成する力	8	28	24	0.24
外国語で書いたり話したりする力	74	46	84	0.95
その他	10	3	6	0.10

図表 4-8 北海道大学においてもっと育成すべき能力（学部・研究科別得点）

	文	経	農	工
大学で学んだ学問分野や専門領域に関する知識	0.76 ³	0.15	0.48	0.70 ⁵
その他の学問分野や専門領域に関する知識	0.22	0.12	0.32	0.27
分析的に考察する力	1.15 ²	1.15 ³	0.89 ³	0.91 ⁴
新たな知識を素早く身につける力	0.13	0.15	0.06	0.12
交渉力	0.19	0.36	0.20	0.34
プレッシャーの中で力を発揮すること	0.11	0.33	0.04	0.19
新たなチャンスに機敏に対応する力	0.32	0.36	0.31	0.16
複数の活動を調整する能力	0.19	0.12	0.11	0.17
時間を有効に使う力	0.14	0.12	0.06	0.17
他の人と効率よく仕事をする力	0.50	0.21	0.28	0.30
他の人の知識や能力を結集する力	0.21	0.09	0.25	0.16
他の人に意図を明確に伝える力	0.29	0.64	0.59	0.51
リーダーシップ	0.21	0.67 ⁴	0.71 ⁵	0.59
コンピュータやインターネットを活用する力	0.10	0.12	0.08	0.11
新たなアイデアや解決策を見つけ出す力	0.49	0.39	1.27 ¹	1.05 ¹
問題点を発見する力	0.53 ⁵	0.67 ⁴	0.40	0.51
自身や他の人の考えを常に問い直す姿勢	0.44	0.33	0.19	0.26
プレゼンテーション能力	1.24 ¹	1.30 ¹	0.95 ²	0.94 ³
記録，資料，報告書等を作成する力	0.22	0.21	0.21	0.24
外国語で書いたり話したりする力	0.61 ⁴	1.18 ²	0.82 ⁴	0.99 ²
その他	0.06	0.00	0.18	0.10

（注）の右側の数字は学部・研究科別にみた上位 5 項目についての順位

図表 4-9 北海道大学においてもっと育成すべき能力（世代別得点）

	第 1 世代	第 2 世代	第 3 世代
大学で学んだ学問分野や専門領域に関する知識	0.87 ⁵	0.57	0.43
その他の学問分野や専門領域に関する知識	0.32	0.13	0.30
分析的に考察する力	0.91 ³	1.04 ¹	0.92 ²
新たな知識を素早く身につける力	0.07	0.09	0.17
交渉力	0.25	0.43	0.25
プレッシャーの中で力を発揮すること	0.15	0.15	0.19
新たなチャンスに機敏に対応する力	0.13	0.39	0.15
複数の活動を調整する能力	0.12	0.13	0.22
時間を有効に使う力	0.04	0.12	0.25
他の人と効率よく仕事をする力	0.24	0.36	0.36
他の人の知識や能力を結集する力	0.16	0.14	0.22
他の人に意図を明確に伝える力	0.35	0.61	0.59 ⁵
リーダーシップ	0.60	0.65 ⁵	0.48
コンピュータやインターネットを活用する力	0.09	0.12	0.08
新たなアイデアや解決策を見つけ出す力	1.20 ¹	0.91 ³	0.83 ³
問題点を発見する力	0.66	0.35	0.46
自身や他の人の考えを常に問い直す姿勢	0.26	0.23	0.31
プレゼンテーション能力	0.88 ⁴	1.02 ²	1.13 ¹
記録，資料，報告書等を作成する力	0.15	0.20	0.36
外国語で書いたり話したりする力	1.07 ²	0.89 ⁴	0.82 ⁴
その他	0.16	0.03	0.10

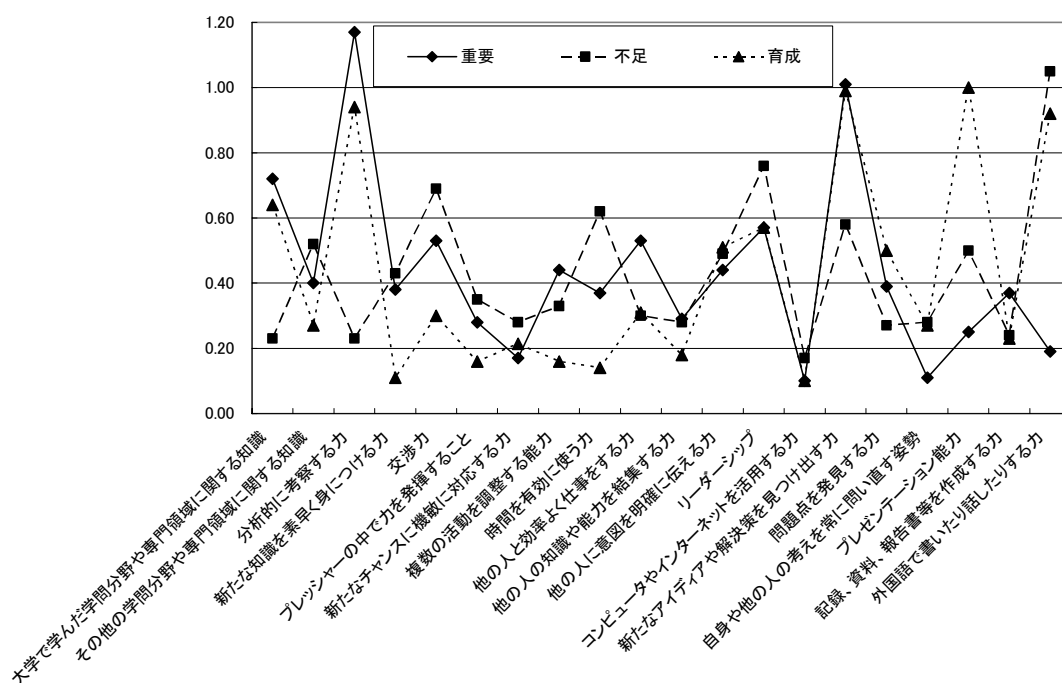
（注）の右側の数字は世代別にみた上位 5 項目についての順位

4.4 4.1～4.3の3つの能力の比較

これらの能力について重要なもの、不足しているもの、北海道大学で育成すべきものの3つで比較すると（図表 4-10）、以下のように分類することができる。

- ①重要であり、不足しているので、北海道大学で育成すべき能力
 - ・「新たなアイディアや解決策を見つけ出す力」
- ②不足しているわけではないが、重要であり、北海道大学で育成すべき能力
 - ・「分析的に考察する力」
 - ・「大学で学んだ学問分野や専門領域に関する知識」
- ③重要度では上位ではないが、不足しており、北海道大学で育成すべき能力
 - ・「外国語で書いたり話したりする力」
- ④重要度では上位ではなく、また、不足していると認識しているわけではないが、北海道大学で育成すべき能力
 - ・「プレゼンテーション能力」
- ⑤重要度では普通であるが、不足していると認識している。ただし、北海道大学で育成すべき能力として認識していない能力
 - ・「交渉力」
 - ・「時間を有効に使う力」
 - ・「リーダーシップ」

図表 4-10 4.1～4.3の3つの能力の比較



5. 現在及び今後の北海道大学との関わりについて

5.1 現在の北大との関わり（問 36）

現在の北海道大学との関わりについて、各項目の有無を複数してもらった。

これによると、関わりのある項目では、約4分の1の回答者が「北海道大学の教職員と個人的な付き合いがある」（27.3%）と回答しているが、半数近くが「特にない」（44.4%）としている。

学部・研究科別にみると、経済学部・経済学研究科では、「同窓会の活動や会合に参加している」が多くなっている。また、農学部・農学研究科では、「北海道大学の教職員と仕事上の付き合いがある」「北海道大学の教職員と個人的な付き合いがある」といった北大の教職員との付き合いが多くなっているという特徴がある（図表 5-1）。

世代別にみると、第3世代で「北海道大学の教職員と仕事上の付き合いがある」が少なくなっている（図表 5-2）。

これを、2.3 でみた勉強の熱心度との関係でみることにする。各科目の勉強の熱心度別に北大との関わりがあるとの回答が多かった「北海道大学の教職員と個人的な付き合いがある」と回答した者の割合をみると、学部ゼミ、卒業論文作成の熱心度が高いほど、個人的な付き合いがあると回答している。つまり、学生時代に、学部のゼミ、卒論作成など教員との関わりが深い授業科目を熱心に取り組んでいた学生は卒業後も教員との付き合いが継続しているものと考えられる（図表 5-3）。

図表 5-1 現在の北大との関わり（学部・研究科別）

	(あるという回答の%)				
	文	経済	農	工	合計
同窓会の活動や会合に参加している	6.9	33.3	11.2	11.5	12.0
北海道大学の教職員と仕事上の付き合いがある	16.7	9.1	31.9	13.9	17.2
北海道大学の教職員と個人的な付き合いがある	23.6	27.3	38.8	24.9	27.3
あなたが勤務している企業・団体への就職を希望している学生と会う（OB・OG 訪問への対応）	4.2	6.1	8.6	11.0	9.5
現在、北海道大学の大学院で勉強をしている	4.2	0.0	2.6	0.7	1.4
北海道大学で開催される公開講座や研究会などに参加している	2.8	6.1	6.9	1.2	2.7
北海道大学のホームページをよく閲覧している	15.3	3.0	8.6	9.8	10.0
その他	8.3	9.1	11.2	5.7	7.2
特にない	51.4	39.4	34.5	46.4	44.4

図表 5-2 現在の北大との関わり（世代別）

	第1世代	第2世代	第3世代
同窓会の活動や会合に参加している	10.8	13.5	11.4
北海道大学の教職員と仕事上の付き合いがある	19.8	20.8	11.0
北海道大学の教職員と個人的な付き合いがある	24.1	30.7	28.6
あなたが勤務している企業・団体への就職を希望している学生と会う（OB・OG訪問への対応）	8.6	7.3	12.9
現在、北海道大学の大学院で勉強をしている	0.4	1.0	2.9
北海道大学で開催される公開講座や研究会などに参加している	3.0	2.6	1.9
北海道大学のホームページをよく閲覧している	7.8	10.4	11.4
その他	4.7	7.8	9.0
特になし	46.6	44.8	41.9

図表 5-3 「北海道大学の教職員と個人的な付き合いがある」と回答した者とそうでない者の勉強の熱心度（平均値）の比較

		あり	なし
学部時代	講義科目（全学教育または一般教養）	2.43	2.54
	講義科目（学部専門）	2.97	2.87
	外国語	2.41	2.37
	演習（全学教育または一般教養）	2.68	2.58
	演習（学部専門）	3.17	2.98 **
	実験・実習（全学教育または一般教養）	2.84	2.72
	実験・実習（学部専門）	3.26	3.10 *
	ゼミ（学部専門）	3.53	3.21 ***
	卒業論文作成（学部専門）	3.60	3.34 ***
	学部教育全般	2.96	2.87
大学院時代	講義科目	2.87	2.79
	演習	3.19	2.95 **
	実験・実習（調査なども含む）	3.55	3.24 ***
	学会発表	3.42	3.09 ***
	修士論文作成	3.69	3.47 **
	大学院教育全般	3.38	3.13 ***

5.2 さらに勉強したいか（問 37）

現在の仕事や生活を充実させるために、大学、大学院あるいは専門学校などでさらに勉強したいかどうかを質問している。

これによると、約6割がさらに勉強したいと回答している。

学部・研究科別にみると、文学部・研究科の卒業生のうち、7割がさらに勉強したいと回答しており高くなっている。

世代別にみると、第3世代で高くなっている。

学部卒と大学院卒を比較すると学部卒の方が高くなっている（図表 5-4）。

図表 5-4 さらに勉強したいと回答した者の割合（％）

合 計		58.2
学部・研究科	文	70.0
	経済	63.6
	農	63.2
	工	54.4
世代	第1世代	55.8
	第2世代	52.7
	第3世代	66.5
学歴	学部卒	63.5
	大学院卒	55.5

5.3 さらに勉強したい分野（問 38）

5.2 でさらに勉強したいと回答した者に対して、勉強したい分野は、大学や大学院で学んだものと同じ分野か異なる分野かを質問している。

これによると、約7割が「大学や大学院で学んだものと異なる分野」と回答している。

学部・研究科別にみると、経済学部・経済学研究科では、半数以上が同じ分野と回答しているが、その他の学部・研究科では7～8割が異なる分野と回答している。

世代別にみると、世代が若くなるにつれて同じ分野の割合が高くなっている。

学部卒と大学院卒を比較すると学部卒の方が同じ分野という回答が大学院卒に比べ高くなっている（図表 5-5）。

図表 5-5 さらに勉強したい分野（％）

		大学や大学院で学んだものと同じ分野	大学や大学院で学んだものと異なる分野
合 計		28.3	71.7
学部・研究科	文	30.6	69.4
	経済	52.4	47.6
	農	19.2	80.8
	工	28.6	71.4
世代	第1世代	19.5	80.5
	第2世代	31.7	68.3
	第3世代	34.6	65.4
学歴	学部卒	31.1	68.9
	大学院卒	26.8	73.2

5.4 学びたい方法（問 39）

5.2でさらに勉強したいと回答した者に対して、どのような方法で学びたいかを最も希望するものを7つの選択肢の中から一つだけ選んでもらった。

これによると、「大学院で特定の科目を受講」が約3割で最も多く、次いで、「大学院博士課程に入学」「大学の学部で特定の科目を受講」となっている（図表 5-6）。

学部・研究科別にみると、工学部・研究科では、「大学院博士課程に大学院生として入学」が他の学部・研究科に比べ多くなっている。また、文学部・研究科では、「大学院修士課程または専門職課程に大学院生として入学」や「大学の学部で特定の科目を受講」が他の学部・研究科に比べ多くなっている（図表5-7）。

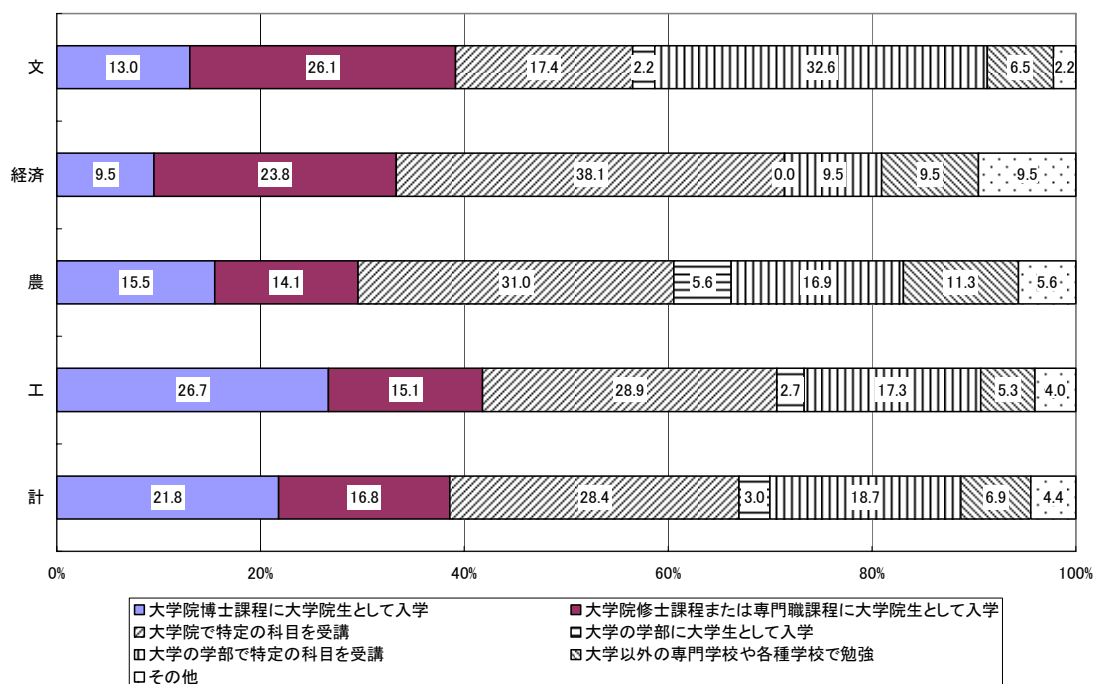
世代別にみると、世代が若くなるにつれて「大学院博士課程に大学院生として入学」が多くなっている。

学部卒と大学院卒を比較すると、当然ではあるが、学部卒では「大学院修士課程または専門職課程に大学院生として入学」が多く、大学院卒では「「大学院博士課程に大学院生として入学」が多くなっている（図表 5-8）。

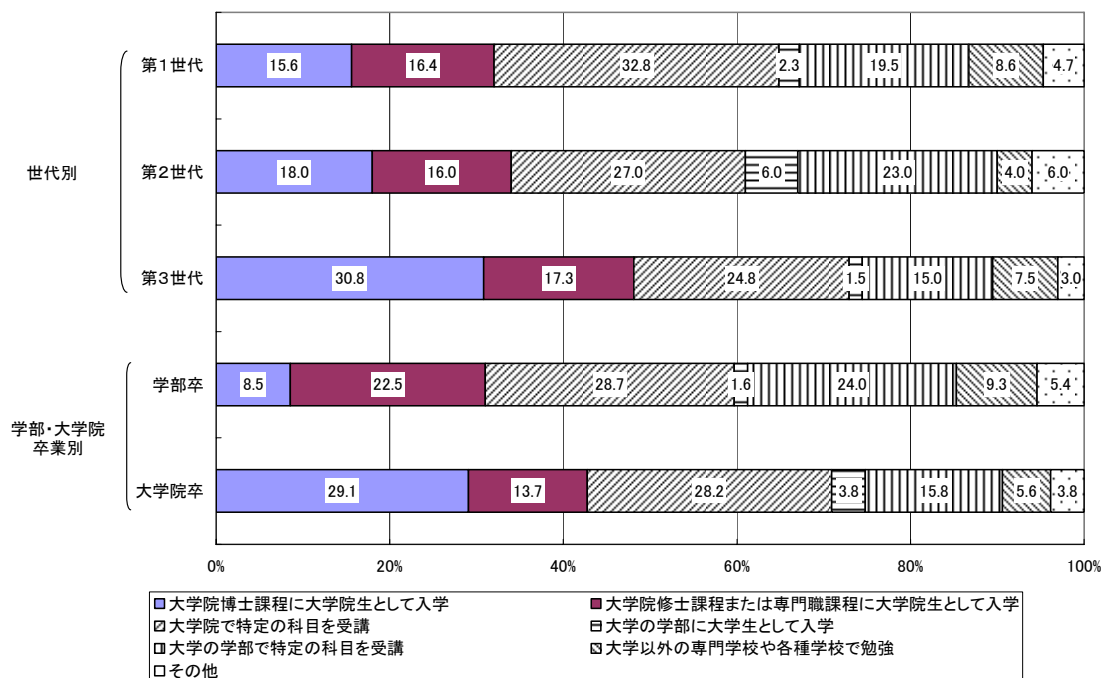
図表 5-6 さらに学びたい方法

	回答数	パーセント
大学院博士課程に大学院生として入学	79	21.8
大学院修士課程または専門職課程に大学院生として入学	61	16.8
大学院で特定の科目を受講	103	28.4
大学の学部に大学生として入学	11	3.0
大学の学部で特定の科目を受講	68	18.7
大学以外の専門学校や各種学校で勉強	25	6.9
その他	16	4.4
合 計	363	100.0

図表 5-7 さらに学びたい方法（学部・研究科別）



図表 5-8 さらに学びたい方法（世代別，学部・大学院卒別）



資料

自由回答(問 40)

1. 文学部・文学研究科

- ・卒業してから色々な相談や話のできる友人ができたことや、自分が興味を持っていた分野について深く勉強することができたことはとても良かったと思います。もう少し将来の職業のことを早くから意識して、他学部への授業（経済学や法学など）も勉強しておけばよかったと思います。
- ・こういったアンケート調査が必要な時代になったのだなあという時代の流れを痛感しました。遠いので、現在ほとんど関わりがありませんが、母校のお役に立てることがあれば…と思っています。
- ・遠隔地から放送やインターネットで公開講座を見られるようにしてほしい。
- ・実態を把握せず表面的な学生の数などで判断して組織を編成したり、安易に教職員の数を削減したりしないでほしい。博士課程修了後の進路を考えてほしい。院生が専門知識を身につけた後、進路に行き詰まり精神的に追いつめられていく今の状況は非効率的である。
- ・在学中の授業・講義は、それが将来どのように自分や世の中のために役に立つのか、わかりにくい授業でした。卒業後最も重要な能力は（１）コミュニケーション能力（２）自己信頼（３）語学力（会話）だと思います。これらがなければ、いかに高い専門性を身につけたとしても、それが世の中のために役立つことはありません。このような要素を取り入れた教育をお願い致します。
- ・大学は自ら学ぶところで授かる所にはあらず。
- ・学問だけでなく、人間教育にもっと力を入れるべきと思う。人間的魅力に乏しい教授が多かったように思う。
- ・大学で身に付けるべきはまず第一に専門的知識・技能であり、そのために必要なのは小講座制の維持であると思います。変に時流に阿って大学の特色を失ってはなりません。いわゆる学際的な勉強よりも、大事なのは「大学ではこれを身につけた」と胸を張って言い得る専門領域です。
- ・就職活動について、もっと親切・丁寧な支援をして欲しかった。（最近はそうなっているようですが。）
- ・大学で学んだことや、北大での生活、友人関係、研究へのとりくみ方、北海道の自然などは、現在の仕事と全くつながるものではありませんが、大切なベースとなっていると思います。良い先生や友人に恵まれた、と今も思っています。自分の子どもが進学するときにもすすめられるような大学であってほしいと思います。（私の父も北大工学部出身です。）
- ・今月も北大生のインターンシップを所属の部で受け入れ、一週間、体験していただきました。たまたま私のいた研究室の学生も参加し驚いています。卒業後は北大とはまったく関係のない仕事をしていましたが、たまたま、運よく同業他社で北海道に本社のある会社に転職できた上に、北大の方とも仕事でつきあいがあれることは、卒業生としてはとても幸せであると思いますし、ぜひ今大学にいる学生にも、何らかの形でかわるチャンスを与えるべきと考えます。来年からは、産学一体の取りくみとして、会社の同じ部の後輩が、北大の大学院生としてお世話になります。私もぜひ大学院に行きたいと考えつつ年齢からも難しいとあきらめていますが、業務上は各方面でおつきあいさせていただきたいと考えています。
- ・文系の学部の教育内容をもっと充実させてほしい。今も昔も自由度が少ない。高校時代の方が自由に過ごせた。大学祭での飲酒禁止などもってのほかである。
- ・インド哲学の勉強には、今もなお感謝しています。関東周辺で生活する身としては、東京に北大の出先機関があればよいと思います。そこで講義などが受けられるといいです。通年ではなくとも、夏・冬だけといった形でも。一方で、他の大学に出来ない北大だけの研究、例えばアイヌ語を充実していったほしいと思います。
- ・もっと真面目に勉強すればよかった、と思っています。

・求める側の私の姿勢の問題が一番だと思いますが、教授陣にも物足りなさを感じたのは事実です。まさに「象牙の塔の住民たち」。Q35に書いたような今、必要なものや、大学が育成すべきと思う力を備えた指導者には残念ながら全く出会えませんでした。もし、陣容が昔とあまり変わってないのなら…少し考えた方がいいのではないのでしょうか？

・学部教育の内容（選択の幅）を充実させた方が良いと思います。私は文学部にいましたが、専攻したいゼミがなかったため、もう少し学生の要望にあったものを増やした方が良いと思います。文学部でも卒業後の就職に役立つような教育をやっていた方が良いのではないかと思います。

・立派な先生方々が多かったのですが、なかにはあいさつもせず講義をはじめたり、机に坐って授業（欧米にはこのようなものもあるのかも）したりには研究者としてすぐれていても教育者として、社会人としては何か欠けているのではないのでしょうか。事務局の方は小窓を通しての書類のやりとり。今の時代、大学以外ありえない。カウンターを設けるとか。事務局も窓口の人のみ顔は見えますが、上司の方々は全くわかりません。誤解と思いますが役所的、閉鎖性を感じました。

・大学教員は、教員免許を有していないこともあり、教育者ではなく研究者としての側面が大きかった。優秀な生徒を熱心に指導する姿勢があまり見られなかった。

・研究者養成の教育に傾きすぎている感がある。しかし、研究者になりたい者にとっては非常に良い環境と思われる。研究者養成にあくまでこだわるのであれば、高校生たちにそのスタンスをしっかりと表明して学生を受け入れた方がよいと思う。（挫折者が減ると思う。）なんとなく学力で入学した者は非常に戸惑う可能性が高い。なまはんかな信念ではこなせないハイレベルな授業が多いので。研究者向きではない資質を持った生徒が軽蔑されるような雰囲気がなさにしもあらずである。自分の研究に夢中な先生が多いので、良くも悪くもその影響を受ける。教育について大いに考えている先生は必ずしも研究者として華々しい活躍をしていない印象があったが、そういう先生は本当に生徒にとって大切な存在なので、大事にしてほしい。学問はきびしく、精神の病と向かい合わせになる所まで自分を追いつめる生徒も多いので、人間的にあたかもある先生は本当に命綱になります。学者としての価値はどうであれ。

・問39で、本当は大学院や学部で特定の科目を受講してみたいと思うのですが、仕事・家庭があるので、どうしても通信講座を利用しなければなりません。生の講義を受けたいと思うので、そういう機会があるといいと思っています。

・大学時代に受けた教育と、その後、就職した後の職種は、結びついていることが大切なかもしれませんが、常に結びついている必要もないかと思います。私は現在、プログラマーをしています。北大では哲学・宗教学を学んでいました。今の仕事とはまったく結びつきませんが、大学時代に得たものは大きかったと思います。大学での教育が、学生の卒業後に役立つものでなければならないのは、言うまでもありませんが、それは、特にある職種のあるスキルに限定される必要は、必ずしもないと思います。北大は教育目標として大きな理想を掲げていますが、その理想に沿った学生を社会に多く輩出できるよう、今後とも努力を続けていきたいと思っています。

・とてもよくしていただいて、悪い印象は全くありません。具体的に身につけた学力として明示することはできなくても、おそらく自分の中で北大に行ったことで身につけたものは潜在的にあるのだなぁと感じております。

・北海道大学は、日本各地から学生が集まるので、道外で育ち、教育を受けた人と親しく接することができる点が魅力だと思いました。育った環境によって物事の考え方も全く違い、自分の見分を広めることができました。特に北海道で育った人は、他の都府県の人と接する機会が少なく、色々な土地から学生が集まっている北大での生活は、私の人格に大きく影響を与えたのではないかと思います。

・北大で得た友人と北の大地が最高の財産です。こんな私を受け入れてくれたことに感謝します。

・とても楽しく思い出深い時をすごせたと思います。感謝しております。今思えば後悔することが多く、もう少し、いろいろととり組んでおけば良かったと思っています。

・現在、就職に有利な大学、就職に必要な知識や技能を与えてくれる大学、企業に利益をもたらす大学が望まれているようですが、人々の知的欲求を満足させ、精神的生活を豊かにしてくれるような大学であり続けてほしいと思います。

・徒に世間・風潮に阿らないように期待します。

・教育に関しては、いいところでもあります。やはり“放任”すぎだと思います。東京の大学出身者に比べれば、どうしても危機管理能力が乏しいと思います。もちろん個人差もありますが、北海道の中では1番でも、国内でそして海外ではそれが通用しないということを、もっと学生に自覚させるべきだと思います。せっかく能力をもって入学したのに、もったいなく終わってしまう人材が多すぎるように感じます。他大学との学生交換をしたりして、“北大”の外に出て活躍できる人が増えたらいいなと思います。

・現役時代、就職活動などについての情報を得る機会は自己責任で行う感じで、大学から特に何か言われた記憶がありません。理系ならともかく、文系、特につぶしのきかない文学部では尚更です。地方のトップの国立大という地位に胡坐をかいていたせいでしょうか。私立大のように細かくやるのは難しいでしょうが、学生一人一人への支援というものを教えてもよろしいのではないのでしょうか。これからは北海道大学というネームバリューだけでは就職にはプラスではなく、かえってマイナスともなりかねません。私のように卒業してから10年近く定職につかない状況になるような学生を作らないように、きめ細かい対応をお願いいたします。

・大学での教育は、知識を広げるという意味では中・高と違って勉強になりました。入試に受かることが大変で、入学すると熱心に勉強しなくなってしまうので、入ってからもっと学ぶシステムを作った方がよいと思います。学問だけでなく、人間として社会性を身につける場となつてほしいです。

・私は大学を卒業してから学部で学んだこととは全く違う分野で仕事をしてきましたが、学部の専門的な学問をとおして学んだことは私の仕事上とても役に立っていると思います。たとえば疑問点を整理し、調べ、分析して考えることは、訓練されてないとできないようです。ですから大学では専門分野をじっくり学ぶことが将来どんなことにも対応できる力をつけていくのかもしれない。少々ものたりなかったのは、私は教職をとったのですが、当時の教職課程の内容はおそまつでした。「どうせ本気で教師になろうなんて奴はいない」と言わんばかり。でも実際には卒業後に各方面で教育にかかわる人はたくさんいるのですから、しっかりと教育とは何か、子どもとどうかわるか、いろいろと学ぶべきことはたくさんあったと思うのです。今は良くなっていると思いますが。私の夫はコンピューターのプログラマーですが、「大学でコンピューターを学んできたからといってもまともなプログラムをかける人はいない。それはおかしい。」と言っています。基礎にかたよりすぎて、現在使用されているプログラムを学ぶ機会が少ないのが原因みたいです。こういうのをきくと、もっと現実との接点を大切にしてみたいのではと思います。北大はアットホームで先生もみんな親切でした。感謝しています。

・当時の北大には、学びたいだけ学びたいだけの情報や教員は揃っていたと思う。しかし、それをどのように生かしていくかのノウハウを自分は持っていなかった。結局、時間をかけた割には浅い知識と経験しか身につかず、社会に出て何をすべきかがつかめないまま就職した。

・のんびり、大らかが北大のよいところでもあります。弱点でもあるように思います。研究の道に進む方にも、就職の道を選ぶ方にも、常にハッパをかける位の強い指導があってもよいかもしれません。

・社会人への門戸をもっと広く。学部の授業（特に教職、学芸員などの資格取得に関係するもの）を受講しやすくしたり、事務窓口時間や図書館閉館時間の延長を図るなど、全体のシステムとしてバックアップできる体制づくりを。

・社会人特別選抜で入学し、すでに学位を取得しています。大学院での五年間は、仕事の上でも、また人生においても充実した、かけがえのない有形無形の財産となりました。多くの方がこの制度を知り、学ぶことの真の意味を理解し、心豊かな人生を得てほしいと願います。大学には、その責があるものと思います。

2. 経済学部・経済学研究科

- ・実際に大学で受けた講義と実社会で必要な知識とは間接的ではつながりがあるといえますがあまり直接的ではないため大学での勉強が社会で役立ったという実感は薄く感じます。専門学校などでさらに勉強したいと思うにはやはり役立ったという実感なくしては動機につながらないのではないのでしょうか？
- ・OBとして、誇りが持てる大学であり続けて下さい。我々も、先輩、後輩、本学に誇りをもち、名を汚すことのないよう、頑張りたいと考えております。
- ・環境、歴史等イメージが先行している気がする。講義内容もまだまだ実社会で活かすことができる部分が少ない。公的機関、企業等から講師を受け入れる形で、講義に幅を持たせることも考えてよいのでは。
- ・「学ぶこととは何か」「大学と社会はどういう関係であるべきか」小生意気な議論を友人と戦わせ、ハンドマイクを小脇にメインストリート隊列を組んで南進したことが忘れられない。自分なりに何かを見、何かを考え、何か行動できたのが学生時代。そういう風土を培い、そんな私を見守ってくれた諸氏諸兄に感謝。
- ・大学時代、教育について、今、覚えていることや、身につけていることは、信じられないくらいほとんどありませんが、部活動などを通じて、貴重な友人を得ました。今となって思うことは、就職浪人をしましたが、女子の就職が、だんだん難しくなった時代の先端にいていましたが、その時に、大学をたよろうという気があまりなかったのもありましたが、全く情報がなくてあせりました。
- ・学部、大学院ともに先生、友人とも大変恵まれていた。大変すばらしい環境だった。これからも維持して行ってほしい。
- ・方向性や目的意識を学生に教えないで大学生生活や学部移行、授業、ゼミが始まる。そのあたりで迷い、あるいは考えずに大学生活をすごしてしまうのはよくない。
- ・学生同士の連携を深めるために、単にゼミばかりでなく少人数の演習科目をより多く設定することが望まれる。
- ・現在は、学部時代に学んだ分野とは異なる領域の仕事に就いていますが、学生時代に学び暮らした4年間は、自分にとって今もかけがえのないものです。
- ・大学が多数ある中で、北海道大学が今後も企業、研究機関等から評価される為に、もっと単位取得等を厳しくし、優秀な人材を輩出して欲しい。帝大（特に東北大学、九州大学）よりも格が上になるには上記のように、しっかりとした学生を出す事が重要と思われる。
- ・楽しく素敵で満ちた大学生活でした。それを助けてくれた大学だったと思います。
- ・大学で学んだことは、そのままストレートに仕事で役立つ事は少ないかもしれないが、自分自身に対する自信は持てる様になると思う。又、知りあった友人、教授とは末永いおつきあいができるので学業とは違った意味で有意義である。
- ・北海道の産業が盛りあがるように、もっと取組をしてほしい。北大を卒業した人が、公務員以外では、北海道に残れない。優秀な人材を、道外に出さないよう、北海道で就職できるよう、就職活動支援をしていたけると良いと思う。
- ・北大は本州の人にも良く知られており、ネームバリューについてはありがたさを感じる場面も多い。一方で自分の実力不足に起因するが、大学で得たものが入学前に考えていた程は大きくなかったとも思う。確かに「良い大学」で学校生活は楽しかったが、安易な地元の旧帝大への進学ではなく、もっと別の道もあったかなと思う事がある。法・経済学部の講堂前の空き地がビルに変わったのは個人的に残念です。
- ・質と量の両立を目指してやってほしいです。単位数だけでなく、講義そのものに興味・関心を持てるよう、熱心に取り組む価値があると、学生が思えるように教員が取り組んでほしい。特に全学教育の段階は学部での講義以上に教員の意識の高さが、求められるような感じがします。
- ・キャンパスの良さを点では言うことがないので、教務・研究について更に極めてもらえれば、相当なものになると思う。卒業生としても、今後期待している。
- ・実学指向、リーダーシップ育成、良い意味でのエリート教育が必要

3. 農学部・農学研究科

・現場の農業、生産農家での実習や普及事業、農協業務などを経験させる実習があると、生産現場と研究上の解析力が結びつき、生産者、地域農業のことも考え得る研究者に育つと思います。今の北大農学部は前者が弱過ぎるため、農学者、農学研究者であっても、生産現場、地域産業を考えうる農業支援者とはなっていない研究者が数多くいることに落たんしております。これを論文の数やインパクトファクターなどによってマスキングしているように外部からみて思えてなりません。地域産業(日本に限らず海外を含む。)との結びつきを、明らかに実感できる感覚での基礎研究をやっているかどうか問い直す必要があると思います。

・自由な校風の中で、のびのび過ごした大学生活が、財産。チャンスは多く、強制は少なく、自主制を重んじて欲しいです。

・教養課程を充実させる方向で、考えていただきたいと思います。専門につく前の教養課程が重要であったことに、後から気づかされました。人間形成の上でも、大学の役割とともに、再検討が必要ではないかと考えております。

・大学では素晴らしい先生方の講義を、真面目に受けていませんでした。それは自分の中で気付きを得ることができなかったのが、原因だったと思います。その後、社会に出て、自分の不勉強さを、思い知るにつけ、このままでは、だめになると、行き詰まった時、体調をこわし、退職しました。そして、専門学校で、勉強し直し、税理士資格を取得し、現在に至っています。そういう面で、基礎的な学問の大切さと、大切な人との出会いが、今の自分には、大変、重要だと思います。そういったものを、心の中で、育んでくれたのが、大学時代だったと思います。

・1年目の教養課程は新入生の学習意欲をそぐだけだと思うので、やらない方がいいと思う。大学生活は学問以外のことも大切なので、ある程度自由でいいと思うが、就職の面倒はもっときちんとみてあげてほしい。(周囲には北大を卒業しても、ちゃんとした仕事につけない人が多い。本来は優秀なはずなのにもらったくない。)自分はたまたま向いている仕事をみつけることができただけ。

・どのような分野であっても、能動的に調べ、学び、覚え、考え、意見・発表するという一連の「学問を修める」過程が重要だった。と、M1の時に気付いた。社会人になって、更にそれを痛感している。事情があって私は、修士課程を卒業することができなかったが、後輩には、私と同じ失敗はしてほしくない、と思う。具体的に「資格取得」が最終目的の場合もあると思うが、そうでない学生は、将来への不安や、目先の損得感情から、アルバイトやサークル活動に逃避してしまうのではないだろうか。

・大学時代に身につけた知識は、いつの間にか忘れてしまいますが、そこで育くんだ人間関係や、「ものの考え方」は現在の自分を支えてくれる大きな力になっていると感じています。また、院で東京大に進学して感じたのは、北海道大学のもつ雰囲気、人間の大きさ、人間らしさでした。「地方」の大学の持つ人間らしく力強い味をこれからも大切に、素晴らしい母校であって欲しいと思います。

・就職難の時代に就職活動したため、大学の支援がもっと欲しかったです。学生時代は楽しかったですが、農学部は閉鎖的で他大学との交流も少なく、企業との協同研究ももっと盛んであってほしいとも思います。又、大学を卒業した後も道内に就職は少なかったため、大部分の友人が北海道を離れてしまいました。大学には、北海道の経済を支えるという役割も期待したいです。

・我々の時代に比べ、大学が「専門学校」的になっているように思います。教育の充実が必要なことは理解できますが、学生・院生の過保護には同意できません。学生は大人です。過度に干渉せず、チャンスのみを与える姿勢が大学には求められます。小粒な卒業生を大量に輩出することは、北海道大学に期待しません。

・北海道にあこがれて、違う大学を辞めて入学しました。北海道で過ごした6年間は私の宝です。ずっと素晴らしい大学であって欲しいです。よろしくお願いします。

・農学系の研究機関で働いているが理学系の専門知識が足りないために困ることが多い。農学系でも、「Cell」や「ヴォート生化学」などを用いた深い知識を与えてほしかった。全体的には環境もよく、先生方と学生とのキョリも近くて、良い教育環境にめぐまれていたと思う。

・北海道大学、特に農学部は他学がなしえない、持ちえない授業、資源を持っている。それは農場などの実学である。畜産などの分野で研究されているテーマは、DNAレベルや分子レベルでのミクロ、ファインなものが多い様に見受けられる。これなら他学でもできるし、東大、京大などになうべくもない。むしろ我学は、広大な農場、豊富な動物資源を活用しもっとマクロな、実学的な探究をして欲しい。例えば、おいしい牛乳や畜肉はどのような飼養体系、飼料構成から得られるのか、「おいしい」とはどういうことか、我が国で農業を継続的に発展、維持させていくための学究的見地からの提言などが欲しいところである。生きた学問を追求できるロマンあふれた学際を求む！

・恵廸寮での人との関わりが社会に出てから大変役にたっている。その他大学の勉強がそのまま仕事に使えるような事は少ないので人間関係をいかにうまくつくっていくかが社会に出てからは大切だと思う。

・北海道大学にいた4年間に学んだ事の中で専門知識については卒業後のキャリアに全く関係なかったけれども、あの4年間で得た友達、北大生の気風、飲み方、仲間意識、等や北大生ということで今までの人生が充実したことは常々実感している。これからも独特な北大らしい校風での教育で“Boys, be ambitious!”のスピリット、同じ北大生に対しての仲間意識大学時代に無茶苦茶したからこそできる色々な意味での強さ、バイタリティ、新しい環境での適応能力等を学生達に学ばせてあげて欲しい。社会人として世の中に出ていく前に自分を知るという事、自分の基盤となる部分を強く作ってあげるによりそれからの人生における色々な事に耐えて、楽しんでいける強さをもたせてあげて欲しい。

・私は学生時代の専門を生かして研究者となったため、早期からの専門教育の必要性を強く感じています。当時は教養課程と学部とのつながりも弱く、もっと早期から専門教育に触れることができていれば、より現在に生きてくる知識や、経験が得られたのではないかと感じられます。一方、私のようなケースはかなり稀と考えられ、多くの学生さんたちのニーズはまた別のところにあると考えられます。大学が多様なニーズに対応して画一的でないキャリアパスを準備し、早期からある程度異なる教育を受けることが出来れば、各分野で実力を発揮できる人間の数が増えると考えられます。そのことが結局大学の魅力にもつながるように思います。

・自ら求めた学門のみが、身についたと思う。講義にも出ずして、ほっつき歩いていた劣等生を、包みこんでくれた教官に深く感謝している。ただ、専門課程において、論文作成時等に、より指導があれば良かった。論文作成の助言者は、教室内外の先輩と海外の研究者であった。これも、いわゆる「無指導の指導」の賜ものか。自分が学生時代に受けた雰囲気は失われてきているように感じる。

・他の学部の講義受講の希望に対する受け入れ。学科等に関連する分野で卒業生以外で、広く世界で活躍する人材による特別講義。（卒業生では甘えが生じる）

・教養課程の教官の教える力の向上、おもしろいと思わせる力。

・私がまだ学生だった頃は、一所懸命聞いてもたいくつな授業がいくつもあった。研究に関しては十分満足が得られたが、講義について特に一般教養は改善が必要であると思う。今思うと、社会の仕組みを学生の時にもっと知っておきたかったと思う。書籍や学外の活動からも学ぶことはできるが、そのきっかけや仕事について考える機会が一般教養の中にあってもよいのではないだろうか。

・近年、産官学連携での事業等増えており、波に乗らなければならない流れがあるのだと思いますが、そのような応用分野のみに力を入れるのではなく、是非基礎研究の分野に力を入れて欲しいと思います。大学が時代に流されて金のことばかり気にしては、将来、日本の科学は衰退していくと思います。学生さんには是非純粋に学問の楽しさを味わって欲しいと思います。

・私は酪農を、しているが、大学での勉強と、現場がかけはなれている。

・自主・自律を重んじる環境の中で学生生活を過ごさせていただいたように感じておりますが、一方ではその環境のために、目的意識を持たない者、就職までの通過点としか考えない者が一部居たように思われ、もったいないことだと思われます。（自分自身もそうだったかもしれません）他の大学と比較してどう違うのかはわかりませんが、授業・実験にしばられすぎない学生生活が送れることも必要なことかと感じます。

- ・ある事象を分析的に理解する能力。
- ・国の行政に近い独法に居ります。国の行政分野では1種、2種、3種があり、2種、3種の中でコミュニケーション力のある人達に比べて、タフさに欠ける北大卒業生がみられ、残念に感じることがあります。これは、大学教育に起因する問題というよりも、大学に入るところまでで、息がきれていたり、その後いろいろな対人関係にもまれていなかったり、ということが大きいと思います。あるいは、大学での専門教育が不十分であったりということがあるのかも知れません。オピニオンを持つ学生が育つように、「君はどう考えるのか？その理由は？」と問いかけていただくような教育をお願いいたします。
- ・大学時代に行ったことで、今、県の農業職としての仕事で一番役に立ったのは、農家に長期内滞在した事。農学部に関しては、農業大学校から見習うべきことはとり入れたらいいなと思います。
- ・北大は良くも悪くもアットホームで、自由に行動できることが多い反面、ナアナアな点も多いと思う。これを良い方向に伸ばしていけたらいいと思う。北大で勉強してきたことは非常に満足しているし、北大の生活も幸せだった。自分自身では嫌なことはなかったし、充分成長させてもらえたと思う。これから北大に入ってくる後輩達にも同じように感じてほしい。
- ・時代は刻々と変化しているが、北大の自由奔放でおおらかな雰囲気は大切にして欲しい。それが大学の個性として結局は重要な特徴となると思う。
- ・北大出身者は対人能力の低い人が多いように思います。
- ・キャンパス及び学風等は、他に自慢できるものがあり、同窓の絆は他学に比べて特に強いと感じている。同窓の絆を大事にしていきたい。
- ・北海道大学の環境は最高だったと思う。
- ・他人との交渉（コミュニケーション）が上手くなるようなディベート等の参加型授業を増やしてほしい。農学研究科に関してのことですが、大学院授業が少なすぎるので増やしてほしい。さらに専門性の高い授業があったほうがいい。海外の大学（交換留学）交流の機会が少ないので、増やしてほしい。
- ・北大の魅力は「はじけること」のできる雰囲気だったように思います。そういう場をつくることのできる教員が少なくなりました。さみしいことです。ずっと北大にいる方より、一度学外に出られたの方が良い感性をお持ちだったように思います。また、学外で活躍されている卒業生の話を聞く機会を設けると学生さんにはいい刺激になるのではないのでしょうか。ご健闘をおいのりしています。
- ・本人の自覚が大切。「何故学ぶのか」を分かっているのといないので、全く吸収の仕方がちがう。物事を論理的に考える力はどこに行っても必要なものでこれは一生懸命卒論などとりくんでよかったと思っている。人間のつながりは本当に広がった。自分に関しては大学時代につくったこのつながりは非常に大きな意味をもつ。高校卒業時、何故学ぶのかを分かっている方はそんなに多くないと思う。そのことを伝える、気付かせるような授業のアプローチを教養でできればよい。英語のスピーキングの授業は本当今の仕事の助けになっている。その他、研究室、卒論含め、全く関係のない仕事についているが、やはりあの4年は必要であったし、無駄とは全く思っていない。
- ・教養部で様々な講義を選択して受講できたことが、今思えば（当時は思わなかったが）、とても良い教育であったと思っています。専門教育はどの大学でも質を向上させることができるとは思いますが、教養教育はスタッフ数の多い総合大学でしか充実できないと思います。2年間、ある地方大学で研究員をしてみても北大の教養教育の懐の深さを知りました。教育の質を高めることは大切ではありますが、自由でのびのびとした北大の気風も大切にしていきたいと思います。
- ・自由な校風がよい所であると思われます。学生のニーズに答えられる場を提供すべきとは思いますが、そこへ全員あてはめるような強制は望ましくなく思います。
- ・良い大学でした。Boys be Ambitious!!
- ・自身のことは20年前で古い話なので参考にならないと思いますが、今の学生には大学時代になにかひとつでも成し遂げた体験（結果が出せて自信やキャリアの意識がもてるもの）をしてもらいたいと思います。

・現在、県の研究施設に在籍しているが、一般的に修士卒の学生のレベルが低下したように思われる。教官の実績が重視されるために、学生が思考する前に、教官が次のステップを示してしまうため、自分で考え実行する基本姿勢が失われた学生が多くなってはいないだろうか。教育が十分にできるような環境、ゆとりを教官が持てるように、大学には計っていただきたい。

・私はアナウンサーとして働いておりますが、残念ながら大学で身につけた学問が今の仕事に役立つことはほとんどありません。しかし、学生時代は勉強もきちんとやっていたため（教養課程と学部あわせて良が3つぐらい、あとはすべて優だったと記憶しています）。就職の際は大変有利でした。私自身も学問が大好きだったわけではありませんし、学問への興味が深かった訳ではありません。しかし学生の本分だけはきちんとこなしていたことで、やるべきことをきちんと成し遂げる責任感を会社側が買ったのです。いまアナウンサー歴10年となり、リクルート対応でたくさんのマスコミ志望者、アナウンサー志望者と面談します（北大出身者はまだ1人もいませんが…）。更に、経済取材でつながりのある様々な業種の方と雑談したりする中で、今、企業や社会が求めている人材とは何か？の答えについて明確なものが見えています。それは、知識でもなくアルバイト等の社会経験の有無や部活動でもありません。ひとえに「責任をもって業務を遂行する態度」に尽きます。そしてその点をチェックするために我々のような採用側は学校での成績を参考にします。学校名や学部が何であるか、何を勉強してきたかは問題ではありません。そもそも企業で通用する専門知識は博士課程レベルが丁度いいぐらいです。また、バブル期に学校名だけで学生をかき集めて採用したツケが、今莫大な人材コストの無駄として経営者にのしかかっているため、とにかく企業は人物重視で採用しています。事実我が社でも北大生（旧帝大生）というメリットはなく、北大出身者が次々と落とされています。知識や学問を身につけさせる教育はもちろんですが、しっかり勉強をする態度を身につけさせるシステムが必要です。有名校より新規校や中堅校は、すでにこのようなシステムを独自にもっている所が多く就職実績をのばしています。学問を修めたい学生の教育とともに、社会に出たいと思っている学生の教育が今大変重要です。

・私が入学した1996年は学部別入試に移行してから時も浅かったと思いますが、希望する学部に入学できたことは幸せであったと思います。構内の緑も豊かで、勉強するには最高の環境であったと思います。よく寮から農学部まで農場を歩いてまっすぐ通ったものです。四季の移り変わりがあざやかだった事を覚えています。本学の教育については、極めてアカデミック、別な言葉で言えば自己責任に委ねる放任型の印象が強く思い出されます。興味のある分野を選択できる自由は喜ばしいものでしたが、反面自制を欠きドロップアウトしていく者も少なからず見てきました。講義については、熱心な先生もいれば逆の先生もあり、人に委ねる部分が大きい反面、システムとしては若干物足りないのでは感じておりました。妻は津田塾を出ていますが、このような強制型の講義（ドリルというべきか）がもう少し増えても良い気がします。私も高校の頃とのギャップが有りすぎて最初戸惑いがありましたし、他にもそう考える人がいたのではないのでしょうか。学部初年度のうちはそういった事情をくんだ配慮があっても良いのではないのでしょうか。学年が進み少人数のゼミになると、自然と内容・密度共に増したのを覚えています。法人化により各先生も研究が大変かとは察しますが、教育もがんばって下さい。卒業後の進路について、学際本面では各研究室の強力なサポートがありますが、就職を考えると学生を対象に大学の関与を強化してくれたら有り難いと感じました。他大学に比べるとかなり強力なネームヴァリューのある本学ですが、私含め意外と意識の薄いまま就職活動に臨む者も多く見受けられました。研究者を目指す学生には不要かもしれませんが、全学教育の一環で強制力をもった就職指導を検討されてはいかがでしょうか。今後学生はますますお客様化していくはずですから、投資に対する期待収益はよりはっきりさせる必要があるでしょう。1995年の寮生飲酒死亡事故後の「絶対に」「たたきこむ」という姿勢が見たいです。

・北海道大学は、所在の地域的な理由より北方圏に関する学術振興に先進的な役割をこれまで果たしてきたし、これまでも果たすべきと個人的に考えている。このようなスタンスに立ち、他の北方諸外国（北欧、北

米)の大学と連携をさらに強化していくとともに、国内外にも競争力のある学術的発展を祈念している。上記、具体的実現として(1)研究成果の一流学術誌への多数の掲載(2)ノーベル賞授賞者の早期送出を強く希望する。

・北大のキャンパスの雰囲気がとても好きです。ポプラ並木、エルムの大木、芝生の広がり、原生林(教養のうら)に咲く草花、キャンパスで憩う人々、農学部や理学部の古い建物そんな風景がずっと残っていてほしいです。大学では教官も学生も皆研究熱心だったと思います。今振り返ると、学問に励むのに一所懸命で、もう少し余裕をもって人と人の交流を大切にしてもよかったなと思う面もあります。大学が学問だけでなく、人間の心を豊かにしてくれる場でありつづけてほしいです。

・昨年藤原正彦氏著の“国家の品格”を読みましたが、全くの同感を感じました。どこの社会も理屈の上に成り立っていますが、その理屈を積み上げる基礎部分(人のモラル)をある程度完成させるのが大学生時代だと思います。品格のあるリーダーを北大から多く輩出していただきたいと願っています。

・大学卒業後北海道を離れましたが、大学生生活を北大で送ることができて本当によかったといつも思っています。北大は、気候条件や立地条件など様々な点において他大学と全く異なる面をもっていると思います。そのような、良い意味での特殊性を、より多くの学生が体験することができるような講義や実習をもっと増やすと良いのではないかと思います。

・全入時代に突入し大学の役割も高等教育から基礎教育に近いものになるものと思われます。役割は色々変化し、効率性もさらに重要視されると思いますが現場に出て役に立つのは“知識”ではなく知識を裏うちする知恵だと思います。是非この知恵をほどこす学問体系(カリキュラム)をもって学生たちを導いてあげて下さい。これからのことを書きましたが自分もそれが役に立って感謝している部分だからです。

・個性的な生き方、考え方をされている先生方にたくさん出会い、自分自身を見つめ現在についている教職への道をこころざすようになりました。枠にはめられるようながんじがらめの環境ではこうならなかったように思います。大学独自の雰囲気(ふところの深さともいうのでしょうか)は変わらないで、大きく発展していけることを応援しています。

・アンケートを記入しながら学生時代のことを懐かしく思い出しました。北大での4年間は、私にとって素晴らしい日々でした。“大学時代に受けた教育”を生かせる職業には、残念ながら、つくことはできませんでしたが、大学で経験したさまざまな事は、何らかの形で今までのまた今後の自分の人生に影響を与え続けると思います。(もう少し勉強しておけば…と思うことはよくありますが…)北大で学んだということは、自分の誇りだと思っております。北海道大学の今後増々の発展を心より祈っております。

・大学教育は専門性が高く、それが大きな魅力ですが、一般社会から隔てられた感もあり、視野が狭くなりがちでした。研究者の道へ進むのは、一部の学生にすぎません。その他大勢の学生に対し、社会へ飛び立つ支援をしていただければ、進路選択の幅も広がり、その後の活躍が期待されるのでは、と思います。

・研究職を除けば、大学で得た知識をそのまま活かせる職業はあまりないと思います。大学で学ぶのは、目標を達成するための、考え方や方法の習得の仕方だと思います。内容については興味のない講義であっても、トレーニングと割り切ることができれば、積極的に取り組めるのではないのでしょうか。学生にはなかなかそのことがわかりません。

・私は北大で学生生活をおくることができたのは非常に良かったです。自分の人生にも大きく左右する人間性をはぐくむことができたと感じています。しかし、それは、教養・学部での講義ではなく、部活や行事、北大全体のパンカラな雰囲気、そして、それらの中にいる人々の人柄のような気がします。大学(教授)の方も、日々の研究や資金集め等、多忙ではあると思いますが、もう少し、講義の準備にも力をいれてもらいたい。専門学校のようなただのHow toでなく、真の学問のおもしろさを感じられるような、興味深い講義や、研究室での指導があるとよかったと思います。

・一般教養・語学:将来の使用環境(企業、大学)を踏まえ、実践的な能力の向上の努めるべきではないか(聞く、話すをアウトプットとした演習の強化)。英語のみならず、第二外国語も然りである(ドイツに留

学中であるが、大学で学んだ内容では、文法問題は解けても、挨拶のフレーズ一つ学んでない状態なので、対人環境で使えるものになっていない。そもそも語学は対人環境で使えて、楽しさを感じ、それがきっかけになって自分で学び始めるものではないだろうか。）。総合講義：鮭学など、北海道をテーマとした講義は今でも記憶に残り、北海道で学んでいた者として、大切な教養の一部となっている。今後大切にしてもらいたい。専門教育・指導教官は学生に夢を語ってもらいたい（当該研究をしていることの意味。研究を通じた自己実現のありかた、など）。私は残念ながら、そのような気持ちが伝わってこなかったこともあり、将来に対する自分なりの希望、期待が持てず、他大の大学院に進学した。・現在留学中のドイツでは、教官が講義に主体的で熱心な印象がある。恐らく、もともと代々受け継がれているドイツ教育界の界風のようなものがあるのだろうが、大学の教授になる際、教育学、心理学、等の科目を履修する必要があることも要因の一つではないかと思われる。日本の講義は概して淡々とした調子で通り一遍の授業が行われ、教官がその科目を学生にしっかり習得させたいという熱意、迫力を感じることはなく、何のためにその学科を学ぶ必要があるのかも説明されることがなく、ただ字面を追っているだけという印象がある。日本でも、教育実習（教官同士の相互実習による生徒の側から見た時の教官のあり方の認識）なども含めた、教官（特に上位資格者）の指導力強化を検討してみても良いのではないだろうか。その他・私の現在の親友の殆どが北大時代に出来た友人である。北大には多種多様の考え、バックグラウンドから来た学生がいると言う印象が大きい。だからこそ、お互いに選択肢が多く、本当に信頼し合える生涯の友と言うべき人間が見つかるのではないかと感じている。今後も、是非、学問的にも、学生のバックグラウンド的にもホモジニアスではなく、ヘテロジニアスな環境を維持して行って欲しい。

・北大はライバル意識が少なく、どの研究室も論文、学会発表を意欲的にしていない。また企業との連携もあまり行っていない。もっと、日本一を目指すくらいの研究意欲をもった方がよい。また、外部の教授を入れ、高レベルを目指した方がよい。学生に対する教養などの面白くなさもそういう所から原因となっていると思う。

・自分が畜産出身ということで思い入れが強いのかも知れないが、現在の農場縮小の状況は不満である。建物をつくってその中で勉強・研究をするのであれば、「北海道」という土地は関係がなく、内地の大学と比べて特色がないと感じる。北大には是非、農場などの太陽の下において生産的な活動を重視した特色ある研究環境を整備していただきたいと考えている。くり返しになるが、建物の中の研究であれば「北海道」であることの意味は感じない。

・最近北海道大学らしさが欠落してきていることが最も悲しいことで、他の帝大にはないだらかさ・人付き合い・協調性等がなくなっている。業績も重要なファクターではあるが、人間性をもっと重視して頂きたい。大学院に入れる学生も地方大学から受け入れる場合、レベルを重視して頂きたい。最近、ブランドや就職に有利というだけで地方大学から入学する学生達を見ていると北大OBとしては非常に情けなくなる。いずれにせよ私が北大にいて最も得られたものは人とのつながりである。それはひとえに、北海道という大地で、全員憧れ・ロマンをもって、生活をともにしたからであろう。業績・外部資金も重要であるが、もっと北海道大学らしさを前面に出して他の帝国大学とは一味ちがうところを出して頂きたいと思います。あと、農場や緑を維持してほしい。特に第一農場は北大らしさを維持する上で大変重要である。最後に、学務・事務の対応（学生・OB・OGへの）をもう少し教育してほしい。数年前、農学部事務にOBとして相談に行った時、屈辱的な対応をされた。絶対に忘れない。

・安易に、学部、学科の名前を変える、アピールするのではなく、真のリーダーシップを育てる学校であって欲しい。

・東京の会社に勤めて、北大はのん気だなーと実感。でもそれが良かった。七帝のしんがりと言われてますが、名前をけがさないようにがんばって下さい。

・自分が北大時代に得た友人等のネットワークと知識は宝であり誇りである。現在でも誇りと思える教育環境を提供してくださった先生方に変な感謝している。

・ 自由度の高い他大学から、北大の修士課程に入りました。研究室のシステムや雰囲気ですべて異なり、慣れることに時間を要してしまったように思います。事情があって、修士課程2年間のみの北大生活でしたので、大変時間をムダに使ってしまったと後悔しています。正直、楽しむことより辛いことの多い2年間でしたが、大学の4年間よりもずっと思い出深く、心に残る学生生活でした。転勤族の夫について、全国移動しており、定職にはつけないままですが、研究職のパートタイムにつく上で、北大での体験は、大変貴重なものになっています。寮歌をフルコーラス歌えるようになる前に北大を出てしまいましたが、とても大好きな大学です。

・ 全国各地から学生が集まる大学なので、友人に触発されることが多かった。研究環境（演習林）が充実していて入学してよかったと思っている。

・ 学部時代は小さな私立大学だったため、これだけ大きな総合大学で研究する機会が与えられ、とても良い経験をした。残念ながら現在は志望した職種に就くことができず、せっかく学位を取得したものの、経済上の理由から専門とは異なる所へ就職しているが、できるだけ早く本来の目標へ向かって再出発したい。そのためにも、あえて大学に近い場所へ就職し、現在でも仕事時間外を用いて研究やボランティア活動で、北海道大学を大いに活用している。北大の、幅広く高度な知的環境は、誇らしい。大学院では、できるだけ専門以外の分野にも興味を持ち、幅広い教養を身につけるべく努めたつもりだったが、残念ながら大学院では、論文作成以外の部分は評価の対象にならない。勿論、評価を求めて学ぶことは必要ではないが、専門性以外にも、幅広い教養人が育成されるような環境が、もっと整えられて良い気がする。そうした意味では、学部時代の私立大学は小さいながらも明確な建学の精神を持ち、繰り返しその意味を学生へ語り伝えていた。現在の北大とまことに好対称な部分だと思う。北大の歩みを在学中にもっと伝え、専門性と教養の両面を重んじる農学校精神を大学院も大切にしてほしい。また、貴重な学術資料の保存・継承にもっと目を向け、大学博物館の充実と人的資源の確保・育成にもっと力を注いで欲しい。

4. 工学部・工学研究科

- ・一般教養の英語の講義を改善してほしかった。文化論の講読の講義はあまり役に立たない。英語でのプレゼンができたり、Listening 能力が必要。・他大学との交流が必要。東大や東北大、京大の学生がどのような研究テーマにとりくんでいるのか、どんな先生が、どんな活動をしているのか、広く知り、刺激を受ける必要がある。

- ・北海道経済・行政が苦境に立つ中、北海道大学の地位も厳しくなっていることを感じる。本州の学生に比べて井の中の蛙になりがちである。北大にしかできないこと、独自性を明確にしてユニークな学生を産み出す様に努力して欲しい。就職に関して本州の学生に比べて地理的に見ても大変不利な状況、独立法人となった今、私立大学との戦いを意識しなければならない。就職についても私大の学生に対する手厚いサポートを参考にして欲しい。

- ・教員・学生共に、大学が担う社会的な意義をもっと自覚すべきだと思う。私個人としては、北海道大学で自発的に学ぶ姿勢を持っている学生は少数だと思うので、教員が学生の力添えをするようにしないといけないと思う。北大の学生は資質は充分だと思うので、あとはいかにして自らの方向性を見出すかだと思う。東京やその近郊から遠い分、情報交換の不便さはあると思うが、逆に北大の独自色を打ち出していけば、有数の大学になると思う。

- ・学部専門課程の実験について、（特に応用面で重要な実験について）社会の要請を常にくみ入れて実験テーマの見直しを図るべきだと思います。（工学部でしたので）step by step で解を見つけるトレーニングは授業や演習で施されていたと思うのですが、答が明確でない問題に対する解の見つけ方のトレーニングが少なかった気がします。卒論で通常行われる、研究室単位のゼミの前（学部2～3年）に、解を見つけるために、必要な基礎知識に加えて、いわゆるディベートやブレインストーミング等の、テクニカルメリッドを習得する機会があったら、と思います。不本意で、本来希望しない学部（学科）に進学する場合に対応するために、（学部単位に対しては転部が妥当と思いますが）所属学科と本来希望する学科とが学問的に近い場合、本来希望する学科の一部の授業を、所属学科における卒業単位として認める制度があった方がと思います。※理系の分野は細分化が進んでいるので、分野を繋いで新規性・創造性の高い発想を生む事が期待できると思います。北海道は地理的要因により大学が点在しており首都圏からも離れている為、大学間の研究・知識面の競争意識を持ちにくい環境と考えます。特に、学部1・2年の頃に競争性を体感させるのはその後の成長への寄与になると思うので、1年次の後期から2年次の前期に首都圏の大学に出向させる（その時の取得単位を卒業単位に計上できるようにする）と、知識の取得に加えて競争性の向上をきっかけに繋がるのではと思います。（当人の人生観念にも依ると思いますが）

- ・北大で学んだ期間は、自分にとって最も恵まれた時間のひとつです。自由な雰囲気や、アカデミックな環境を守り、あらたな飛躍をとげてほしいと考えます。

- ・今後旧帝大であったことなどは意味をなさないものとなるだろう。厳しく言えば地方大学として東京（関東）の大学などに淘汰され埋没する危険性が高いように卒業してから思う。限られた財と人材を集中的に有効に使い大学を盛り上げて頂きたい。

- ・思いつきのまま記します。ご容赦のほどお願いします。大学 - やりたい事が明確な人・とことんつきつめて勉強ができる様に。 - 明確でない人・何が自分としてやりたいか発見できるところ。いろいろな世界を見る事ができるところ。そうあって欲しい。そのために、いろいろな企業との共同研究。海外との交流の様な事を充実させ、若い人達にやりがいみたいなものを見つけてもらいたい。また、そのテーマは北海道らしい物となっていきたい。現在、海外の仕事をやりたいと思っています。（自分がとてもインスパイアされる）若い時に気づきがあればもっと違う人生になっていたかも知れません。それと、バンカラは捨てないで下さい。

- ・北海道大学の特徴（例えば、クラーク博士を代表とした校風や自然豊かなキャンパス）を今後も生かして欲しい。アンケート結果のwebでの公開

- ・お世話になりました。

・大学で学ぶことができない。交渉、協調、リーダーシップという“人間”にかかわるものをクラブ活動から得ることができた。これは、社会に出てから、大変役に立った。講義などに関しては、基礎と“新しい技術”“これからの技術”のバランスが必要。どちらも欠けてはいけないと思う。特に北大では、学部、ゼミにもよるであろうが後者が弱いという印象をもっている。もっと新しい技術に情熱をもって取り組む教授、助教授を外からでも良いから増やすべきだと考えます。

・もっと授業（単位取得）をきびしくしたほうが良い。年々、本学の評価（偏差値）が下がっていることを憂慮している。

・大学時代に学んだことは社会に出てからあまり役立たないという話を聞くが、学生時代にしっかりと習得していれば、社会でも役立つと思える。考え方や解決能力を向上させる基礎学習（経験）が必要であると思う。（最近の学習は偏差値等で評価する様な学習のみに集中しており、社会に出てからの自身の力に結びついていない気がする。）

・企業との共同研究や、企業での実務研修等、社会人としての行動様式を身につけるチャンスがもっと多く有ることが望ましいと思う。

・高校までの教育と、大学で求めている教育にかい離がありすぎる。近年、学力二極化や未履修問題で表面化してきた。社会のリーダーの必要能力と大学の教育も差があると思う。大学は、本当に社会に必要な能力は何か、その為に大学はどんな教育をするべきか、その為に子供は大学に入るまで、どのような教育を受けべきかを、もっと真しに考え実行してほしい。よろしくたのみます。

・大学と企業との役割分担を明確化し、社会問題に対して実効的な働きかけをするために大学と企業とがもっと密接に協調することを望む。

・私にとって4年間の大学生活はまじめに勉強したとは言えないがたくさんの事を吸収し誇れる時間だったと考えます。今後も良い意味でのプライドの元となると思う。近年、北大の情報が少ないと思うのは私だけでしょうか。全国的には難しくても道内向けには大いに情報を公開して北海道の最高学府としてアピールしてもらいたいと考えます。

・1. 大学・大学院時代に受けた教育・知識と社会人で必要とされるものとのギャップが大きい。先ず基本的なコミュニケーション能力やプレゼンテーション能力に関する教育を徹底すべき。海外の人材との違いは先ずここ。2. 大学の教職員自体の意識改革は進んでいるのか？明確な成果が設定されて、その達成／フィードバックがモニターされるシステムが導入されているのか。

・もっと競争意識を持つべき。学生はのんびりしすぎている。

・社会人向けの博士課程の入学の門戸をもっと広げてほしい。

・大学時代の教育では、最初から決められた答えを求めるためのプロセスを学ぶことが多かったような気がします。個人的な考え、思いとしては、論文やゼミなど各々が答えのないものに対して議論する場がもう少しあっても良いのではないかと思います。（他学部、他校との意見交換を行うことで、ものの考え方や視野もより広がるのではないかと思います。）また、一般教養などについては、何を目的として開講しているのかよく分からない講義も多々あり、卒業条件として必要な単位を修得するため受講はしましたが、全く役に立っていない気がします。「何のために」というところをもう少し明確に分かるようにしておくべきだと思います。

・ゼミの運営の仕方は、それぞれの研究室にまかされていると思うが、今考えると、私が経験したゼミが、とても役に立っているとは思えない。まるで被告人尋問みたいで、メンバ持ち回りで、毎回関連性が何もなかった。何の充実感もない。教授等が、方向性を定めて、進めて行くうちにひとつの大きなものができるようにしていかなければ、何のためにやっているのかわからなくなり、ただ負担になるだけである。特に、教授陣は、TVや新聞に出ることばかり考えず、学生のやる気をひきだす運営を考えなければならない。はっきりいって、あの研究室でやってきたことは、今の自分には役に立っているとは思えない。学部や教養部での演習のほうが、よっぽど役に立っている。

・今からふり返ると、とても良い環境で、のびのびと勉強が出来たと感じます。これからも、良い大学であって欲しいと思います。

・高校→旧教養教育のつなぎに失敗→留年→目標を見失う→希望外の学科へ進学→大変スケールの大きい教官との出会い→復活→学問に熱中→大学院…（ずい分たって）…今日。挫折はだれにでもつきもので、立ち直ることは本人しかできない。立ち直ればよし。立ち直れなければ別の人生を歩めば良い。大変な時代ではありますが、矢張り大学人は学生を大人として扱い、大人として学生とつきあい、益々アイボリー・タワーの精神を学生に見せつければ良いのだと思います。大学の先生には変人も偉人も居てよい。但し安易な宣伝マン教員は良くない。エルムの如く、静かに、大きな北海道大学であってほしい。

・博士課程の学生に対するケア（就職支援）を行うべきだと思う。

・まず最近の北海道大学での活動につき、不勉強ですので、その点認識違い、またすでに取り組まれている点でありましたら、下記無視下さい。現在、自ら反省し、早い時期（例えば学生時代）に意識すべきであったと思う点より、（１）北海道大学（法人）としての「理念の明確化と社会への発信」、特に教育機関としてどのような人材が育成される体制（環境）を提供するのか。（２）変化の早い世の中において専門性と共に周囲環境の理解力が重要になっていると感じますので「専門教育以外の教育環境の提供」（例えば工学部でも政治、経済を学べる体制等）（３）「実社会と密接にリンクした知識提供の場」（活きた知識を身につけられる教育体制）など検討されてはいかがでしょうか。基本的に何を身につけるかは学生の自主性によりますのでその動機付けの一助となる体制が提供されることを望みます。以上、研究機関としての側面はさておき、教育機関として望むことを記させていただきました。

・私は現在、東京の私大に通っています。その大学では大学施設の管理が厳しく、学則も禁止事項ばかりです。そのためか、通う大学生は皆おとなしく、自主的な活動も盛んでなく、まるで高校生のようなようです。北海道大学の学生とは明らかに雰囲気違います。北海道大学の良さは、学生への信頼に基づく自由にあると思います。大学施設の利用の自由、豊かなフリースペース、最小限の学則という環境が、学生の自覚と自主的な行動を生み、ひいては社会で活躍する上で必要な諸能力の獲得へとつながっていると思います。したがって、大学には、一部の学生による不祥事等が生じたとしても、それがため、多くの学生の自由な活動を妨げるような規制等をされないよう望みます。他方で、現在通う大学にも良い点があります。それは、カリキュラムの半分程度を自由に学生自身が組み立てることができることです。学生は自分の興味や身に付けたい能力に合わせ、他学部の科目であっても受講し単位を得ることができます。私が北海道大学に在籍していたときは、教養部は別として他の学部・学科の専門科目を受講できる制度はなく、ほぼ全て自己の学科の必修科目で占められていました。すなわち、専門といえば学問分野の境界と一致していました。しかし、今の時代は専門というものが多様化し、必ずしも従来の学問分野と一致しておりませんし、明確に分類することは不可能な状況にあると思います。例えば、土木と機械の専門家、農学と工学の専門家といった「合いの子」のような専門家がいても構わないし、求められていると思います。したがって、北海道大学でも学部・学科という大枠は残すとしても（本人のアイデンティティ、他者への説明の便宜）個別の受講科目については全学部・学科で横断的に組み合わせることができるようになるとよいのではないのでしょうか。全単位は無理であっても３割程度を自由化するだけでも効果的だと思います。また、（１）学生が主体的に熱心に勉強するようになる（２）知識の融合が進む（３）学生が将来を真剣に考えるきっかけになる等のメリットもあると思います。

・大学入学直後、高校よりもより高度で実践的な勉強をしようと期待して受けた講義の多くが、内容が薄くまた教員の取り組み方が不真面目だったので愕然としました。中には熱心な教員がいましたが、大学とはこんなものかと多くの学生が感じているのではないのでしょうか。研究室で恩師に出会わなかったら、どうなっていたかと思うくらいです。→１年目、２年目のカリキュラムの充実・より実践的な演習時間を増やす。受講する講義が、将来どういった分野・場面で役に立ちうるのかをもっと学生に伝えるなどに取組んで欲しいものです。

・製造業の研究職を卒業後から約20年やっていますが、企業で働くには、2通りの方向があると思います。ひとつは、専門分野は「知識」よりも、アプローチの仕方に優れ、かつより幅広い知識を身に付ける、もうひとつは専門分野を極める。いずれにしても企業ではある研究分野が永久に続く可能性は非常に低く、幅広い分野に対応できる能力を付ける必要があると思います。そういう意味で、北海道大学は私にとっては非常に良い選択であったと思います。それは講義だけでなく、伝統的な事であったり、また、日本中から学生が集まっている事であり、厳しい気候の中で生活をする事など全てを含んでの事だと思います。これからも大学の発展を希望します。

・しっかりと教育して下さい。（就職養成学校にだけはならないで下さい。）

・北海道大学OBとしてたいへん誇りに思います。もっともっと良い大学になる事を節に願っています。

・恵まれた環境で学習でき楽しい日々を送ることができ感謝しております。学部や学科の構成がかなり変わっている様で、仕方のないことですが、少々寂しくも感じています。専門知識を学ぶ上では（自分の分野では）十分な環境が整っていたと思いますが、就職をすると自分と異なる意見や立場の同僚や顧客とどの様に接し、自分の考えを感情的にならずに伝えていくかというスキルを求められるので、授業や実習を通して、そのような場面での対処法を身につけられる機会があればと希望します。欧米ではディベートなどの授業があると聞きますが、専門家の意見を取り入れながら、そのような取組みがなされれば学生の将来にプラスになるのではないかと思います。

・先生次第で、卒業・修了論文の実験への取組みに差が出ると思う。大学なのだから、学生主体でやるべきと言われればそれまでだが、先生の指導は学生を良い方向にも、悪い方向にも導くと思う。そういう意味で“学生を育てる”という姿勢を期待したい。（もちろんきっちり学生を育てられている先生もいらっしゃいますが、そういう先生と、そうでない先生の差がありすぎると感じる。）

・土木工学科時代に全人格教育の思想を教わりました。専門・教養等の学問だけでなく、人間性の陶冶（人格の向上）を続けるということをお教わったのは私の職業生活で大きな財産となっています。また、教養部時代は当時（系）でありましたので、農学部、工学部の他の学部との友人の交流は今でも続いています。現在は異業種の交流がビジネス上重要な時でもあると認識しています。現在のような学科単位の入試制度では、専門制は高まりますが、ジェネラリスト（土木工学の本質的資質）としての全人格教育はうまくいっているのでしょうか。私としては、北大で学んだことは良かったとしみじみ思います。「青年よ大志を抱け」より「Be Gentleman」いうクラーク博士の言葉を大切に仕事、生活をしております。

・在学当時は入試が理1～3、文1～3という非常にざっくりとした枠で、大学に入学してから自らの進路をじっくり考えることができるのが非常に魅力であったが、現在そうならないとすれば残念です。

・大学時代に受けた教育の中で、専門的な知識より、卒論・修論の書き方を担当教官に鍛えられたことが、現在の仕事に役立っていると感じています。原子工学科は、工学科でありながら理学部的な色合いが強く、例えば製図や材料力学の課程がありませんでした。が、これらはいわば「工学の基礎」と言えるものであることから、履修する必要があったのではと思います。

・この講義に興味ある者は、この様な就職先があるというような就職を意識させることが講義の中であると良いのではないかと。自分が就職先を捜すときに、さて自分の興味のある分野に関する仕事は、どの様な分野の会社に就職すればできるのかが良く分からなかった。それが転職することになった理由の一つでもあるので。

・北大には素晴らしい材料と土台があるのにその中にいる人が何となくやりすごしているような気がする。もっと色々なことにふれ合うことができる大学を作ってほしい。

・今の時代、「開かれた大学」や常に「変化」を求める風潮があり、色々まどわされることが多いと思うのですが、是非とも北大の歴史や伝統を守ることもお忘れなく、お願いしたいと考えます。型にはまった人材をつくることは、他の大学にまかせて、多少未完成でも、スケールの大きい学生を育てて下さい。

・社会を学び、知る上で、様々な業種の社会人講師の教育を定期的にしてはどうでしょうか。

- ・カリキュラム・教育システムをひんぱんに変更しすぎ。従来法でも優秀な学生（卒・修了生）は輩出されている。現在の学生は楽しすぎている。北大の特色を出したカリキュラム等があっても良いのでは？
- ・大学の限られた期間で学べることは多くはないことを認識させ、むしろ卒業後の継続学習の方が重要であることを示すべき。また、日々の業務に追われつつも、新しいことを学びたいと思っている人も多いはずなので、大学から卒業生へ（又は近隣住民へ）学習の機会を提供する可能性を模索してはどうか。
- ・現在の学部での教育は、専門分野ではなく、基礎課目に力を入れ、授業数が少なくなったが、この方針には反対である。学部の初期の教育において、浅く広く専門分野を学ぶことが研究に対する興味につながり、興味は基礎課目の必要性を実感させると考える。
- ・環境にも非常に恵まれ、教育内容もとてもよく、設備も充実しており、とても、北大の卒業生であることをほこりに思っております。自分の子供や、知人にも胸をはって紹介できます。これからも、歴史と伝統を守ってすばらしい大学のままありつづけて下さい。
- ・北海道大学は北の地にあり、情報収集力において不利な点があり、また、東京などと異なり有力大学が他に存在しないため、情報交換の面で弱い面を感じた。反面、北の地から世界へ発信する大学として気概ある先生方の姿を目のあたりにし、その姿、影響が現在の自分の考え方、考えようとする意欲につながっている。北海道大学で学ぶことができたことは本当に幸せであったと思っている。今後も危機感をもって世界をリードする大学、世界をリードする人材が育つ大学として大きく貢献されることを期待しております。
- ・旧精密工学科のカリキュラムは工学全般を学ぶには非常に良いものであったと思います。専門性も大切ですが、学生（大学生）には幅広く学ぶカリキュラムが必要だと思います。旧精密工学科のようなバランスのとれたカリキュラムの復活を強く望みます。
- ・学生時代に実社会、実社会人にふれる機会が多ければ多いほど実社会との関連の中で学問を考えることができ、より有効な学問研究になると考えます。学内に社会人を多く入れること、実習等で学生を社会に出すことが重要で、そのような方向の改善を支持します。
- ・専門分野の知識習得に特化せず、将来社会人として生き抜く術を身に付けさせて下さい。
- ・私自身は部活動に明け暮れて勉強不熱心な学生でしたが、今振り返ってみると、大学時代にもっと勉強しておけば良かったと思います。学生の本分はやはり勉学ですから、単位取得を厳しくすべきと思います。
- ・大学時代の自分は決して勤勉な学生ではありませんでした。しかし、友人達と真剣に向きあい学生生活を過ごしていきました。その甲斐あって、40才を過ぎても学生時代の友人と深いつき合いができています。後輩達にも、受動的な教育の押付けではなく、人とのつながりを重視した教育を目指して頂きたいと思います。そして、大きな世界観をもったすばらしい人材が大学からはばたいていくことを期待いたします。
- ・学部へ移行してからの教育はとてもよかったが、1年～2年半までの教養の教育がひどすぎた。すっかりやる気をなくしてしまった。先生は自分の研究ばかりに一生懸命で学生を教育しようとしていないように感じられた。
- ・一般教養および学部の講義に積極的にならなかったことを、残念に思います。学生自身の責任によることはもちろんですが、「魅力語る」ということにもっと執着してもいいのでは、と思います。
- ・環境・学ぶ場は充実していたと思う。もっと積極的に、多くの演習などに参加すれば良かった。語学も、学ぶチャンス・場はあったのに利用しなかった。今にして思えば、もったいないことだ。
- ・現在の北大生に欠けているものは、「人と話す能力」である。これは他の大学の学生と比べ、著しく劣っている点である。“人と話す”ことは、社会人としての基本動作であり、この点が欠けていると、いくら優れた知識や固い意志があっても他人には伝わらない。「自分以外は他人であり、これを動かすためには“伝える”しかない」ということを（社会に出る一歩手前の）大学時代に学びとってもらいたい。
- ・大学時代は、勉学はほどほどというかテスト前位しか机の前に座った記憶しか有りませんが、ヒマではなく、一生懸命遊んでいました。その時の友人達との親交はいまも続いており、私の財産です。人生の半分を北海道以外で過しましたが、道産子です。北海道大学の発展を祈願しております。

・好むと好まざるにかかわらず、大学は社会で「評価」を受けている。私も、就職で、首都圏に出てきて、他大学との比較も含めて、実際にどのような評価をうけているのか、個人的には認識している。評価は短・中期的には、（１）大学から発信される研究および教育活動における成果で、長期的には（２）卒業生が社会（国家他）に影響力を及ぼす度合いを視点にしていると思う。会社といった集団で為される評価は、（２）の矮小版とも言えるものであるが、社内あるいは付き合っている人の中から、複数の卒業生のキャラクターを抽出するものであり、具体的サンプルに基づいている点で、正しいと感ずることが多い。（決して、入学時点での偏差値で決めているわけではない）さて、我が母校北海道大学であるが、上記の（１）、（２）に照らして、数多くある国内の大学の中でとりわけポジティブな評価を受けているわけではないというのが私の実感だ。むしろ、北海道に住んでいた時に想像していたよりもプレゼンスは低い。私が（親しい人等から）感ずる卒業生の評価（本音）は、「性格はすれていなくて、体力と行動力がある人は、社会的にそれなりのリーダーシップをとる立場に上る人もいる。概して、専門に対するつきつめが甘く、そうかといって周りをまきこみ大きなPJを企画・実行できる人が少ない。プレッシャーにも強くなく、東京程度の住宅事情でも不満を持って、それを主たる理由として退職してしまう。おおざっぱな人が多く、繊細な違いをつかみとることができない。自分の人生なのにキャリアデザインを真剣に考えている人が少ない一流されている人が多い。等」である。未だに、世間（卒業生である私もたいしてかわりはないが）では「Boys be ambitious!」（明治10年、農学校時代）、「旧帝大」（大正7年ー昭和22年）といった戦前期の栄光？のイメージしかない。私は‘80年代の初頭に入学したが、私の周囲でも「内地」から来て、真剣に専門分野を勉強しようと考えていた人ほど、大学への失望感が大きい様子だった。ある先輩（修士から別の旧帝に進学）曰く、「結局、新渡戸、内村の頃が一番質の良い卒業生だったんだよね」。上記（１）大学から発信される研究および教育活動における成果については、結局は医農工学を中心とした理系学部でのアウトプットだ。成果は、強固な基盤なくして生まれない。学部レベルでは徹底的な基礎教育を実施してもらい（卒業評価も妥協しない。）、個々の卒業生のレベルアップをはかりつつ、研究・開発分野での成果を出すということだろう。正直言って外国語習得やTOEFLなどは、枝葉末節と思う。コアとなるのは、広い知識・思考能力を涵養し（大学1、2年？）、専門領域における先人の偉業を理解し、皮膚感覚で身につけて（大学3、4年？）、オリジナルなテーマを見出し成果を出していく力（修士以降？）を有した人間なのだ。在学中に感じたのは、北大では、学生が切磋琢磨する環境が無く、勉強に真面目な人が疎んじられたりして、流されやすい状況であった。私も反省するところ多である。就職してから、同期の人と話すと、東京地区では、師を選んで他大学で卒論を書くことも柔軟に行われている様子だった。（知名度が高い研究室に行けば、待遇が良い就職先に行けるという、「東京的な」動機が大きいのだが）札幌は、通勤・通学時間が短く、学協会活動も少ないと推察されるので、時間をかけてじっくり基礎を叩き込むのは適していると思う。本当の意味で自然科学の基盤を身につけた人は、異分野にいても、活躍できる可能性が高いと思う。となると、必然的に評価（２）につながっていく。もうひとつ、大学の評価の視点として、（３）広い意味での北海道における「資源」の掘り起こし・活用方法を提案し北海道に貢献している度合いということを挙げたい。例えば、財政破綻した夕張市を北大ではどう捉えているのか？再生について、知恵を出すようなプロジェクトは現在あるのか？（石炭の歴史村に遊びに行ったことがある人も）人ごとだと考えていないか？首都圏でも、北海道に赴任していた、PJを動かした等の経験を有する人は多い。全ての分野で、「北海道のことは北大に聞け」ということにはなっていないだろう。必ずしも研究活動とイコールではないかもしれないが、身近な課題を、イニシアチブをとって取り組むことは、地域で圧倒的な信頼となつてかえってくると思う。卒業生として大学には、現在何も貢献していないことを自覚しつつ、評論家的なことを縷々とかかせていただいて申し訳ないと思うが、北大には愛着をもっている。母校が、2027年1月から「大阪大学札幌支所」になったりしたら悲しい。大変革の21世紀初頭を生き抜くことも重要だが、22世紀まで通用する持続可能な戦略をたてていただきたいと望むところである。「貴き野心の訓え培い 栄え行く 我等が寮を誇らずや」

・学部（工学部）の教育が、レベルが低く、教育的配慮のある構成がなされていなかった、と感ずる。

・教育については特にない。大学および札幌という環境での若い数年間は、夏・冬の面の全く異なる素晴らしいものであり、私の中に眠っていた感性を砥ぎ澄ませてくれたと思っている。都会的様相を呈しながら、決して東京をはじめとする他の国内の都会では味わえないであろう風情は、若い魂には大いなる刺激であると思う。そんな素晴らしい環境であればこそ、心豊かな人財（あえて材は使わない。）を輩出し、崇高な志で日本を「資」ではなく「志」の豊かな国として欲しい。

・知識や教養は、いくつになっても修得したいと思う時に学習すればよく、その点、あまりギリギリに詰め込もうとしすぎて勉強が嫌いになるようなことがなかった。北海道大学はよかったと思う。しかし、この世界や日本の過去と今後の方向についての「思い」については、この時代、もっと語られてもよかったと思う。なぜなら、今でもあの時に少し語られたことは私の生き方に影響を及ぼしているからで、もっとそのようなことを大切にしていきたいと思います。

・私は現在製造業に従事し、管理職についていますが、必要とされる能力は、分析力であり、目的へ向かっての意志の強さであると考えます。分析力、あるいは問題点を発見する力と云うのは、社会へ出てから身につけるものと思われがちですが、結局は、大学に於ける基礎的学問、研究であると考えます。この点は、以前と変わらずと云うより、大学として大きく変化させるポイントは少ないのではないかと思います。目的へ向かっての意志の強さと云う点については、講義、ゼミだけでは養いづらいように思います。体育会系・文化系を問わず部活動的なものにもっと評価されてもいいのではないのでしょうか。試合でもコンクールでも良いので、壁を乗り越えて勝つ意味を若いうちに理解して欲しいと、会社を辞めて行く若い人を見る度に思います。せっかく「北海道大学」というブランド（良い意味で）をつけて社会に送り出すのですから、「骨太」な卒業生を送り出して欲しいと思います。

・教養時代にいろんな勉強及び体験（学外含め）ができて、最初から専門分野に入らずに良かったと思っています。

・大学を卒業して、19年が過ぎ、学生時代を思い出してはなつかしく感じる今日この頃です。土木工学科を出て、その分野に進みましたが、学生時代にもう少し学習しておけば良かったと、反省しきりです。しかしながら、物事の仕組や、仕事の進め方など、学生時代に得たものを、今活用できているのかなと感じています。北海道に行くことは、この先何度もないかもしれませんが、家族に一度、母校を、北海道を見せてあげたいと思っています。親の立場になり、子どもが北大を選んでくれたら自分の出来なかったことを託してみたいと願っています。

・他大学、特に東京の大学の学生にくらべ、おおらかな雰囲気があったように思う。就職活動ものんびりしていたのではないかな。

・学部（教養も含めて）においては、より一般的な能力（論理的思考、問題発見、問題解決能力、外国語を含む読解力、外国語を含む文章作成力、交渉力等）の養成に力を入れるべきである。また、学生の評価は厳格かつ公正に行うべき。教官側も講義の質に対してもっと改善の努力を行なうべきである。また卒論、修論の指導については、文献レビュー、研究テーマの見つけ方、考察の仕方等、大学（院）の後にも役に立つように具体的かつ学術的な指導（単に先輩が指導するのではなく）をプログラムとして講義やゼミとして提供すべきである。

・研究分野ではより企業との連携が必要ではないかと思われる（地理的な条件は不利ではあるが）

・日本人の英語教員は不要。

・英語に重点を置くべき。特に、（理系の場合は）論文、専門書の読解についての講座があると良いかも。

・他の大学との研究上の交流・共同作業や企業との接点を増やしてほしい。

・北海道大学を卒業したばかりの社会人でも、社会的常識が身についていないと思われる例がある。大学で社会的常識を教えるのは、おかしいかもしれないが、今の状況を見ると、一般教養の時にでも、少し教えた方がいいと思う。社会に出れば、10の専門的知識よりも、ひとつの失敗で（非常識な行い）大きくイメージダウンすることがある。

・大学時代は手で図面を描いていた時代、たぶん平板測量か何かを池のまわりで行ったこととか、技術としては、何も現在には使えることは学んでいなかったと思います。今は、トランシッドで敷地を測量し、CAD図面を描き、プレゼもCADの一環となっています。唯一、プランニングはグリット用紙で手描きです。こんな時代でも住宅の仕事では、手描きのパース等が上手く描けると得だったりします。北大は住宅会社に就職される方は少ないでしょうから私の意見は参考にはならないとは思いますが、近ごろは手で描ける若い人がほとんどいない気がします。CADでそれ以上のプレゼができれば必要のない話ですが。CADもどんどん進化する。要するに一番大切なのは人との関わり方、対人関係に強い人は、どんな部所でも使えると思う。能力的には広く計画をたてるところから、実務に役立つディテールが描けると仕事に役立つと思います。就職して1年～1年半はどん底です。あきらめず、その職場での自分の地位を確立するまでは辞めない根性のようなものも必要だと思います。北大が就職に有利な大学というように世に知れわたれば良い学生も入学すると思うので、このようなアンケートを行うこと自体すばらしいと思いました。頑張ってください。

・市民に親しまれている大学という雰囲気が良かったです。

・大学のにおいのような物は非常に良く、人生の一部となっている。ただ定期試験や、大学入試、卒業論文、修工論文の合格ボーダーライン等が、その場しのぎでなんとかなくなってしまったため、完全に血とならなかった。ただ大学とはやはり学ぶべき場であると思うので、就職訓練のような物は必要ないと思う。ただ、部下で（旧帝大出）あまりにもコミュニケーション力が低い人がおり、その大学が悪いような印象を受ける。よって教養などでコミュニケーションやマナーの試験をしてはどうか？（幼稚すぎ？）

・北海道という土地柄なので、のんびりとかおっとりした人が多い。又、学生当時北海道の中で一番の大学という感じがあり他大学とのつながりが少ないと感じた。特に東京の大学を卒業した会社の子を見て強く感じた。

・他大学との連携交流が少なすぎる。個性があまりないように感じる。

・基礎の他、北海道経済をたて直すべく企業とより密接な研究分野の拡充も希望。

・人間死ぬまで、何があるか分かりません。何が起るか分からないので、何が必要になりそうかを考える力がほしいところです。教えられるものではなさそうですが…。

・創造力の育成。

・やはり、今になって思うのは、学生時代にもっと勉強（幅広い知識・深い知識・技能）しておけば良かったということです。また、これからの時代は、大学と企業との結びつきをもっと強め、企業は新しい芽を発見。大学では、社会を通しての新しい技術を発見経験することでお互い、よりよい関係になっていく必要があると思います。

・素晴らしい教授、助教授に出会えるか否かで大きく学生生活も変わります。学部に移行し研究室に配属後、研究室の雰囲気のよさで学業に目覚めた経験があります。その意味で、学生による（からの）、教職員の評価を徹底して行う魅力ある教職員を多く養成できれば、北海道という素晴らしい環境の中で、オリジナリティのある校風を持続けられると思います。

・大学で学ぶことの意味をもっと良く自分で考え、日々の講義等を有効に受けることが出来ていたらと思います。高校生の時の勉強の仕方からの切り換えが、社会人になるまで上手く出来ませんでした。今さらですが、大学に入学してまず、「大学での勉強の仕方」を学ぶ機会があったらと思います。

・大学院を卒業してから、何人もの卒業生の人達に会いましたが、皆が北大が大好きで、最高の大学だと絶賛していましたし、私もそう思います。時代の流れに合わせて改革をする事も大事かもしれませんが、北大の『学生の自主性に任せるやる方』は一見非効率に見えて大変良いと思います。北大の個性として、今後も変わらずにいて欲しいと思います。乱筆で失礼致しました。

・活発な討論ができる小人数制の場（ゼミ）の早期開始。形骸化した授業やゼミの見直し。社会情報に早期に対応した受入態勢。以上のような“仕事”を早期に体感し、学生時代に何をするべきか？をいち早く学ぶ事。上記以外には、人生の楽しみを見出すような催し場があると面白いと思う。

・受け身の授業よりも、現実的な実習を用いて、物理的諸現象を見て触れながら学んでいくことが重要。学部において、研究室配属を早めるなどの措置が、社会に有用な人材を早期に育成できると考えます。また縦割りの学部教育でなく、文理横断の新学部または科を創設するのもよいと思います。歴史的・文化的側面を重視した建築学部や政治的・社会的環境から今後の日本の注力すべき工学分野を定め（政治的、社会的に理解したうえで）学問を進めていくような学部・学科の創設です。

・専門的な能力を身につけるだけでなく、交渉力や、自己アピールが出来るような能力を伸ばす場を提供してほしいと思います。教授、助教授の講義だけでなく、企業でその技術を実務として扱っている方を講師に呼ぶなどして、より実学にマッチした教育にするのが良いと思います。（もう今ではそのような教育をされているのだとは思いますが）

・理系学部は専門分野の勉強が多い分、他分野（他学部、他学科）の情報が届かなかった気がする。

・社会は北大に学力を求めている。学力面は東大と京大に任せておけば良いと思う。北大の学生は人並みよりも少し秀でた常識（学力含）と微妙な劣等感を持ち周囲を見渡せる能力がある人間が多いように思う。これは大学自体のゆるい雰囲気によって自由にやらせてもらったことが大きいように思う。優秀な教官が学生をある程度泳がせて大学生活を送らせることが重要。講義が人を育てるのではない。北大はゆるいくらいで良いのだ。

・北海道は外国です。日本だけど日本でないところであってほしい。北大も日本の他大学とは全く別であってほしい。

・古い伝統を活かしつつも、こだわり過ぎずに新しい技術開発や研究に積極的に取り組んでほしい。また社会に出て活用できる知識を深めるようにしてもらいたい。

・夏季休暇の中程にテストがあったことに疑問を感じた。北海道経済の低迷をみると、北大の人気も低迷するのではないかと感じる。古い体質の改善と、北大の役割を認識、関東の大学に負けない情報発信源になって欲しい。

・ゆったりとした環境の中で、サークル活動に楽しみ（大学1～3年）、異なる学部のメンバと交流し、語ることで、非常に多くの視野を得ることが出来たと思う。学部移行後、大学4、大学院での目標にもっと具体的な例えば、起業のための具体的方法論などの具体事例、ビジネス慣習など入ると良いと思います。

・大学で学ぶということは、こういうことであるという強い熱意を感じさせる大学であってほしい。

・私自身は工学部の出身であり、講座配属後は、研究に専念できる恵まれた環境であったと思う。ただ、北海道出身者が多いせいかもしれないが、全体的に大人しく、他の人と議論を尽くして進めていったことはなかったと思う。社会に出てコミュニケーション能力はとても必要になるので、在学中からトレーニングをする機会を作っていくべきであると思う。

・学生生活は部活など満足だったが、学業についてはそうとは言えない。特に教える立場の人が全員ではないが、教える気がない。また講座（ゼミ）の振り分けもジャンケンで行っており、希望する研究ができなかった。今後は変えて欲しい。

・専門科目だけでなく、物事の考え方や自分のキャリアをゆっくり考えられる機会を与えてくれたと思います。キャンパスの緑も当時あたりまえのものとして意識しませんでした。今から思うと豊かな緑の中で勉強できたと思います。日本に大学はいっぱいありますが、北大にはゆっくり流れる時間があり、物事にじっくり取り組む特色があるように感じます。それが良い点でもあります。スピード経営の時代に少しネックになるケースもあります。バランスがむずかしいですね。同じ会社にも窓の方がいっぱいいますが、先輩、後輩の区別なく話ができる“北大卒”というつながりを大切にしたいと思います。

・北海道でしかできない研究、ならではの分野を極めてほしい。この分野については北海道におまかせ！というようなものがあれば、すばらしい研究者や学生が集まり、どんどん発展していくと思う。逆にそういうものがなければ、やはり東京や京都に全てお株をうばわれてしまう。とにかくカラーをどんどん創ってほしい！開拓者 spirit で！！

・学生時代に苦勞をした分だけ、自分の力になりました。「若いときの苦勞は買ってでも、というように、学生時代は色々学ばせた方が良い。学業は当然ながら、部活動ほか、ボランティア、海外留学等は、大学が、卒先して広めるべきだと思います。

・私の周囲には私を含めて大規模かつ複雑なプロジェクトにリーダーシップを発揮して率いていく北大出身者がいません。システムエンジニアリング等にも注力した教育が必要だったと感じます。

・語学教育の充実を図って下さい。

・旧帝大として今後も日本を代表する大学であり続けることを願う。

・教育方法に合理性がない。カリキュラムに合理性がない。例えば、プログラミングに関する合理的なインストラクションがないにも関わらず、電気工学実験でプログラミングを必要としたりしていた。（当時の制御工学講座）。又、基本的な数学、物理学例えば量子力学等の知識が本当に大学教授等にあるのか疑わしいような大学講義が教養課程から通して存在していた。少なくとも、工学部及び教養部の先生方は数学や物理学の知識がないのではないかと思う。私自身、工学部ではあるが、工学部に行くようではダメだと思う。

・学部・学位認定可否基準の明確化及びレベル調整。入学後の進路（学部）変更許可。卒業研究不実施者の救済を無くす。修士・卒業研究不実施者の救済を無くす。学会発表（プレゼン）の義務化。

・国際競争力を養ってほしい。学生たちは、大学卒業後、すべて研究者となる訳ではないため、実務に役立つ様、教育して欲しい。法人化したとはいえ、北海道大学はいち地方大学とならず、全国、世界に通用する様な学生を輩出できる様、お願いしたいと思います。

・大らかな風土はいつまでも維持して欲しい。幅広い知識が得られる教育を続けて頂きたい。

・北大はいい大学です。非常に楽しかった。「北海道」らしさが一番の魅力ではないでしょうか？

・専門教育は、社会に出たら、必ず必要となることを後輩達に伝えてほしい。

・私は大学時代（学部・修士）に部活動にはげんでいました。社会人になって、一番ためになったと感じるのは、その時の経験です。小社会で、社会勉強を経験することが、非常に役に立ちます。そのような経験ができるようなチャンスを与える教育ができればいいと思います。

・北海道という恵まれた地にあるという反面、他大学との交流、競争関係がなく、マイペースである印象がある。学問にはげむという意図では良いが、就職には、学生がもっと高い意識を持つようにしたら良いのではないかと思う次第である。

・学問の内容そのものは今の職場で役に立っていないが、洞察力や、答えに頼らない問題解決力等、多分野で通用するものを多く学んだ気がします。そういった多分野で通用する能力を伸ばせるシステムが発達すればよいのではと思います。

・大学教育の役割とは、（１）物事に対して、様々な視点から考察できる能力を持つ人材を育成すること。（２）その考察を、社会に対して、わかりやすく伝える表現力を持つ人材を育成することだと考えます。この２つの大きな役割を果たすための教育プログラムを構築されることを望みます。

・当時は授業のシラバスが充実していなかったように思う。その授業を受けるために必要な基礎知識が不足していたために理解できない授業があった。最近は充実しているのでしょうか。実社会に出て使う最低限のスキルを学ばせたほうがよいと思う。特に効果的なプレゼンテーション・スキル、英会話、英語での質疑応答、等。首都圏で働いていて思うことだが、北海道大学の研究活動はあまり知られていない。（特に工学系は）しかし、仕事上関係する人で、卒業生は多いし、それぞれの分野で一線で活躍している。入試や卒業時にあまり伸びていないため、社会に出てからの伸びしろが長いのではないかと思います。

・校風は環境もよく素晴らしいと思います。ただし、あまりにも学生に「やさしい」かと思います。優秀な学生づくりのためには、学生の自主性のみを重んじるだけでなく学習の強要ではなく競争をさせることで、意欲的に取り組み、かつ社会への適応力を養うことができるのでは、と思います。

・大学の時は、自分から積極的に学習する姿勢が無かったことが勿体なかった様に思います。自分のことは棚に上げてしまいますが、卒業よりも入学の方が難しい現状に問題を感じています。

・社会人博士コースについて、これまでの論文などに応じ、学位論文提出（審査）までの期間が変更されるなど、柔軟な対応を期待したい。例えば、通常3年かかる所を、発表論文の数によっては、1年の在籍で、論文審査可能など。或いは、論文博士制度の継続をお願いしたい。

・教養については時間内だけ講義していればよいという先生が多かったように思う。何を伝えたいか何を学んでもらいたい理解不能であった。学部では他の大学からこられた先生も多く内容的にも面白かったが、それと比較して北大出身の先生には新しさがなかった。保守的であった気がする。

・学生という世の中を客観的に見られる時期に、札幌で6年間過ごすことができたことは、私の人生において下記の点でとても重要であった。1. 大自然を体験できた。（ワンダーフォーゲル部での活動）2. 同じ価値観を持った仲間が沢山できた。3. 科学的・論理的思考が養えた。4. 北海道の持つ大らかさを身につけることができた。5. 地球環境問題など、グローバルな視点を持つことができた。今の入試制度の事は良くわかりませんが、当時の様に入学してから自分の進路を選べるのは、とても良い事だと思います。高校生では、学科の内容は、よく分からないと思います。他大学にない特色を強調するのであれば、やはり北海道の大自然ではないでしょうか。札幌の様に、適度に文化的で尚且、自然が沢山ある環境は貴重だと思います。地球環境、森林、自然、木などをキーワードに取り組めば、きっと優秀な人材が集まると思います。2007年正月1月1日新聞に掲載された一流企業の広告を見れば、それは一目瞭然です。

・大学では研究の為の研究に取り組んでいる傾向があり、研究成果の適用先があいまいな状態で推進しているものと思います。研究の目的が、社会、企業にどんなメリットがあり、どう結びつき展開されるかを、明確にして、指導をお願いしたい。又、学科外メンバーとの交流の機会を増やし、プレゼンテーション能力、交渉力、調達能力を育てる指導も宜しくお願い致します。追）。自分にとって北大での6年間は国土、環境ともにBestであり、今でも札幌での勤務になっても、即O.K!と回答出来る程満足した6年間でした！

・学生時代に過ごす環境としては、学問以外も含め最適であると思っています。今後も自然と共生しているイメージを保った学校創りに取り組んで欲しいです。

・就職して感じることは、北大OB・OGのみな様のご活躍の幅の広さが、非常に広いと思いました。この良き伝統を継承してゆきたいと思います。国際化が一命題となりつつある昨今、英語力は必須だと考えます。論文作成、発表など、英語を自ら使う場面を設定し、自分のものにすることが必要だと思います。社会の中では、主体性が問われます。自らの意志で課題を探し、解決する力、そして、課題が大きければ集団で集中して取り組む力が必要です。以上をまとめれば、大学教育の中で最も重要なプログラムは、論文作成にあると思います。考える筋通を立て、他人に自分の意志を伝えることは、社会でも必要な力ですし、作成の過程こそが、自主性を高めるものだと思います。

・編入学制度の廃止。生え抜きの教職員の育成。

・ビジネスをする上で、英語でのコミュニケーション能力は、今後、ますます重要になってくると思います。私は、会社に入ってから、会社内でのビジネス英会話の勉強を約2年間しましたが、自身の英会話能力のなさを思い知らされると共に、ビジネス上、非常に大切なスキルだと感じました。大学でも、英語でのコミュニケーション能力の向上に力を入れていかれた方がよいと思います。（決して読み書きの能力ではなく、聞く話す能力です）

・北海道大学のおおらかな風土の中で、人格形成時期を過ごせたことに、本当に感謝しています。今回のアンケートの主旨には、非常に共感を覚えます。特に問35のような専門領域の教育だけではなく、リーダーシップ、プレゼンテーション等、社会人として必要な基礎能力を高める教育も大学時代に行うことを期待しています。自分も含めて、北海道大学出身者が各分野で活躍することを祈念します。

・海外の研究者と一緒に仕事する際には、専門知識はもちろんですが、もっと幅広い一般教養が必要です。各個人の興味にもよりますが、大学の一般教養で一度勉強したことは役に立ちます。大学の1～2年生で幅広く一般教養を教えることは、卒業後、何年もたってから、とてもその学生にとっては役立ち、海外の人に尊敬される要因になると思います。

・北海道という一つの島にあるため、東大が日本一であるにもかかわらず世界のスタンダードとかけはなれてしまっているのと同じ様に、北大も日本のスタンダードとはなれてしまっている感を東京に出て改めて感じている。旧帝としてのほこりを持つことも大切であるし、多くの道産子が多分北大に入学することから、単なる入試難易度以上に幅広い学生が入学してきていることも事実である。彼らの能力を伸ばすために、道内だけではなく幅広く全国、全世界の企業や卒業生と連携して学生に刺激を与えられる環境を与えてあげてほしい。教員が卒業生から多く輩出されていることも誇りでもあるが、人材交流をもっと必要と思う。学位も真に審査してこそ、学位授与可能な大学としての格を保てると思う。それから、単に教育機関として道内外の学生を道外に流出させてしまうだけではなく、道内の産業育成にももっと大学としてがんばってほしい。

・「先端技術を理解、それを実用的なモノと結びつけ理解させる」ような教育があると学生は興味をひかれるのでは…。

・就職してから、勉強しても間に合いますが、大学時代に勉強しておけばよかったと思うことが多くあります。大学側から企業へどのような教育をすべきかをアンケートをとるなど、大学－企業間での教育に対し話し合いなども必要ではないかと思います。

・1つの学問をつきつめる課程と、多くを浅く知る（“博学”）を目指す課程の両立。今の時代はどちらだけでもだめだと痛感するので。

・成果を急がれない雰囲気の中での卒論・修論であせらず集中でき充実していました。たくさんの貴重な友人達が出来た！！

・こうして大学教育の成果を調査・研究するというのは、大学を取り巻く環境が少子化や大学の法人化等で厳しくなる中で、非常に有意義なことだと思います。しかしながら疑問もあります。「このアンケートがどう活かされるのか」という点です。例えば学んだことは現在の仕事に役に立っているかという問いは大まかすぎると思います。正直に言えば役に立ったものは多いが、役に立っていないものもあります。役に立ったものが多いので役に立ったという回答をしましたが、これによって各指導教官が満足してしまうならば、逆にこのアンケートはマイナスの作用をすることになるかもしれない。「どう活かされるか」によって回答は変わります。そのことを御留意下さい。先生方、また後輩たちのますますの御健闘を祈念いたします。

・土木イメージはあまり良くないと思いますが、最先端の土木技術は、非常に魅力的で素晴らしいものなので、講義で、施工技術や設計技術などを幅広く紹介して、学生の関心を高めると共に、悪いイメージを改善していく必要があると思います。

・大学時代の卒業論文制作が本当に辛かったのを乗り越えたので、今仕事で辛い事があっても、「あの頃に比べれば何でもない」と思えます。ただ、私の兄弟も北大生でしたが、（色々な要因がありますが）精神面を少しおかしくしてしまいました。こんな時代になっていますので、そのあたりのサポートがしっかりすると思います。

・就職活動に力を入れて、どんな職業があるか知った上で学科を選べると良いと思う。もっと色々な職業を知っていれば違う学科に行っていたと思う。

・教養学部での講師の質が悪かったと思う。自分は統合失調症（旧病名、精神分裂病）になり、会社を辞めたが、この病気は十代、二十代の発症が多いため、学校内において、メンタルヘルスにも取り込んでほしい。

・卒業して北海道を離れて年に1～2回リクルーターとして訪問しています。学生時代は何も思わなかった北大のキャンパスを歩くことが、楽しみのひとつになっています。正直、とても真面目とはいえない学生でしたが、今になって教養などのカリキュラムを受講し直したいと思うことがあります。

・大学全体が、北海道という土地が島国のぬるま湯につかっている感じが学生時代からあった。本州の大学は、もっと競争意識がある様に感じる。（教授を含む。）今後、競争社会に出て行く学生たちが、日本をつくり変えていくんだ、という意気込みをもって、社会に出れる様な教育をしてほしい。北海道大学という枠にしばられ、すがってはいは、今後の社会についていけないと思う。自分も含め、母校から優秀な人材が、

輩出されればこんなうれしいことはない。

- ・現在はどうになっているかはわかりませんが、教員のみなさんにはもっと熱心に指導にあたっていただきたいと思います。一年生のとき、勉強する気マンマンで授業を受けにいったら、最初の10分で教員のやる気のなさが伝わってきて、やる気をなくした覚えがあります。教育というのは人と人とのやりとりなので、教員のやる気のなさはすぐに伝わります。また、授業をおこなう部屋も広すぎて、声が聞こえなかったり、板書の文字がみえなかったこともあり、イライラしました。教える側もやりにくいと思うので改善してほしいと思いました。

- ・廃れるような流れを追う必要は全くないと思います。卒論～大学院の研究室では知識、人間関係共に大変重要な経験をさせていただきました。また大先輩に新渡戸稲造氏がいることを誇りに思います。しかしながら逆に学部生の時には、新渡戸氏の業績・思想について全く知りませんでした。北海道大学の学生は全員、新渡戸氏の業績・思想についてある程度は知っておくべきではないでしょうか。

- ・学生が自主性をもって勉強しない限り、大学では何も身につかないと思う。専門課程では、指導教官から研究者としてのスキルを身につけるための指導をして頂いたが、「教育」という意味では、大学ってプロフェッショナルとは言えない。「研究機関」としては認める。大学で教鞭をとる教官に対する指導能力向上プログラムなどを導入し、「教育」の上でも大学がプロフェッショナルになることを期待したい。

- ・社会人向け講座（通信教育）を充実して欲して欲しい。

- ・3年前に出向先の研修で久しぶりに大学（工学部）を訪問する機会があり、ずい分と様子が変わっているのに驚きました。これからも魅力ある大学であってほしいと思いますし、人材育成、人間形成の場として、国際的に通用する卒業生を多く輩出してもらいたいと思います。

- ・大学での勉強は役に立たないという意見をよく聞きますが、私は、十分役に立っています。東京の大学生に比べると、北海道大学の学生は、プレゼンテーション能力に代表されるアピールする力が弱いので、そこを強めること、また卒業生のネットワークが弱い点が弱点だと思います。北海道大学を選んだことは、私にとってはとても、よい選択でした。大学の運営が難しい時代になりましたが、ますますの発展をお祈りいたします。

- ・専門的知識も重要だけど、社会に出たら、新しい分野の知識が必要になることも多いので、ある目的に対して現状を把握してどこに問題があってそれに対してどのような知識が必要なのか、新しいアイデアの創出、それを他人にいかにか論理的に説明するか等の、プロセス&アプローチの技術の習得も重要と考える。

- ・東京で活躍している北大出身者は、自分も含めてですが残念ながらあまり目立ちません。北海道だけではなく、日本を動かす存在になってほしいと思っています。私も微力を尽くしたいと思います。

- ・北大は知名度の割に学会発表等の対外的な活動が少ないように感じる。もっと積極的にアピールする必要があるのでは。

- ・私は工学部に入学し、大学院まで修了し、自分の専門分野についてはそれなりに知識を得ることができたが、学部時期の一般教養については満足のいく知識は得られなかった。特に文系科目に興味があり、未知の分野について学びたかったが、教養科目の内容が、変に専門的で全く理解できなかったり、シラバス内容とも大きく異なるものがあつた。教養科目でも、シラバス等にしっかりと授業のレベルを明記するなどして、講義をうけ始める前にもある程度わかるようにした方が良いと思う。専攻する分野については詳しくなれるのは当たり前なので、それ以外の知識を得ることが、社会に出た時に最も役立つと思う。教養科目の充実、時に講義する側のやる気、気合いをもっと見せて欲しかったと思う。（自分の専攻した分野については、教授、授業とも満足できた）

- ・社会人になって大きな企業のヒト駒となって、大学は自身を管理する仕組みが薄かったと思っています。ここ数年の時代の変化もあると思いますが。更に時代に先駆けて今後とも立派な大学で居て下さい。一番の強みは環境だと思います。一卒業生として細々と頑張らせて頂いております。

- ・機械工学科で伝統的に行っている、「エンジンの設計図作成」は他大学の講義と比べても、非常におもしろ

ろいと思う。この様な講義をより増やした方が良い。大学内のキレイな景色は、今後もずっと残して欲しい。

- ・教科の枠を越えた講義（教養の総合講義のような）が重要。（例えば、エネルギー関連（エネルギー事情、核燃料サイクル、新エネルギー、省エネ、温暖化等々）をまとめて、複数の講師で講義を行うなど。）

- ・札幌生まれ、札幌育ちで、学校は全て公立で塾とも無縁な私は、東京になじんで、こちらの教育との違いにカルチャーショックを受けました。東京では恵まれた教育環境にある子どもは、塾へ行き、私立へ行き、いい大学に入る一方、はい上がる子どもは少ないように思います。極端に言えばコチコチの階層社会のような感覚すら覚えます。一方、北大は半分は北海道の地方出身者、私のように両親は高卒で、経済的にも豊かではなく、教育にも関心がない家庭の子でも、はい上がることができる余地が残っているし、また、そんな恵まれていないが、活力ある学生がいる。また、中流家庭以上の子息だけでなく、色々な学生がいて、互いの価値感を認め合えるような、しかし、ハイレベルな基礎学力を維持した大学であるし、これからもそうあって欲しいです。コンサバではなく、何か、新しいスゴイことをやりそうな期待感を大学に求めているし、私も命あるかぎり何か面白いことをやり遂げてみたいです。

- ・部活動での経験が非常に役立っています。時間に余裕のあるカリキュラムが必要であると思います。

- ・1) 入学直後は専攻学部が決まっていない教養課程の方が、異なる考えや様々なタイプの人と交わることで、人格教育や幅広い教養（例えば工学部志望の学生が文学や英文学、理学等）を広く勉強できるのではないかと考えます。企業の研究所に入ってくる人材を見ると専門はともかく、幅広い知識（雑学や文学）に関しては？の人が増えている傾向があり、物事を大きくとらえるのが不得手で、組織としての行動や他人に対する関心が薄くなっている気がします。昔の教養部の様な北大方式の学部選択の方がダイナミックな人材が育っていた気がします。それに学生も大学に入ってから目的意識があれば教養時代に大学入試の時と同じくらい在学中に勉強するのではないのでしょうか？2) 学部教育については、教科書とその演習（理論）がありましたが、特に工学教育では、それがどの様に理論が実用化される製品に利用されているかがわからず、boringな授業になっていたと思います。大学院時代、教授の中で産業界と太いパイプを持ち、卒業生の企業の研究者を呼んで、講義をさせて理論と実践をうまく学生に伝えていた興味深い講義があり、今でも印象に残っています。サイエンスとテクノロジーをバランスよく実践で役立つ意義を伝えていくことが重要です。

- ・OB訪問などを通じて、北大生の面接対策で協力をしたことがあるが、成績は優秀であっても面接カード、実際の面接は散々たる人が多くて情けなくなってくる。現在は、そんな人達でも学閥によりなんとか採用されているのが現状であるが、こんなことは近い将来なくなるに違いないので、学生達には、もう少し危機感を持って欲しい。このような背景から、相手の意図をくみとった上で、自分の考えを、自分の言葉で、相手に伝わるように説明できる能力を養えるような教育を重点に置くべきである。

- ・北大は北海道の大学ではなく世界相手の大学。地元にかびすぎずに、ずっと札幌にしていると感覚にぶりますよ。

- ・私の学部・修士課程における担当教官（所属研究室の助教授）は、卒論・修論のいずれにしても、出来る限り学生に解決策を考えさせ、実際にやらせてみせて、ダメならその理由を分析させ、新たな方法を考えさせるという、問題解決能力を発展させるような指導を受けました。これは本人いわく、どんな分野の仕事についても基本は、いかにして解決策を見出し、実践するかということからだそうです。論文自体はたいしたもののは作成できませんでしたが、社会に出てから非常に役立っております。また、新人社員研修の際には、まわりの同期をみると、この点が欠けている人が非常に多く感じました。北大には、今後とも一人でも多くの自らで考え行動できる人を育成していただけるよう期待しています。このアンケート結果が少しでもお役に立てれば幸いです。

- ・一般・教養分野・学部・修士課程いずれにおいても、本人の努力次第で社会に大きく役立てることは、可能です。よく聞く、「社会で学問など役立たない」とは、役立てる方法を知らない人もしくは、努力しなかった人が言うセリフ。工学という技術性の高い分野で、少しでも多くのことを身につけ、自らのスキルを上げてほしい。

・専門、語学は、少人数の討論中心の講義にすると良いと思う。定年退職したら、別の分野の勉強をしたいと思う事はある。

・私を含め、今の学生は勉強に熱心でないことに危惧を感じている。私は、学生時代は大学、大学院の講義や演習が、社会に出て必要なか分からなかった。しかし、いざ社会に出ると、大学の講義や演習で不要なものなど一つもなく、もっと勉強しておけば良かったと、後悔しています。社会人出身の講師、教師軸をもっとやといいれ、産学の乖離を埋めるべきと思います。どうして、今、学んでいる講義演習が必要なのかを説明できる教師が必要では？

・外国語等の基礎科目での教官による講義内容の差が大きい。是正すべき。大学院の講義内容について、単一科目ごとを見ればそれぞれが重要な内容だとは思いますが、全体を見渡すと、一体何を学ばせたいのか理解に苦しむ。

・母校のますますの発展のため、がんばって下さい。

・大学時代はどちらかと言えば部活に力を入れ、学業の方はついていっていたという感が今にしてある。そのときはそれでいいと考えていたが、今は、やはり勉学に力を入れていればよかったとの思いもある。社会にでて後悔しないよう学生の時の勉強の大切さを学生の時に感じることができるようにならないかと思う。

・大学は専門分野の学問を学ぶ場所であるが、大学生はその分野の初心者である。私は在学中に感じた印象だと、教授陣は基礎的事項は早く終らせて応用分野の勉強や先端技術の紹介をしたがっていたように思える。教授陣の基礎と初学者にとっての基礎の考えがズレているからかもしれない。少なくとも私は講義の1～2回目で消化不良になることが多く、講義の終りの方はノートを写しているだけで全く理解していなかった。いつも、基礎に時間かけて教えてくれれば、と思っていた。この考えは社会人になった今でも変わらない。学生時代の勉強は初学者の為の教育だったのか？一部の秀才が研究者になる為の教育ではなかったのではないかとも思う。それがあべき大学の形かもしれないが、現状に不満足な人は多いのでないだろうか。私は理解度は不十分だったが、成績は中の上ぐらいだった（はず）。つまり、半数以上は講義を理解していないことになる。これでは意味がない。リーダーシップや交渉力を向上させるのも悪くないが、じっくり、ゆっくり学問の基礎を教え、現場見学を多くして、幹を太くする教育をしてもらいたいと思う。

・私が入学した時代は理1. 2. 3. 文1. 2. 3. 医・歯の区分で2年間の教養修了時に専門に分かれるシステムでした。各専門学部に分けられた大学がほとんどの中で、東大と同じような北大の入試が気に入る、実際良かったと思っています。

・のびのびとした校風で楽しく講義、スポーツ等すごしました。その校風を保ちつつ、先端の技術、又、プレゼンテーション能力、リーダーシップ等の積極的な人材を育成するような講義があるといいと思います。

・教員は、実社会の情勢と遊離しているところが見受けられるので、産・学間の交流あるいは交換をもっと進めてほしい。文・理融合、技術と政策の両方に、精通した人材教育を進めてほしい。

・研究には長けるが学生への指導（講義、人間性、協調性、雰囲気作りなど）に関して不満を持っている。両方を兼ね備えた組織（教職員、学生とも）であってほしい。企業で仕事をしてみると「勉強が出来る人」＝「仕事出来る人」ではないことを思い知らされる。純粹、柔軟性、意欲、協調性など、人を育てることをもっと意識してほしいと思う。

・建築を学ぶ、あるいは教えるということは、非常にむずかしいものだと思います。（一口では言えない…）でも、社会に出た時、即戦力にはなりにくい教育が多かったかと思います。（北大では特に…）人脈や、大きな所を“とらえる力”はついたとは思いますが、社会に出て学んだことを生かせる私に、社会との連携を保った教育と研究というのが、あって良いかと思います。

・基礎的な学習・実験と論理的思考を訓練することが重要であると感じている。また、グローバル化に伴い語学力の充実が今後ますます必要と感じる。（英語・中国語など）

・専門性は別にして、現在の研究・開発の仕事の支えになっていると感じています。工学系の製造業は北海道に少ない為に教職員、学生共に企業との接点、情報をつかみにくい状況にあったと思います。今後、大学

だけの力では難しいと思いますが、企業（製造業）を北海道に誘致し、積極的に社会との関わりを持っていく努力が必要だと思います。

- ・自身が大学時代に受けた教育には大変満足しています。最近の教育内容はよくわかりませんが、最近の、大学を卒業してきた若者のコミュニケーション力不足が気になります。もちろん、全員がそういうわけではありませんし、北大生というわけではありません（北大生は優秀だと感じています）。そういう意味での教育にも力をいれていただければと思いますが、例えば最も基本的な「言葉使い」という点では、大学というよりはそれ以前の問題ですね。難しいところです。

- ・大学時代に受けた教育は、研究者が片手間に学生の相手をしているという感じが強かった。学生を教育する方法を工夫し、技術（スキル）として教員が身につけてほしい。

- ・大学時代に所属した精密工学科は、定員30の小所帯であり、学生同志はもとより、教官に対しても非常に親近感の持て得る環境であった。さらに機械・電気・電子応用物理に至幅広い学問分野に接する事のできるユニークさも有り、学生時代に精密工学科に居られた事を感謝している。近年の改組で、精密工学科が消滅し、他の大学等と同じ様な組織になってしまった事は、残念である。近い将来、名は同じでなくとも幅広い分野で、小人数教育を行える様な学科の誕生を切に望む。

- ・自由な校風はとても素晴らしいと思います。この特徴を強みとして、創造性の高い「知恵」を使わなければならない業務分野で卒業生が大いに活躍する仕組みをこれからも作っていった下さる様に期待しています。

- ・在学中、他学部への転入を真険に考えた時期がありました。高校生にとって、大学の学部でどのような事を学ぶのかよく分からずに学部を決めることは多々あると思います。学部の専門課程に進んだ後、本当にやりたいことが見つかる人も少からずいると思います。他学部への出入りをしやすくすることは決して無駄にはならず、多様な人材を輩出する可能性を広げます。私自身はまるで高校の延長のような意識で学部の講義をとらえてしまい北大の持つ魅力をあまり活かすことができませんでした。今後ますます北大が新しく変化し続けることで、北大生がその能力を存分に発揮していくことを願っています。北海道大学が世界的にも独創的な研究・教育機関へ発展し続けていくことを祈っています。

- ・自分で調査・分析しまとめる能力が重要と思われる。

- ・北海道大学から受けた影響は、特に雄大な自然環境と伝統に起因するものが大きいと強く感じます。是非、このような環境は維持しつつ、進化してほしいと願っています。気持ちの大きな後輩達が育つことを期待しています。

- ・不真面目な学生だったので、今思えばもっと勉強しておいてもよかったかとも思いますが、専門外の仕事でも、学んだことは何かしら使われており、決して無駄だったとは思っていません。

- ・専攻にとらわれずに幅広い知識が必要であるし、また、新しい情報に対し常に敏感であるべきであると思う。よって大学にいる時から、慣れておくべきだと思う。

- ・私は現在、NPO 法人を立上げ、地球温暖化問題に取り組んでいます。社会の中でこのような活動をするとき、大学時代に学んだ学問（衛生工学）はとても自分の中の大きな財産となり、貴重な4年間だったと、心から思っています。（ただ…もっと、しっかり勉強すればよかったとも思っています）。又、大学時代の同窓生、そして先輩方（特に会社（富士電機）における先輩方）とのつながりも大きく、人脈が大変ありがたく感じています。欲を言いますと…社会で諸問題を解決していこうとすると、専門分野の学問だけでなく、例えば環境問題でしたら、経済的なこと、法律、社会心理学、行政学、等々、総合的な力も求められてきます。また、人をまとめあげて、事業を推進していく上では、リーダーとしての力も求められてきます。こういった事なども、少し学生時代に学ぶことができると良かったなあ…と思います。こういった事を体系的に学ぶ機会はなかなかありませんので…。大学も今後ますます地域と共にその課題と一緒に取り組むようになる事を期待しています。

- ・仕事をしていると大学の講義の中で出てきたことが役立つことがあったりする。学生の時は学んでいるこ

とがどのようなことにつながるのか見えにくかった。そういった点を改善できればもっと優秀な学生を送り出すことができるのではないかと思う。

- ・海外勤務より、戻ってきたばかりの為。英語教育を真剣に考えて頂きたい。
- ・現在の仕事の中で、大学院時代に学んだ知識を生かす機会はなかなかありませんが、研究室で失敗して悩んだり成功してうれしかった思いをしたことが、今毎日仕事をする上での自分の自信になっているような気がします。社会人になってからは、学生時代にはあまり無かった、多くの人との交わり合いや、スピード、プレッシャーが必要になってきましたが、これは社会人になって経験して学ぶことで、学生時代は、逆に社会人ではできない、多くの時間の中で、やりたいことを自由に夢中になってすることが重要だと思いました。大学院では、研究室の教授、助教授含め、とても良い先生が多く非常に有意義な時間をすごせました。私は自由に学生生活を送らせてもらいましたが、北海道大学はこれからも自由で活発な大学であってほしいと思います。
- ・もっと実務に役立つ授業。外部とのつながり。会社とのインターンシップなど交流。コンピューター技術の活用。有名人の講義など必要と思う。
- ・在学中に「改革」が始まったと記憶しているが、何だかうわべだけだった又はかえって悪くなったと感じた。（工学部だけかもしれませんが。）例えば「改革」で学科名や研究室名が変わっていったが、かえって何をやっている学科、研究室なのか、わかりにくくなった。横文字の名前のものが増えたが、何でも横文字にすればいいというものではない。横文字にすると、かえって分かりにくく、あいまいになったものがあったと思う。授業科目も、その学科の核となる基礎科目というものがあるはずだが、先端分野の科目を取り入れようとするあまり、基礎科目が軽視されていったように思える。しかし基礎科目をしっかり理解していないと、結局、先端分野も、うわべだけを眺めただけで、理解できなかった。基礎をしっかり積み上げた上で、応用力を、社会で必要となる、人と仕事をする能力を身につけていくべきと感じています。

本学卒業生に対する大学教育の成果に関するアンケート調査票

- いただいた回答は、統計的に処理しますので、個別の回答結果を外部に公開することはありません。
- 回答に迷う場合には、最も近いものを選んで回答して下さい。ただし、回答しづらいあるいは回答したくない設問については、空欄でも結構です。
- 設問によっては、「一つだけ○」「番号を記入」「複数可」などと明記されていますので、指示にしたがって回答して下さい。
- 本アンケートは、平成19年1月31日(水)までに同封の返信用封筒でお送り願います。

〒060-0808 札幌市北区北8条西8丁目 クラーク会館
北海道大学 キャリアセンター

お問い合わせ先

調査の趣旨や実施方法について

北海道大学 キャリアセンター センター長 工藤 昌行
Tel: 011-706-3270 E-mail: huccd@academic.hokudai.ac.jp
URL: <https://ccsup.academic.hokudai.ac.jp/>

調査票の記入方法などについて

北海道大学 高等教育機能開発総合センター 助教授 亀野 淳
Tel: 011-706-6928 E-mail: jkameno@high.hokudai.ac.jp

I. あなたについてお伺いいたします。

問1 あなたの年齢（2007年1月1日現在）を記入して下さい。 _____ 歳

問2 あなたの性別について、該当するほうに○をつけて下さい。

1 男

2 女

問3 あなたの高校卒業時及び現在の居住地について都道府県名を記入して下さい（海外の場合、「海外」に○をつけて下さい）。

高校卒業時 _____ (都・道・府・県) 海外

現在 _____ (都・道・府・県) 海外

問4 あなたの経歴について該当するもの一つだけ○をつけて、以下、指定された場所に進んで回答をお願いいたします。なお、大学院の進学には社会人からの入学も含めます。

1 北海道大学の学部を卒業し、大学院修士課程には進学・修了していない

2 北海道大学の学部を卒業し、北海道大学の大学院修士課程を修了した

3 北海道大学の学部を卒業し、北海道大学以外の大学院修士課程を修了した

4 北海道大学以外の学部を卒業し、その後北海道大学の大学院修士課程を修了した → Ⅱ (P2)へ

→ Ⅱ (P2)へ

→ Ⅲ (P4)へ

Ⅱ. あなたの学部生活や現在のお仕事との関連についておうかがいします。

問5 あなたが卒業した北海道大学の学部・学科名と卒業年（西暦）・月を記入して下さい。

_____学部_____	_____学科_____	_____年_____	_____月卒業
--------------	--------------	-------------	----------

問6 学部（全学教育または一般教養、学部専門教育）におけるあなたの勉強の熱心度についておうかがいします。それぞれの項目について該当するものに一つずつその番号に○をつけて下さい。

	熱心	やや熱心	やや不熱心	不熱心	受講しなかった
講義科目（全学教育または一般教養）	4	3	2	1	9
講義科目（学部専門）	4	3	2	1	9
外国語	4	3	2	1	9
演習（全学教育または一般教養）	4	3	2	1	9
演習（学部専門）	4	3	2	1	9
実験・実習（全学教育または一般教養）	4	3	2	1	9
実験・実習（学部専門）	4	3	2	1	9
ゼミ（学部専門）	4	3	2	1	9
卒業論文作成（学部専門）	4	3	2	1	9
学部教育全般	4	3	2	1	

問7 学部におけるあなたの勉強以外の活動についておうかがいします。以下の項目のうち、あなた自身が積極的に取り組んだと思うものに○をつけて下さい（複数可）。

1 部活動、サークル活動	2 アルバイト	3 ボランティア
4 インターンシップ	5 留学	6 海外旅行
7 北海道大学以外での勉強	8 その他（	9 特になし

問8 あなたが北海道大学に進学した最も大きな理由を、次の選択肢の中から一つだけ○をつけて下さい。

1 自宅から通学が容易であるから	2 北海道にあこがれていたから
3 北海道大学にあこがれていたから	4 勉強したい分野があったから
5 指導してほしい教員がいたから	6 学力（偏差値など）が適当だったから
7 その他（	）

問9 あなたが卒業した学部を選択した最も大きな理由を、次の選択肢の中から一つだけ○をつけて下さい。

1 勉強したいテーマがその学部にあったから	2 就職に有利であると思ったから
3 将来の希望する職業分野を勉強できるから	4 資格の取得が有利であるから
5 指導してほしい教員がその学部にあったから	6 学力（偏差値など）が適当であったから
7 将来の希望が明確でなかったため、進路選択の幅が広い学部を選択した	
8 その他（	）

問10 あなたが大学に入学した試験の形態を、次の選択肢の中から一つだけ○をつけて下さい。

1 一般入試	2 推薦入試（AO入試を含む）	3 編入学	4 その他（
--------	-----------------	-------	--------

問 11 北海道大学の学部で得たものは何ですか。該当するものに○をつけて下さい（複数可）。

1 専門的な知識・技術	2 幅広い知識・教養
3 論理的思考能力	4 表現力・プレゼンテーション能力
5 資格・免許	6 友人・仲間
7 体力	8 その他（ ）

問 12 あなたは学部卒業時にどのような進路選択をしましたか。該当するものに一つだけ○をつけて下さい。

1 就職した	2 自分で事業（自営）を始めた
3 北海道大学の大学院に進学した	4 他大学の大学院に進学した
5 仕事にも就かず、学校にも行かなかった	6 その他（ ）

問 13 あなたの学部卒業後の居住地について都道府県名を記入して下さい（海外の場合、「海外」に○をつけて下さい）。

北海道大学学部卒業直後	_____（都・道・府・県）	海外
-------------	----------------	----

問 14 あなたが北海道大学の学部時代に学んだ専門分野は、現在の仕事とどの程度関連がありますか。該当するものに一つだけ○をつけて下さい。

1 大いに関連がある	2 やや関連がある	➡ 問 15 へ
3 あまり関連がない	4 全く関連がない	
5 現在は仕事に就いていない		➡ 問 16 へ

問 15 あなたが北海道大学の学部時代に学んだことは現在の仕事に役立っていますか。それぞれの項目について該当するものに一つずつその番号に○をつけて下さい。

	かなり役立 っている	やや役立 っている	あまり役立 っていない	全く役立 ていない	受講しな かった
講義科目（全学教育または一般教養）	4	3	2	1	9
講義科目（学部専門）	4	3	2	1	9
外国語	4	3	2	1	9
演習（全学教育または一般教養）	4	3	2	1	9
演習（学部専門）	4	3	2	1	9
実験・実習（全学教育または一般教養）	4	3	2	1	9
実験・実習（学部専門）	4	3	2	1	9
ゼミ（学部専門）	4	3	2	1	9
卒業論文作成（学部専門）	4	3	2	1	9
学部教育全般	4	3	2	1	

問 16 学部教育でもっと熱心に取り組めばよかったと思う授業を、上位3つまであげてその番号を記入して下さい。

第 1 位	第 2 位	第 3 位
1 講義科目（全学教育または一般教養）	2 講義科目（学部専門）	
3 外国語	4 演習（全学教育または一般教養）	
5 演習（学部専門）	6 実験・実習（全学教育または一般教養）	
7 実験・実習（学部専門）	8 ゼミ（学部専門）	
9 卒業論文作成（学部専門）	10 その他（ ）	

北海道大学の大学院修士課程には進学・修了しなかった方 → IV(P5)へお進み下さい
 北海道大学の大学院修士課程を修了した方 → 以下のⅢへお進み下さい

Ⅲ あなたの大学院修士課程での生活や現在のお仕事との関連についておうかがいします。

問 17 あなたが修了した北海道大学の大学院修士課程の研究科・専攻名と卒業年（西暦）・月を記入して下さい。

_____研究科_____専攻_____年_____月 修了

問 18 大学院修士課程におけるあなたの勉強の熱心度についておうかがいします。それぞれの項目について該当するものに一つずつその番号に○をつけて下さい。

	熱心	やや熱心	やや不熱心	不熱心	受講しなかった
講義科目	4	3	2	1	9
演習	4	3	2	1	9
実験・実習（調査なども含む）	4	3	2	1	9
学会発表	4	3	2	1	9
修士論文作成	4	3	2	1	9
大学院教育全般	4	3	2	1	

問 19 大学院修士課程におけるあなたの勉強以外の活動の活動についておうかがいします。以下の項目のうち、積極的に取り組んだと思うものに○をつけて下さい（複数可）。

1 部活動、サークル活動	2 アルバイト	3 ボランティア
4 インターンシップ	5 留学	6 海外旅行
7 北海道大学以外での勉強	8 その他（	9 特になし

問 20 北海道大学の大学院修士課程で得たものは何ですか。該当するものに○をつけて下さい（複数可）。

1 専門的な知識・技術	2 幅広い知識・教養
3 論理的思考能力	4 表現力・プレゼンテーション能力
5 資格・免許	6 友人・仲間
7 体力	8 その他（

問 21 あなたは大学院修士課程修了時にどのような進路選択をしましたか。該当するものに一つだけ○をつけて下さい。

1 就職した	2 自分で事業（自営）を始めた
3 北海道大学の大学院（博士後期課程など）に進学した	
4 他大学の大学院（博士後期課程など）に進学した	
5 仕事にも就かず、学校にも行かなかった	6 在学中の仕事を修了後も続けた
7 その他（	

問 22 あなたの大学院修士課程修了後の居住地について都道府県名を記入して下さい（海外の場合、「海外」に○をつけて下さい）。

北海道大学大学院修士課程修了直後	（_____都・道・府・県）	海外
------------------	----------------	----

問 23 あなたが大学院修士課程時代に学んだ専門分野は、現在の仕事とどの程度関連がありますか。
該当するものに一つだけ○をつけて下さい。

1 大いに関連がある	2 やや関連がある	➡ 問 24 へ
3 あまり関連がない	4 全く関連がない	
5 現在は仕事に就いていない		➡ 問 25 へ

問 24 あなたが大学院修士課程時代に学んだことは現在の仕事に役立っていますか。それぞれの項目
について該当するものに一つずつその番号に○をつけて下さい。

	かなり役立 っている	やや役立 っている	あまり役立 っていない	全く役立 ていない	受講しな かった
講義科目	4	3	2	1	9
演習	4	3	2	1	9
実験・実習（調査なども含む）	4	3	2	1	9
学会発表	4	3	2	1	9
修士論文作成	4	3	2	1	9
大学院教育全般	4	3	2	1	

問 25 大学院修士課程時代にもっと熱心に取り組めばよかったと思う授業を、上位 2 つまであげてそ
の番号を記入して下さい。

第 1 位 _____	第 2 位 _____
1 講義科目	2 演習
4 学会発表	5 修士論文作成
	6 その他（ ）

以降は原則としてすべての方にご回答願います。

IV. 学部卒業時および大学院修士課程修了時の就職活動や最初のお仕事についておうかがいしま
す。

問 26 就職先を決定するに当たって最も重視したことは何ですか。該当するものに一つだけ○をつ
けて下さい。

1 大学での専門分野との関連	2 業種
3 地域条件（勤務地・転勤の有無など）	4 規模
5 知名度やイメージ	6 経営方針
7 安定性	8 給与
9 OBやOGの存在	10 勤務時間・休暇・福利厚生など
11 その他（ ）	

問 27 現在のお仕事は学部卒業または大学院修了直後に就いた最初のお仕事と同じ会社・団体・組織
ですか。該当するほうに○をつけて下さい。なお、出向や転勤等などで異動している場合は、同じ
会社・団体・組織として下さい。

1 はい	➡ V. 問 30 にお進み下さい
2 いいえ	➡ 次の問 28 から順に回答願います。

問 28 最初に就いたお仕事から転職または退職された理由は何ですか。最も大きい理由に一つだけ○をつけて下さい。

1 新たなステップアップを図るため	2 キャリアを買われたから
3 より大学の専門性に近かったから	4 収入面での不満
5 労働時間面での不満	6 職場の人間関係
7 自分の関心に合わなかった	8 能力不足
9 解雇や倒産など	10 結婚
11 出産・育児	12 その他 ()

問 29 学部卒業または大学院修了直後に就いた最初のお仕事の勤続年数を記入して下さい。

_____年 _____ヶ月

V. 現在のお仕事や心境などについておうかがいします。

問 30 あなたは現在働いていますか。以下の1または2のいずれかに○をつけて下さい。さらに、それぞれa~iについても一つだけ○をつけて下さい。

1 働いている	a 企業・団体等で正規社員・職員として働いている b 企業・団体等でパート・アルバイト・派遣社員などで働いている c 自営 d 家業の手伝い e その他 ()	→ 問 31 へ		
2 働いていない				
f 専業主婦・主夫 g 学生 h 上記以外で無職 i その他 ()			→ 問 34 へ	

問 31 現在働いている企業・団体等の業種について、該当するものに一つだけ○をつけて下さい。

1 農林水産業	2 鉱業	3 建設業	4 製造業
5 電気・ガス・熱供給・水道業	6 情報通信業	7 運輸業	
8 卸売・小売業	9 金融・保険業	10 不動産業	11 飲食店、宿泊業
12 医療、福祉〔病院、保健所、福祉事務所、老人福祉・介護事業など〕			
13 教育、学習支援業〔小・中・高等学校、大学、図書館、学習塾、英会話など〕			
14 複合サービス事業〔郵便局、協同組合など〕			
15 サービス業（他に分類されないもの）〔法律事務所、経営コンサルタント業、旅行業、広告業など〕			
16 公務（他に分類されないもの）〔国の行政機関・司法機関、地方公共団体の行政機関など〕			
17 その他 ()			

問 32 あなたの現在の年収（税込）について、該当するものに一つだけ○をつけて下さい。

（※回答しづらいあるいは回答したくない場合は、空欄でも結構です）

1 200 万円未満	2 200 万円以上 400 万円未満
3 400 万円以上 600 万円未満	4 600 万円以上 800 万円未満
5 800 万円以上 1,000 万円未満	6 1,000 万円以上

問 33 現在のお仕事の勤続年数を記入して下さい。

_____年_____ヶ月

問 34 あなたの (A) 現在の仕事及び (B) 生活 (仕事を除く) の満足度はどの程度ですか。それぞれ一つずつ選んでその番号を記入してください。なお、現在、仕事に就いていない方は (B) のみご記入下さい。

(A) 現在の仕事 _____	(B) 生活 (仕事を除く) _____
1 非常に満足している	2 どちらかといえば満足している
3 どちらかといえば不満である	4 かなり不満である

問 35 (A) あなたの現在の仕事上、重要なもの、(B) あなたが現在仕事をする上で不足していると思うもの、(C) 北海道大学においてもっと育成すべきであると思うもの について以下に示している 21 の能力のうち、それぞれ上位 3 つまであげてその番号を記入して下さい。なお、現在、仕事に就いていない方はこれまでの仕事の経験を踏まえてお答え下さい。

1 大学で学んだ学問分野や専門領域に関する知識	2 その他の学問分野や専門領域に関する知識
3 分析的に考察する力	4 新たな知識を素早く身につける力
5 交渉力	6 プレッシャーの中で力を発揮すること
7 新たなチャンスに機敏に対応する力	8 複数の活動を調整する能力
9 時間を有効に使う力	10 他の人と効率よく仕事をする力
11 他の方の知識や能力を結集する力	12 他の方々に意図を明確に伝える力
13 リーダーシップ	14 コンピュータやインターネットを活用する力
15 新たなアイデアや解決策を見つけ出す力	16 問題点を発見する力
17 自身や他の方の考えを常に問い直す姿勢	18 プレゼンテーション能力
19 記録、資料、報告書等を作成する力	20 外国語で書いたり話したりする力
21 その他 (_____)	

(A) あなたの現在の仕事上、重要なもの

第 1 位 _____ 第 2 位 _____ 第 3 位 _____

(B) あなたが現在仕事をする上で不足していると思うもの

第 1 位 _____ 第 2 位 _____ 第 3 位 _____

(C) 北海道大学においてもっと育成すべきと思うもの

第 1 位 _____ 第 2 位 _____ 第 3 位 _____

問 36 現在のあなた自身の北海道大学との関わりで以下のうち、該当するものに○をつけてください (複数可)。

1 同窓会の活動や会合に参加している
2 北海道大学の教職員と仕事上の付き合いがある
3 北海道大学の教職員と個人的な付き合いがある
4 あなたが勤務している企業・団体への就職を希望している学生と会う (OB・OG 訪問への対応)
5 現在、北海道大学の大学院で勉強をしている
6 北海道大学で開催される公開講座や研究会などに参加している
7 北海道大学のホームページをよく閲覧している
8 その他 (_____)
9 特になし

問 37 北海道大学では現在、大学院入試において社会人を対象とした特別選抜を実施するなど社会人のための学習環境の充実にも力を入れています。あなたは、現在の仕事や生活を充実させるために、大学や大学院あるいは専門学校などでさらに勉強したいと思いますか。当てはまるほうに一つだけ○をつけて下さい。

1 思う → 問 38へ

2 思わない → 問 40 へ

問 38 勉強したいのはどんな分野ですか。当てはまるほうに一つだけ○をつけて下さい。

1 大学や大学院で学んだものと同じ分野

2 大学や大学院で学んだものと異なる分野

問 39 問 38 でお答えになった分野をどのようにして学びたいですか。最も希望するものに一つだけ
○をつけて下さい。

1 大学院博士課程に大学院生として入学

2 大学院修士課程または専門職課程に大学院生として入学

3 大学院で特定の科目を受講

4 大学の学部に大学生として入学

5 大学の学部で特定の科目を受講

6 大学以外の専門学校や各種学校で勉強

7 その他 ()

問 40 大学時代に受けた教育や北海道大学についてのご意見・ご感想がありましたらお書き下さい。



ご協力ありがとうございました

平成 18 年 12 月 20 日

北海道大学文学部同窓会
北海道大学経済学部同窓会
社団法人札幌農学振興会
北海道大学工学部同窓会

同 窓 生 各 位

北海道大学

理事・副学長 佐伯 浩

拝啓 時下ますますご清栄のこととお喜び申し上げます。

平素は北海道大学の各種行事にご高配を賜り厚くお礼申し上げます。

北海道大学は、法人化を迎えて 3 年目となり、ご承知のように大学は独自の中期目標・中期計画を設定し、その達成度を問われることになっております。北海道大学も世界最高の研究・教育水準の設定目標に向かって、日々努力をしているところです。

このたび、本学では、卒業生の皆様に「本学卒業生に対する大学教育の成果」についての調査研究を行うことになり、各学部・各研究科の同窓会及び北海道大学連合同窓会の御協力を得まして実施することといたしました。

つきましては、ご多忙の折、突然のお願いで至極恐縮に存じますが、同封のアンケートに記載して平成 19 年 1 月 31 日までに返送いただければ幸甚です。

なお、アンケートは、北海道大学高等教育機能開発総合センター及びキャリアセンターの協力を得て実施しますが、北海道大学の今後の教育改善への参考に資するために、何卒ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

敬 具

※

高等教育機能開発総合センターは、教養部が廃止された平成 7 年に設立され、全学高等教育のあり方に関して研究を行っているセンターで、また、キャリアセンターは、在校生・卒業生に対する就職支援及び在校生へのインターンシップなどのキャリア教育支援を行うために法人化と共に発足した組織です。

本学卒業生に対する大学教育の成果に関する調査研究実施要領

調 査 項 目	本学卒業生に対する大学教育の成果に関する調査研究
調 査 目 的	本学の卒業生に対してアンケート調査を実施し、卒業後の状況や職業生活に及ぼす大学教育の効果などを明らかにすることを目的とする。
実 施 時 期	平成 18 年 11 月 1 日～平成 19 年 3 月 31 日
対 象 学 部 ・ 研 究 科	文学部・文学研究科，経済学部・経済学研究科， 農学部・農学研究科，工学部・工学研究科 4 学部・4 研究科
調 査 対 象 者	卒業後（大学院修士課程修了後），5 年（2001 年度）， 10 年（1996 年度），20 年（1986 年度）の卒業生，修了生
調 査 項 目	・ 卒業後の状況（就職活動，職業経歴など） ・ 現在の活動，仕事（現職，雇用形態など） ・ 大学教育と仕事との関係（専攻分野と仕事との関係など） ・ 大学教育に対する要望など
実 施 母 体	高等教育機能開発総合センター，キャリアセンター
締 め 切 り	平成 19 年 1 月 31 日（水）
送 り 先	〒060-0808 札幌市北区北 8 条西 8 丁目 クラーク会館 北海道大学 キャリアセンター 宛
問い合わせ先	高等教育機能開発総合センター 生涯学習計画研究部 亀野 淳 TEL：011-706-6928， E-mail：jkameno@high.hokudai.ac.jp キャリアセンター 工藤 昌行 TEL：011-706-3270， E-mail：uccd@academic.hokudai.ac.jp

**本学卒業生に対する大学教育の成果に関する調査研究
－卒業生に対するアンケート調査結果－
報 告 書**

発行機関	北海道大学高等教育機能開発総合センター 〒060-0817 札幌市北区北 18 条西 8 丁目		
発行責任者	センター長	脇田	稔
担 当	准教授	亀野	淳 (TEL : 011-706-6928)
	キャリアセンター長	工藤	昌行 (TEL : 011-706-3270)
協 力	北海道大学連合同窓会, 北海道大学文学部同窓会, 北海道大学経済学部同窓会, 社団法人札幌農学振興会, 北海道大学工学部同窓会		
発 行	平成 2 0 年 1 月		
